富 山 県 文 化 振 興 財 団
埋蔵文化財発掘調査報告第81集

浜黒崎町畑遺跡
浜黒崎悪地遺跡　発掘調査報告

― 県営農地整備事業浜黒崎地区に伴う
埋蔵文化財発掘報告 ―

２０２４年

公益財団法人　富山県文化振興財団
埋　蔵　文　化　財　調　査　課

浜黒崎町畑遺跡
浜黒崎悪地遺跡　発掘調査報告

― 県営農地整備事業浜黒崎地区に伴う
埋蔵文化財発掘報告 ―

２０２４年

公益財団法人　富山県文化振興財団
埋　蔵　文　化　財　調　査　課

序

本書は、県営ほ場整備事業に先立ち、令和５（2023）年度に実施した富山市浜黒崎町畑遺跡および浜黒崎悪地遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

これらの遺跡が立地するのは西を神通川、東を常願寺川にはさまれた平坦な低地で、現在は水田地帯となっています。なお、海岸線からの距離は浜黒崎町畑遺跡で約500m、浜黒崎悪地遺跡で約1.3kmと至近にあります。

発掘調査の結果、浜黒崎町畑遺跡では掘立柱建物や併走する２条の断面逆台形の溝、井戸などがみつかり、調査地は中世前半の集落と考えられます。浜黒崎悪地遺跡では、常願寺川の旧支流とみられる流路や古代～中世の集落の一部を確認しました。

また、浜黒崎町畑遺跡では幕末の安政飛越地震によって引き起こされたとみられる噴砂を発見し、文献との整合性を示す一つの証拠を得ることができました。

なお、浜黒崎地区ではこれまで本調査は行われておらず、今回の調査が嚆矢となり、貴重な資料となりました。

本書をまとめるにあたり、ご協力とご指導を頂きました関係機関および関係諸氏に厚く感謝申し上げます。

令和６年３月

公益財団法人 富山県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 課

例　　言

1　本書は富山県富山市浜黒崎に所在する浜黒崎町畑遺跡、浜黒崎悪地遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は富山県からの委託を受け、公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査課が行った。
本遺跡の発掘調査期間と本書刊行までの整理期間は下記のとおりである。

調査期間　　令和５（2023）年５月22日～６月９日
　　令和５（2023）年10月２日～11月21日
整理期間　　令和５（2023）年６月12日～令和５（2023）年９月29日
　　令和５（2023）年11月22日～令和６（2024）年３月22日

3　調査に関する全ての資料と出土遺物は、本書刊行後、富山県埋蔵文化財センターで保管する。

4　遺跡の略号は、市町村番号（富山市は01）に遺跡名のアルファベット頭文字を続け、浜黒崎町畑遺跡を「01ＨＭ」、浜黒崎悪地遺跡を「01ＨＡ」とし、遺物の注記にはこの略号を用いた。

5　本書の執筆および編集は、町田賢一が担当した。なお、第Ⅲ章６と第Ⅳ章７の自然科学分析については一般社団法人文化財科学研究センターに委託し、金原正子が執筆した。

6　本書で使用している遺構の略号は、以下のとおりである。
ＳＢ：掘立柱建物、ＳＤ：溝、ＳＥ：井戸、ＳＫ：土坑、ＳＰ：柱穴・ピット、
ＮＲ：自然流路・谷

7　遺構番号は、遺構の種類に関わらず遺跡ごとに連番とした。

8　本書で示す座標は、平面直角座標系第７系（世界測地系）を基準とし、方位は全て真北、標高は海抜高である。

9　挿図の縮尺は下記を基本とし、各図の下に縮尺率を示す。
遺構　掘立柱建物・溝・井戸・土坑・柱穴・ピット・自然流路・谷：１／100、１／40
遺物　土器・陶磁器・土製品：１／３

10　施釉陶磁器の釉の掛かる範囲は、１点鎖線で示す。

11　土層及び遺構埋土、土器胎土の色については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』および日本規格協会『ＪＩＳ　標準色票－光沢版－』を参照した。

12　遺物は、種類に関わらず遺跡ごとに連番を付す。浜黒崎町畑遺跡１～72、浜黒崎悪地遺跡73～97とし、本文・挿図・一覧表・写真図版中の遺物番号は全て一致する。

13　本文・挿図で扱った遺構・遺物は、一覧表に掲載している。凡例は以下のとおりである。
①　遺構の埋土に切り合い関係がある場合は、備考欄に新＞古のように記号で示す。
②　遺構規模・土器法量の（　）内は現存長を表す。残存部が少なく、計測不能なものは空欄とした。
③　重量はｇ単位で示す。計測には電子秤（SHIMAZU LIBROR EB-6205）を用いた。

14　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示・ご協力を得た。記して謝意を表します。（敬称略、五十音順）
鹿島昌也、川端典子、近藤浩二、常西用水土地改良区、関野紀義、泉田侑希、田上和彦、富山県埋蔵文化財センター、富山市教育委員会埋蔵文化財センター、納屋内高史、盛田拳生

目　　次

第Ⅰ章　調査の経過 …… 1

1　調査に至る経緯…… 1
2　発掘作業の経過と方法…… 4
3　整理作業の経過と方法…… 8
4　普及活動…… 8

第Ⅱ章　位置と環境 …… 9

1　地理的環境…… 9
2　歴史的環境……11

第Ⅲ章　浜黒崎町畑遺跡 ……15

1　概　要……15
2　Ａ地区……15
3　Ｂ地区……23
4　Ｃ地区……29
5　小　括……38
6　浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区の自然科学分析……47

第Ⅳ章　浜黒崎悪地遺跡 ……63

1　概　要……63
2　Ａ地区……63
3　Ｂ地区……67
4　Ｃ地区……70
5　Ｄ地区……81
6　小　括……83
7　浜黒崎悪地遺跡Ｂ地区の自然科学分析……89

第Ⅴ章　総　括 ……98

報告書抄録

挿図目次

第１図　遺跡位置図
第２図　周辺の微地形
第３図　浜黒崎町畑遺跡外　既往の調査位置図
第４図　浜黒崎悪地遺跡　既往の調査位置図
第５図　遺跡位置古図
第６図　周辺の遺跡位置図
第７図　浜黒崎町畑遺跡　調査区位置図
第８～12図　浜黒崎町畑遺跡Ａ地区　遺構図
第13図　浜黒崎町畑遺跡Ａ地区　遺物実測図
第14図　浜黒崎町畑遺跡Ｂ・Ｃ地区　位置図
第15～20図　浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　遺構図
第21～24図　浜黒崎町畑遺跡Ｃ地区　遺構図
第25・26図　浜黒崎町畑遺跡Ｂ・Ｃ地区　遺物実測図
第27～31図　浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　自然科学分析図
第32図　浜黒崎悪地遺跡　調査区位置図
第33図　浜黒崎悪地遺跡Ａ・Ｂ地区　位置図
第34～36図　浜黒崎悪地遺跡Ａ地区　遺構図
第37～39図　浜黒崎悪地遺跡Ｂ地区　遺構図
第40～45図　浜黒崎悪地遺跡Ｃ地区　遺構図
第46～48図　浜黒崎悪地遺跡Ｄ地区　遺構図
第49図　浜黒崎悪地遺跡　遺物実測図
第50～52図　浜黒崎悪地遺跡Ｂ地区　自然科学分析図
第53図　富山県内出土の主な蜆ヶ森Ⅱ式(新段階)土器
第54図　富山県内の主な併走する断面逆台形の中世溝
第55図　富山県内の噴砂確認遺跡

表目次

第１表　浜黒崎飯田遺跡、浜黒崎町畑遺跡既往の調査一覧
第２表　浜黒崎悪地遺跡　既往の調査一覧
第３表　浜黒崎町畑遺跡、浜黒崎悪地遺跡調査一覧
第４表　浜黒崎町畑遺跡、浜黒崎悪地遺跡調査の経過
第５表　調査・整理体制
第６表　周辺の遺跡一覧
第７表　浜黒崎町畑遺跡　遺構一覧
第８表　浜黒崎町畑遺跡　遺物一覧
第９～12表　浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　自然科学分析表
第13表　浜黒崎悪地遺跡　遺構一覧
第14表　浜黒崎悪地遺跡　遺物一覧
第15～17表　浜黒崎悪地遺跡Ｂ地区　自然科学分析表
第18表　富山県内の噴砂確認遺跡一覧

写真図版目次

図版１　航空写真（1946・2021年撮影）
図版２　浜黒崎町畑遺跡Ａ地区　全景
図版３・４　浜黒崎町畑遺跡Ａ地区　遺構
図版５　浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　全景
図版６～９　浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　遺構
図版10　浜黒崎町畑遺跡Ｃ地区　全景
図版11　浜黒崎町畑遺跡Ｃ地区　遺構
図版12　浜黒崎町畑遺跡　出土遺物
図版13　浜黒崎町畑遺跡　出土遺物・作業風景
図版14　浜黒崎悪地遺跡Ａ地区　全景・遺構
図版15　浜黒崎悪地遺跡Ａ地区　遺構
図版16　浜黒崎悪地遺跡Ｂ地区　全景・遺構
図版17　浜黒崎悪地遺跡Ｃ地区　全景
図版18　浜黒崎悪地遺跡Ｃ地区　遺構
図版19　浜黒崎悪地遺跡Ｄ地区　全景・遺構
図版20　浜黒崎悪地遺跡　出土遺物

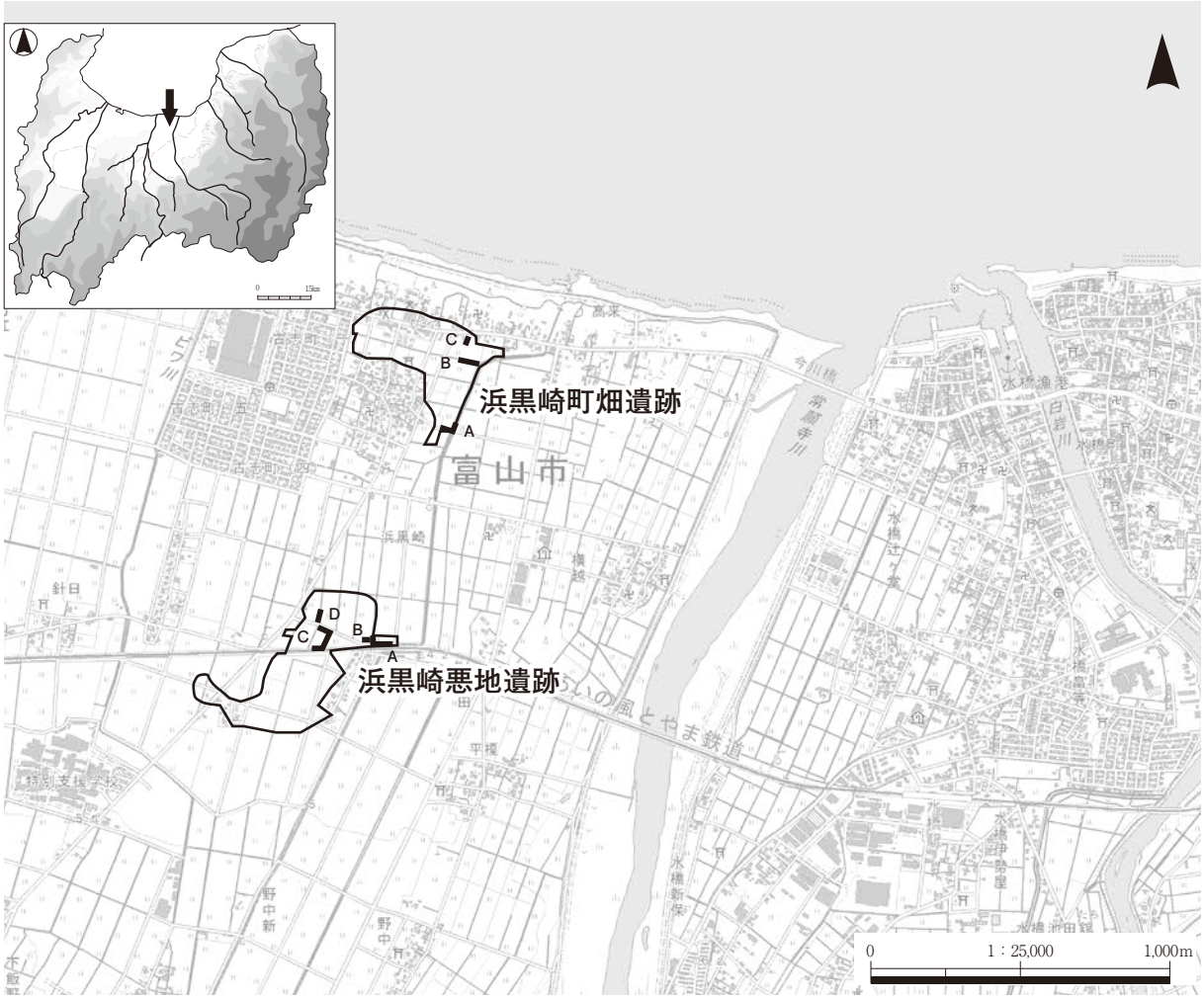
第Ⅰ章　調査の経過

1　調査に至る経緯

（1）調査の契機

浜黒崎町畑遺跡と浜黒崎悪地遺跡は、富山市の北部で富山湾から約500m～1.3㎞、常願寺川左岸河口近くの浜黒崎地区に所在する。諏訪川縁に所在する土地改良記念碑（1957年建立）によれば、浜黒崎地区は富山市土地改良課による設計で、昭和30（1955）～32（1957）年に常願寺川下流左岸とあわせて区画整理が行われた。これによって177haの農地と諏訪川幹線排水路が完成し、現在は広大な水田地帯が広がっている。

富山県農林水産部農村整備課では、生産基盤の整備、担い手への農地集積・集約化を進めるため、県内各所で大規模なほ場整備事業を行っている。浜黒崎地区では先の区画整理から60年以上が経ち、大区画のほ場整備が必要とされ、46.4haを対象に令和元（2019）年から令和９（2027）年までの工期で、経営体育成型の農地整備事業が計画された。富山県富山農林振興センター農村整備課は、令和元（2019）年から常西用水土地改良区や地元の協力を得て事業を推進している。



第１図　遺跡位置図（1：25,000）

富山県埋蔵文化財センターでは、この事業を整備するにあたり遺跡への影響が考えられることから、事業地内に存在する浜黒崎町畑遺跡、浜黒崎飯田遺跡、浜黒崎野田Ⅱ遺跡、浜黒崎野田・平榎遺跡、浜黒崎悪地遺跡の５遺跡について令和元（2019）年、令和２（2020）年、令和４（2022）年に遺跡の保護措置有無を確認するため大規模な試掘調査を行った（第３・４図）。

令和元（2019）年度の試掘調査は浜黒崎野田・平榎遺跡（対象面積7,000㎡）で、遺物は縄文土器・打製石斧・磨石・古代の土師器・中世土師器・珠洲・瀬戸・近世磁器・砥石・漆器・木製品が出土している。しかし、遺構はなく、湿地の堆積のみであったことから、保護措置は不要となった。浜黒崎野田Ⅱ遺跡（対象面積6,000㎡）では、土坑や溝などを検出した。遺物は、縄文土器・土師器・中世土師器・青磁・越中瀬戸・伊万里・唐津が出土している。対象地は、東側を除いて保護措置が必要となった。浜黒崎飯田遺跡（対象面積5,000㎡）では、中世土師器・珠洲・伊万里・唐津・加工板などが出土したが、遺構はなく、保護措置は不要となった（富山県2020）。

令和２（2020）年度の試掘調査は、浜黒崎町畑遺跡（対象面積36,000㎡）で古代～中世の溝・井戸・土坑、近世の溝・土坑などを検出した。遺物は、縄文土器・弥生土器・古代の土師器・須恵器・中世土師器・珠洲・青磁・越中瀬戸・伊万里・近世陶磁器・鉄滓・土錘・陶錘・硯などが出土している。対象地は、北側や東西端の一部を除いて保護措置が必要となった。浜黒崎飯田遺跡（対象面積50,000㎡）では弥生～古墳時代の土坑、古代の竪穴住居・土坑・溝、中世の溝・井戸・土坑を検出した。遺物は、縄文土器・叩石・弥生土器・古墳時代の土師器・古代の土師器・須恵器・土錘・中世土師器・珠洲・青磁・白磁・越中瀬戸・伊万里・唐津・近世陶磁器・硯・砥石・下駄・鉄滓が出土している。対象地は、北側と南側の一部で保護措置が必要となった。浜黒崎悪地遺跡（対象面積23,000㎡）では、弥生時代の溝・土坑を検出した。遺物は、縄文土器・弥生土器・鉄石英剥片・古代の土師器・須恵器・瀬戸・近世磁器・土錘・羽口が出土している。対象地は、西側と南側の一部を除いて保護措置が必要となった（富山県2021）。富山県埋蔵文化財センターでは、令和元（2019）～２（2020）年の調査成果を報告書（田中編2022）にまとめている。岡本淳一郎は、そのなかで微地形環境分析を行い、遺跡と立地について考察している（第２図）。

令和４（2022）年度の試掘調査は、浜黒崎町畑遺跡（対象面積4,000㎡）で中世の井戸・土坑・溝・竪穴建物などを検出した。遺物は、縄文土器・古代の土師器・須恵器・八尾・珠洲・越中瀬戸・近世陶磁器などが出土している。対象地は、すべて保護措置が必要となった（富山県2023）。

この試掘調査結果を受けて、富山市教育委員会では令和４（2022）年に遺跡範囲の変更を行った。これによって浜黒崎飯田遺跡は西側へ遺跡範囲が縮小し、東側は分割されて北側の浜黒崎町畑遺跡が拡大しその一部に、また東側の浜黒崎野田Ⅱ遺跡が拡大し、その一部となった。なお、浜黒崎悪地遺跡については北側に拡大した。登録時の遺跡種別は、浜黒崎町畑遺跡が奈良・平安時代の集落、浜黒崎飯田遺跡が奈良・平安・中世・近世の散布地、浜黒崎野田Ⅱ遺跡が縄文（後・晩期）・弥生・古墳（前期）・古代・近世の集落、浜黒崎悪地遺跡は縄文（後・晩期）・弥生（中期）・古墳（前期）・奈良・平安・中世・近世の集落である（ホームページ『インフォマップとやま　遺跡地図』）。

公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査課では、これらの遺跡のうち、ほ場整備事業による工事で遺跡を棄損する掘削工事が行われる水路部分について、富山県教育委員会を介して富山県農林水産部農村整備課からの依頼を受け、発掘調査（本調査）を実施した。調査は、令和５（2023）年度に浜黒崎町畑遺跡３地区384㎡、浜黒崎悪地遺跡４地区451㎡を対象に行った。

引用文献
富山県埋蔵文化財センター 2020『富山県埋蔵文化財センター年報－令和元年度－』
富山県埋蔵文化財センター 2021『富山県埋蔵文化財センター年報－令和２年度－』
富山県埋蔵文化財センター 2023『富山県埋蔵文化財センター年報－令和４年度－』
田中道子編2022『県営農地整備事業浜黒崎地区埋蔵文化財試掘調査報告』富山県埋蔵文化財センター

（２）既往の調査

富山県埋蔵文化財センター刊行の『富山県埋蔵文化財センター年報』や富山市教育委員会埋蔵文化財センター刊行の所報『富山市の遺跡物語』をもとに調べてみると、浜黒崎飯田遺跡と浜黒崎町畑遺跡において既述の県営ほ場整備事業以外の発掘調査では、個人住宅建設や倉庫の建設などに伴う小規模な試掘調査程度しか行われていない。これらの試掘調査では、遺構や遺物はほとんどみつかっておらず、遺跡の具体的な内容をつかむには至っていない。

第１表　浜黒崎飯田遺跡、浜黒崎町畑遺跡　既往の調査一覧

調査	調査地	調査形態	調査組織	調査年月日	対象面積（㎡）	調査面積（㎡）	原因	遺構	遺物	文献
1	浜黒崎字飯田825外	試掘	市教委	20060628	1,348	28	資材置場造成	なし	なし	6
2	浜黒崎字飯田728-4外	試掘	市教委	20060919	499	16	個人住宅建設	なし	土師器	6
3	浜黒崎字松下3295-3	試掘	市教委	20101004	380	12	分団器具置場建て替え工事	なし	なし	7
4	浜黒崎字畑3034-2	試掘	市教委	20140508	259	13	個人住宅建設	なし	なし	9
5	浜黒崎地内	試掘	市教委	20190711	50	3		なし	なし	10
6	浜黒崎地内	試掘	県教委	20191011～20191016	5,000	28	県営ほ場整備	不明流路	中世土師器、珠洲、伊万里、唐津、近世磁器、加工板	10
7	浜黒崎地内	試掘	市教委	20200324	455	24	駐車場造成	不明土坑	須恵器	10
8	浜黒崎字町畑	試掘	県教委	20201027～20201106	36,000	383	県営ほ場整備	古代溝、中世井戸・土坑・溝、近世井戸・土坑・溝、不明土坑・溝	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土錘、中世土師器、珠洲、瀬戸、青磁、越中瀬戸、近世陶磁器、硯、剥片、鉄滓	11
9	浜黒崎字飯田	試掘	県教委	20201014～20201027	50,000	563	県営ほ場整備	古墳土坑、古代竪穴建物、古代土坑、古代溝、中世井戸、中世土坑、中世溝	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、珠洲、白磁、青磁、越中瀬戸、唐津、緑色凝灰岩、砥石、硯、土錘、鉄滓、下駄	11
10	浜黒崎地内	試掘	市教委	20211014	383	14	個人住宅建設	不明溝、土坑	中世土師器	12
11	浜黒崎字町畑	試掘	県教委	20221003～20221005	4,000	61	県営ほ場整備	中世井戸、中世土坑、中世溝、竪穴建物	縄文土器、土師器、須恵器、八尾、珠洲、越中瀬戸、近世陶磁器	13

浜黒崎悪地遺跡では、あいの風とやま鉄道（旧ＪＲ北陸本線）より南側で行われた県営低コスト化水田農業大区画ほ場整備事業（針原北地区）に伴い、富山市教育委員会が平成４（1992）年～平成６（1994）年度に試掘調査と本調査を行っている（第４図、小林・堀沢1994・1995）。本調査は、道路・用排水路部分を対象に平成５（1993）年に4,600㎡、平成６（1994）年に4,550㎡で実施している。

平成５（1993）年の本調査では、弥生時代後期の掘立柱建物２棟や溝、古代の溝、古代～中世の掘立柱建物２棟などを検出している。遺物は、縄文土器（後～晩期）･磨製石斧･打製石斧、弥生土器（中～後期）・扁平片刃石斧、古墳時代の土師器（初頭）、古代の土師器・須恵器・土錘、珠洲・中世土師器・青磁、越中瀬戸などがみつかっている。

平成６（1994）年の本調査では、弥生時代後期～古墳時代初頭の井戸、古代の溝、古代～中世の掘立柱建物７棟、近世の井戸などを検出している。遺物は、縄文土器（後期）・磨製石斧・打製石斧、弥生土器（後期）、古墳時代の土師器（初頭）、古代の土師器・須恵器・灰釉陶器・土錘、珠洲・中世土師器、越中瀬戸などがみつかっている。

このように平成５（1993）、平成６（1994）年度に行われた富山市教育委員会による本調査では、弥生時代後期から中世までの掘立柱建物を伴う集落がみつかっており、遺跡の中心部はあいの風とやま鉄道より南側にあるとみられている。

第２表　浜黒崎悪地遺跡　既往の調査一覧

	調査地	調査形態	調査組織	調査年月日	対象面積(㎡)	調査面積(㎡)	原因	結果		文献
1	浜黒崎字大豆田割	試掘	市教委	19920720～19920722	4400	438	県営ほ場整備	穴、溝	縄文晩期土器、打製石斧、弥生中期土器、土師器、須恵器、珠洲、青磁	1
2	浜黒崎字大豆田割	本調査	市教委	19921201～19921217	-	90	県営ほ場整備	古代穴２	土師器、須恵器、土錘、青磁	1
3	浜黒崎八反田560外	試掘	市教委	19930705～19930831	105,000	2,010	県営ほ場整備	溝・穴（弥生～古代）	縄文土器（後～晩期）、打製石斧、磨製石斧、弥生土器（中～後期）、土師器、須恵器、珠洲、中世土師器	2
4	浜黒崎八反田560外	本調査	市教委	19930705～19940216	-	4,600	県営ほ場整備	掘立柱建物・溝(弥生後期)、溝・穴（奈良）	縄文土器（後～晩期）、打製石斧、磨製石斧、弥生土器（中～後期）、土師器、須恵器、土錘、珠洲、中世土師器、青磁	2
5	浜黒崎字悪地割	試掘	市教委	19940509～19940606	45,000	1,400	県営ほ場整備	溝・穴（弥生～近世）	縄文土器（後～晩期）、打製石斧、弥生土器（後期）、土師器、須恵器、珠洲、中世土師器、青磁	3
6	浜黒崎字悪地割	本調査	市教委	19940711～19941020	-	4,550	県営ほ場整備	掘立柱建物・溝・井戸（古代～中近世）	縄文土器(後～晩期)、打製石斧、磨製石斧、弥生土器(中～後期)、土師器、須恵器、土錘、鉄滓(古墳～平安)、珠洲、中世土師器、青磁、越中瀬戸	3
7	浜黒崎438-1外	試掘	市教委	19970415	400	25	県道歩道新設	なし	なし	4
8	浜黒崎字砂子1095-3外	試掘	市教委	20010702	250	16	携帯無線基地局鉄塔建設	なし	なし	5
9	浜黒崎1270	試掘	市教委	20120419	427	19	自己用住宅建設	不明溝	なし	8
10	浜黒崎悪地地内	試掘	県教委	20201007～1012	23,000	194	県営ほ場整備	弥生溝、不明土坑・溝	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土錘、瀬戸、越中瀬戸、近世磁器、鉄石英、羽口	11

引用文献

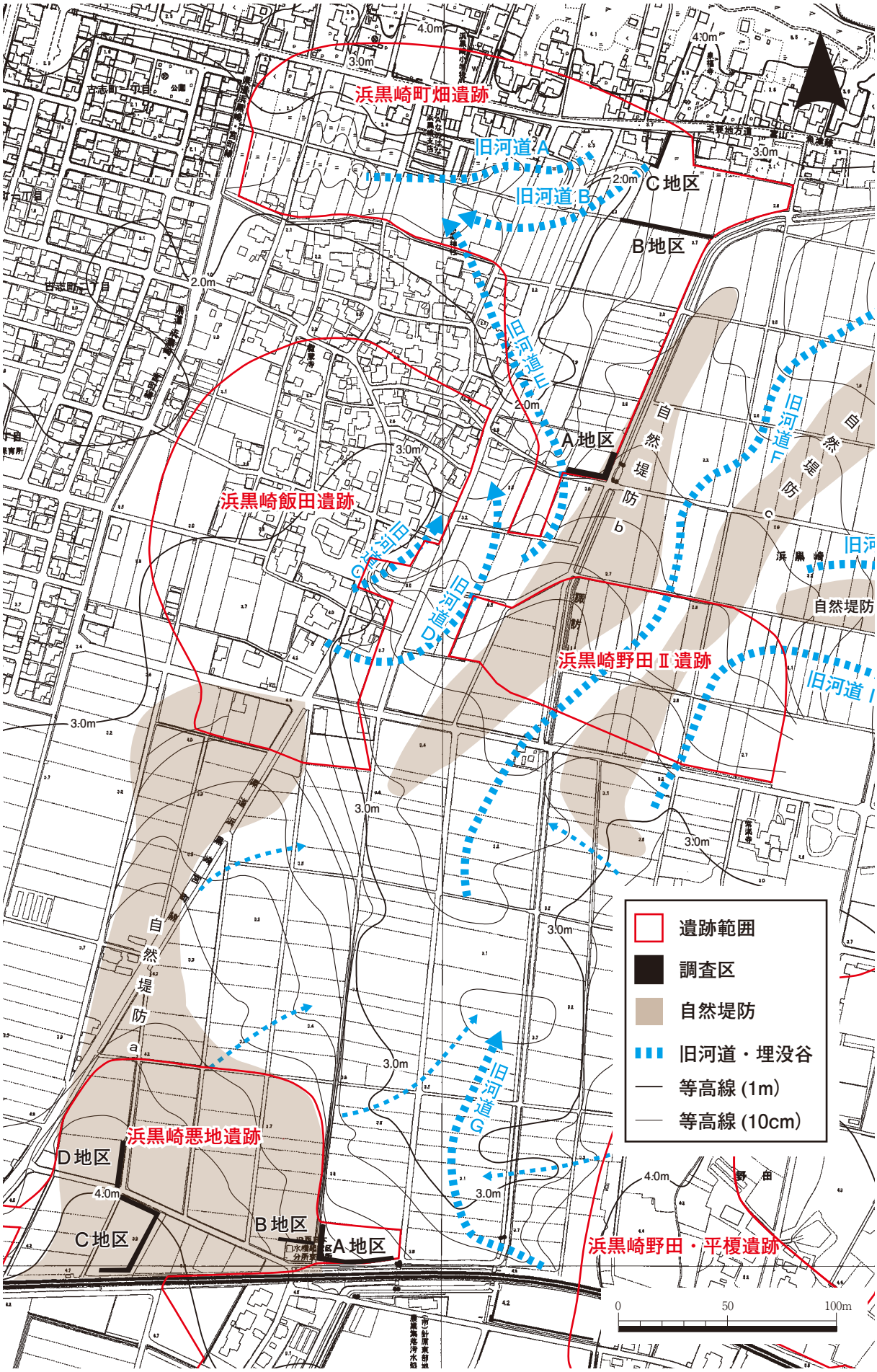
1　富山県埋蔵文化財センター 1993『富山県埋蔵文化財センター年報　平成４年度』
2　富山県埋蔵文化財センター 1994『富山県埋蔵文化財センター年報　平成５年度』
3　富山県埋蔵文化財センター 1995『富山県埋蔵文化財センター年報　平成６年度』
4　富山県埋蔵文化財センター 1993『富山県埋蔵文化財センター年報　平成７年度』
5　富山県埋蔵文化財センター 2003『富山県埋蔵文化財センター年報　－平成13年度－』
6　富山県埋蔵文化財センター 2007『富山県埋蔵文化財センター年報　－平成18年度－』
7　富山県埋蔵文化財センター 2011『富山県埋蔵文化財センター年報　－平成22年度－』
8　富山県埋蔵文化財センター 2013『富山県埋蔵文化財センター年報　－平成24年度－』
9　富山県埋蔵文化財センター 2015『富山県埋蔵文化財センター年報　－平成26年度－』
10　富山県埋蔵文化財センター 2020『富山県埋蔵文化財センター年報　－令和元年度－』
11　富山県埋蔵文化財センター 2021『富山県埋蔵文化財センター年報　－令和２年度－』
12　富山県埋蔵文化財センター 2022『富山県埋蔵文化財センター年報　－令和３年度－』
13　富山県埋蔵文化財センター 2023『富山県埋蔵文化財センター年報　－令和４年度－』

2　発掘作業の経過と方法

調査区はいずれも排水路幅のみの狭小であり、隣接する水田は調査後に耕作を再開することから、掘削土と表土が混在しないよう重機による表土除去は調査区よりも広めに行った。重機による表土除去後、水田床土や盛土などは重機で掘削し、表土を除去した調査区隣接地に仮置きした。遺物包含層や遺構の掘削は人力で行い、調査区隣接地に排出した。記録図面は概略図（１／100や１／200）、遺構断面図（１／20）、土層断面図（１／20）で、すべて調査員が手作業で作成した。記録写真は、土層や遺構断面をコンパクトデジタルカメラ（OLYMPUS　TOUGH　TG-6）で、調査区の全景や遺構のブロック写真を６×７フィルムカメラ（PENTAX 67Ⅱ　カラー・白黒フィルム）とデジタル一眼レフカメラ（Nikon　D5600）で調査員が撮影した。遺構平面図は、株式会社アーキジオがトータルステーション（Trimble　S3c）と電子平板（TOUGH PAD）による現地測量で作成した。測量終了後、一部を除き重機で調査区の埋め戻しを行い、表土を戻し、現地調査は終了した。

第３表　浜黒崎町畑遺跡、浜黒崎悪地遺跡　調査一覧

遺跡		調査期間	調査面積(㎡)	担当者	検出遺構	出土遺物
浜黒崎町畑遺跡	Ａ地区	20230522～20230607	178	田中道子 町田賢一	溝９、土坑２、噴砂１	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、珠洲、瀬戸美濃、青磁、土師質土器、越中瀬戸、肥前系陶磁器、不明陶磁器、炉壁、土錘
	Ｂ地区	20231002～20231023	152		掘立柱建物３、溝６、井戸１、土坑６、柱穴・ピット10	
	Ｃ地区	20231004～20231023	54		掘立柱建物１、溝４、土坑５、柱穴・ピット12	
浜黒崎悪地遺跡	Ａ地区	20230605～20230609	146		溝５、柱穴・ピット３、自然流路・谷２	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、白磁、越中瀬戸、肥前系陶磁器
	Ｂ地区	20231102～20231121	40		自然流路・谷１	
	Ｃ地区	20231023～20231121	193		溝６、土坑４、柱穴・ピット13	
	Ｄ地区	20231019～20231121	73		溝３、土坑２、柱穴・ピット４	



第２図　周辺の微地形（１：5,000）

※田中道子編2020『県営農地整備事業浜黒崎地区埋蔵文化財試掘調査報告』富山県埋蔵文化財センターを一部改変

第３図　浜黒崎町畑遺跡外　既往の調査位置図（１：4,000）

第４図　浜黒崎悪地遺跡　既往の調査位置図（１：4,000）

第４表　浜黒崎町畑遺跡、浜黒崎悪地遺跡　調査の経過

遺跡名	浜黒崎町畑遺跡			浜黒崎悪地遺跡			
地区名	Ａ地区	Ｂ地区	Ｃ地区	Ａ地区	Ｂ地区	Ｃ地区	Ｄ地区
表土機械掘削	20230522	20231002	20231004	20230605	20231102	20231023～1026	20231019
盛土機械掘削	20230523	20231003	20231004	20230606	20231102	20231023～1027	20231019
遺構検出・人力掘削	20230524～0526	20231003～1006	20231011～1013	20230607～0608	20231106	20231025～20231101	20231023～1024
全景写真撮影	20230526	20231011	20231013	20230608	20231107	20231101	20231024
現地測量	20230530	20231006	20231013	20230609	20231107	20231102	20231025
埋め戻し	20230531～0601	20231012～1017	20231018	-	20231108	20231106～1110	20231027～1030
明渡し	20230607	20231023	20231023	20230609	20231121	20231121	20231121

３　整理作業の経過と方法

記録図面や記録写真の整理は発掘調査終了後、調査職員が早急に行い、遺構や写真などの台帳作成も行った。出土遺物は、洗浄・注記の後、計数・計量・選別を行い、一部は実測を行った。遺構と遺物のトレースは、調査職員がAdobe Illustrator CS6を用いて行った。

第５表　調査・整理体制

	総括	総務	担当
令和５年度	課長　田中道子	副主幹　越前慎子	副主幹　町田賢一

４　普及活動

令和５（2023）年10月７日土曜日午前10時～12時、浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区において一般の方々に現地を公開する遺跡説明会を行った。対象は地元住民を主とし、約30名の見学者が集まった。説明会では、調査職員がＡ３用紙両面印刷の説明会資料をもとに、現地の遺構に立って、一般向けに説明した。また、簡易テント内では、今回調査の出土遺物と令和２（2020）年の富山県埋蔵文化財センターによる試掘調査で出土した遺物を借用して展示し、調査職員が説明した。これまで浜黒崎地区で発掘調査は行われているものの、本調査は行われておらず、説明会は初めての開催となったためか、参加者は身近な遺跡の存在に驚き、遺構や遺物を興味深そうに見入っていた。

現地遺構説明風景

出土遺物説明風景

第Ⅱ章　位置と環境

1　地理的環境

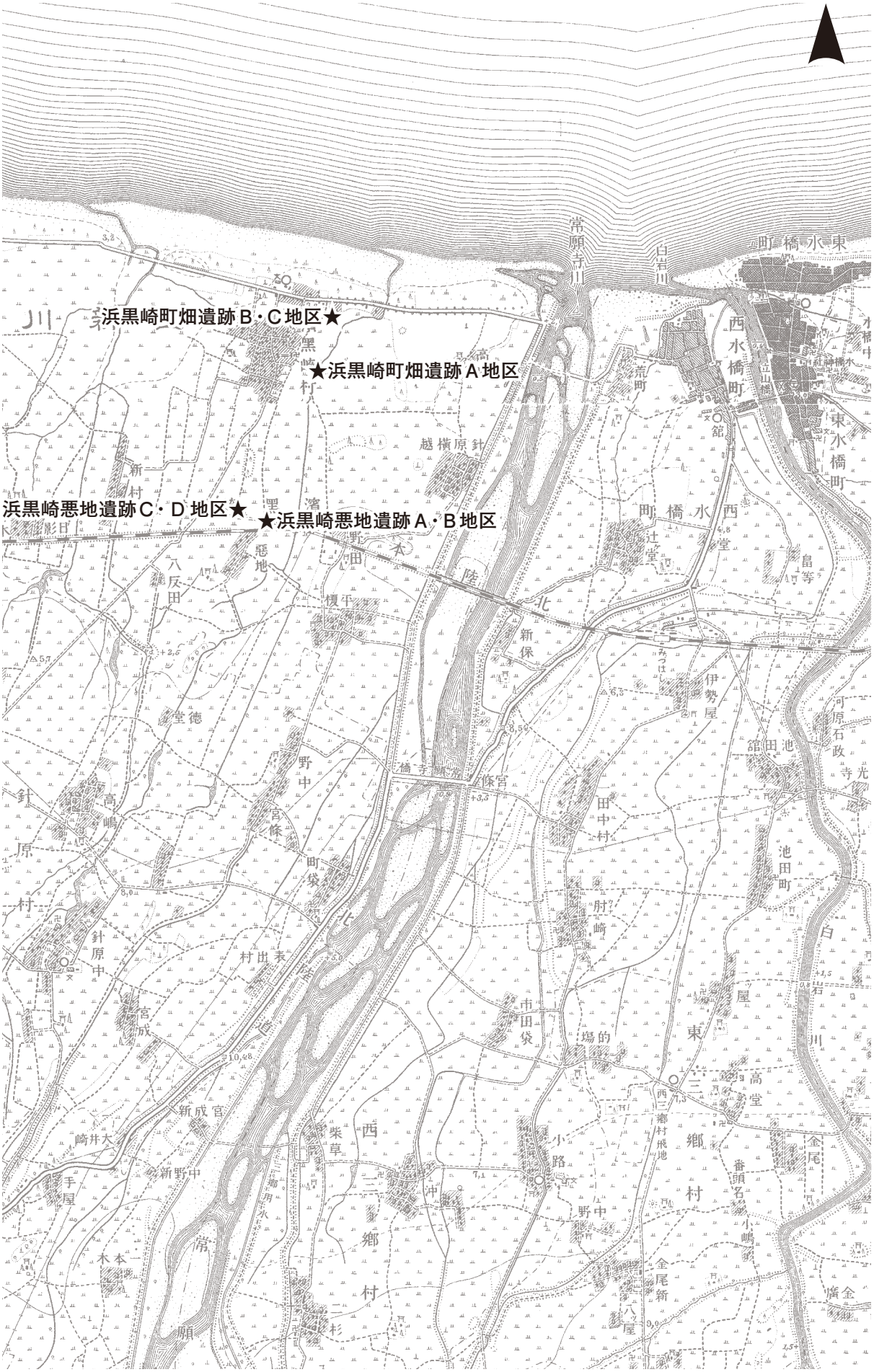
浜黒崎町畑遺跡と浜黒崎悪地遺跡は、県庁所在地で富山県中央部にある富山市に所在する。現在の富山市は「平成の大合併」で、平成17（2005）年４月１日に旧富山市・上新川郡大沢野町・上新川郡大山町・婦負郡八尾町・婦負郡婦中町・婦負郡山田村・婦負郡細入村の１市４町２村が合併したもので、面積1,241.77㎢と富山県の約１／３を占める県内最大の都市である。浜黒崎町畑遺跡と浜黒崎悪地遺跡は、その富山市の中央北部にあり、富山湾に面した浜黒崎地区に位置する。

浜黒崎は中世において広田郷に属し、黒崎村と呼ばれていた。“黒崎”の語源は、海浜の砂が鉄分を多く含み黒ずんでいたからともいわれる。黒崎村は富山藩内にも同名の村があったことから、天保10（1839）年に浜黒崎村と改称された。なお、近世では新川郡高野郷に属し、加賀藩領であった。新川郡の中心である奉行所は東岩瀬に置かれていたが、事実上の統括役である十村役が浜黒崎村に居住するなどこの地域では大きな村であった。それは海岸沿いに大名行列が通る浜街道（現在の主要地方道富山魚津線）が走り、交通の要所でもあったからなのだろう。この浜街道には加賀藩主前田利長の命令により慶長６（1601）年から往還松が植えられ、松並木となっていた。ただし、現在は富山県指定天然記念物として７本残すだけだという。明治22（1889）年には高来・針原横越・平榎・野田・日方江・日影・針木とあわせて浜黒崎村となり、昭和15（1940）年に富山市に編入された。主な産業は、一面に広がる水田地帯から農業であるが、漁業や家庭薬配置業も盛んに行われた。また、大正時代から浜黒崎海岸は海水浴場として人気が高く、誘客のために南側を走っていた国鉄北陸本線（現在のあいの風とやま鉄道）では浜黒崎悪地遺跡付近に大正15（1926）年、浜黒崎仮停車場が作られた。さらに高来には昭和５（1930）年、浜黒崎競馬場が作られるなど歓楽地としての役割も担っていた。

浜黒崎町畑遺跡と浜黒崎悪地遺跡は、神通川と常願寺川にはさまれた沖積平野にある。現況面の標高は、北にある浜黒崎町畑遺跡で2.3m前後、南にある浜黒崎悪地遺跡で4.2m前後となっている。『地形分類図　魚津』では低地－新扇状地、『表層地質図　魚津』では未固結堆積物－泥炭・泥、『土じょう図　八尾』ではグライ台地土壌－西山統・芝井統にあたる。

主要地方道富山魚津線松並木

1957年建立土地改良記念碑



第５図　遺跡位置古図（１：25,000）

※国土地理院（明治43年測図・大正７年発行）『二万五千分一地形図　東岩瀬・上市』から作成

2　歴史的環境

浜黒崎町畑遺跡と浜黒崎悪地遺跡の周辺では、沖積平野ながら各所に遺跡が点在する。これは常願寺川がたびたび流れを変え、さらに支流が流れていたことによる（安達他2002）。この流路の間に残された島状の高まり部分に遺跡が立地したことを示しているのだろう。

縄文時代の土器や石器は複数の遺跡でみつかっているものの、その時期は海退期と考えられている後期から晩期が多い。とくに浜黒崎野田・平榎遺跡は、以前から遺物が採集できる地点として有名で、富山県の考古学研究の祖ともいうべき早川荘作が昭和11（1936）年、『越中史前文化』において耕作土から土器や石器を複数発見し、紹介している（早川1936）。財団が行った発掘調査でも、晩期前葉から中葉の遺物を大量に採取したが、遺構はなかった（田中編2018）。このように遺物はみつかっても竪穴建物など生活遺構がみつからない遺跡は、針原中町Ⅰ遺跡や高島島浦遺跡など多く、集落の中心は明確にできない。また、令和５（2023）年度に調査した水橋荒町・辻ヶ堂遺跡では中期後葉～後期前葉の土器が多く出土しているが、破片のみで縄文時代の遺構からの出土ではない（青山2024）。

弥生時代になると、水田耕作に適していた立地のためか遺物だけでなく、遺構も検出されるようになる。中期では、竪穴建物の可能性がある針原中町Ⅰ遺跡（小林1998）や井戸の底に土器がまとまって出土した宮町遺跡（細辻他2007）などがある。後期では、環濠集落の可能性がある新堀西遺跡（青山編2013）、方形周溝墓が複数みつかった水橋荒町・辻ヶ堂遺跡などがある。これらの遺跡の多くは古墳時代前期までは継続するものの、中期や後期の遺構はなく、一時的に断絶がみられる。

奈良･平安時代には、水田開発が進んだためか、数多くの遺跡で遺構や遺物がみられるようになる。掘立柱建物を検出したのは野中新長幅遺跡、針原中町Ⅰ遺跡、水橋荒町・辻ヶ堂遺跡、水橋二杉遺跡などである。水橋荒町・辻ヶ堂遺跡は、複数の調査で総柱式と側柱式のあわせて50棟を超える掘立柱建物、区画溝、井戸などが整然と並ぶ。このことから水橋駅や官衙とみられていて、８～９世紀においてこの地域の中心といえる。なお、遺跡内には自然流路がみつかっており、これを使った交易や移動も考えられている。水橋二杉遺跡では、８世紀の総柱式掘立柱建物２棟のほかに墨書土器や転用硯など特殊遺物がみつかっている（安達2003）。墨書土器には「君万呂」､則天文字などが描かれている。このような特殊遺物のあり方から、レベルの高い階層の人々による集落遺跡であったのであろう。

中世では、城館遺跡が多くみられる。これまで文献では日方江城跡や鶯野城跡などが知られていたが､発掘調査によって新たに平榎亀田遺跡､宮町遺跡､小西北遺跡などが居館と判明した｡これらは､婦負郡を中心とする守護代神保氏と常願寺川東側に勢力を持つ新川郡の椎名氏との攻防ラインとして築かれたとみられる。なお､平榎亀田遺跡では､文献にある平榎城の堀とみられる溝を検出している。小西北遺跡は複数回の発掘調査によって、居館の全容が明らかになってきた（秀嶋2005）。県内における城館研究にはなくてはならない遺跡となっている。このほかに水橋池田舘遺跡は、発掘調査で二重の堀を検出し、その遺跡名である“池田舘”の存在を明らかにできたと考えられる（金三津2020）。

近世になると中世までの城館はなくなり、黒崎村（浜黒崎村）として現在の主要地方道富山魚津線である浜街道に沿った農村となったものとみられる。これまでの発掘調査では、日方江遺跡や高島遺跡などで溝や土坑などは検出されているが、建物はみつかっておらず、居住域は現在の集落に重なっているのだろう。なお、『広田組十村岩城家文書』（鈴木･熊谷2010）によれば、幕末の安政５（1858）年に起きた安政飛越地震で浜黒崎村に家屋の倒壊や噴砂の記述があり、被害が報告されている。

第６図　周辺の遺跡位置図（1：25,000）

第６表　周辺の遺跡一覧

		縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	文献
常願寺川左岸	日方江Ⅱ遺跡				○			
	日方江遺跡	●	●	●	●	●	●	古川1989、富山市2021・2022
	日方江城跡		○		●	○		斎藤2006、富山市2006
	宝集寺遺跡				○	○	○	
	浜黒崎遺跡				○	○		
	浜黒崎町畑遺跡	○	○		●	◎	●	**本書**、田中編2022
	浜黒崎飯田遺跡	○	○	○	◎	●	○	田中編2022、富山市2015・2022
	浜黒崎野田Ⅱ遺跡	○	○	○	○		●	富山市2011・2016、田中編2022
	高来遺跡	●	○		●		○	富山市2002・2011・2023
	横越遺跡	●	○	○	●	●	●	田中編2018、常深編2021、富山市2005・2016・2022
	浜黒崎悪地遺跡	○	◎	●	◎	◎	●	**本書**、小林・堀沢1994・1995、田中編2022
	浜黒崎野田・平榎遺跡	●	●	○	●	●	●	早川1936、小林・堀沢1995、小林1996、富山市2015・2016、田中編2018、田中編2022
	横越水窪遺跡	○	○	○	●	●	○	富山市2017、田中編2018
	野中新長幅遺跡	○	○	○	◎	○	○	小林・堀沢1995、小林1996
	平榎亀田遺跡	○	●	●	●	★	●	富山市2016・2022、金三津編2017
	高島島浦遺跡	●	●	○	●	◎	○	小林1996・1997・1998
	宮条南遺跡	○	●	○	●	●	●	小林1996・1997、富山市2011、細辻2013、富山市2021・2022
	高島遺跡	○	○	○	○	●	●	泉田2020、富山市2020
	針原中町Ⅰ遺跡	○	◎	○	◎	●	○	小林1997・1998
	針原中町Ⅱ遺跡	○	○	○	○	●	○	小林1997・1998・2000、富山市2006
	針原中性寺遺跡					○	○	
	宮町遺跡	○	●	○	○	★	●	斎藤2006、細辻嘉2007、富山市2008・2010・2022・2023
	宮成遺跡				○	○	○	富山市2006・2021
	三上遺跡		○		○	○		
	小西北遺跡	○	●	○	●	★	○	古川・堀沢2000、秀嶋2005、斎藤2006
	三上Ⅱ遺跡		○		○			
	金泉寺遺跡				○		○	富山市2021
常願寺川右岸	水橋荒町・辻ヶ堂遺跡	●	●	○	◎	◎	○	桐谷編1997、小林他1999、安達他2002、藤田編2005、青山2024
	水橋伊勢屋Ｂ遺跡					○	○	
	水橋池田舘遺跡	○	○	○	○	★	●	富山市2014、金三津2020
	水橋的場遺跡				○	○		
	水橋沖遺跡					○	●	富山市2022
	金尾新遺跡	○			○			
	中野遺跡	○	●	○	●	○	○	富山市2005・2006
	鶯野城跡					★		斎藤2006
	金尾新東遺跡				○	○		
	水橋二杉遺跡	●	●	○	◎	○	○	鹿島1997、安達2003、富山市2003・2022・2023
	金尾新西遺跡		○	○	○	○		
	新堀東遺跡		○	○	○	○		
	水橋入部遺跡		○	○	○	○	●	森2005・2006、富山市2016・2017・2018・2023
	水橋入江遺跡				○			
	新堀西遺跡	○	◎	◎	○	○		青山編2013
	新堀遺跡	○	○	○	○	○	○	細辻真2007

●は遺構、◎は建物、★は城館

周辺の遺跡　引用文献

青山晃編2013『上梅沢遺跡　水橋金広・中馬場遺跡　新堀西遺跡発掘調査報告』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
青山晃2024『水橋荒町・辻ヶ堂遺跡発掘調査報告』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査課
安達志津・古川知明2002『富山市水橋荒町・辻ヶ堂遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
安達志津2003「水橋二杉遺跡」『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅴ』富山市教育委員会
鹿島昌也1997「水橋二杉遺跡」『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅰ』富山市教育委員会
金三津道子編2017『平榎亀田遺跡発掘調査報告』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
金三津道子2020『水橋池田舘遺跡　水橋池田舘Ⅱ遺跡　水橋中村遺跡発掘調査報告』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査課
桐谷優編1997『水橋荒町遺跡』富山市教育委員会
小林高範・堀沢祐一1994『富山市浜黒崎悪地遺跡発掘調査概要』富山市教育委員会
小林高範・堀沢祐一1995『富山市浜黒崎悪地遺跡　野中新長幅遺跡　野田・平榎遺跡』富山市教育委員会
小林高範1996『富山市野田・平榎遺跡　野中新長幅遺跡　宮条南遺跡　高島島浦遺跡』富山市教育委員会
小林高範1997『富山市宮条南遺跡　高島島浦遺跡　針原中町Ⅰ遺跡　針原中町Ⅱ遺跡』富山市教育委員会
小林高範1998『富山市高島島浦遺跡　針原中町Ⅰ遺跡　針原中町Ⅱ遺跡』富山市教育委員会
小林高範1999『水橋荒町遺跡発掘調査概要Ⅱ』富山市教育委員会
小林高範2000『富山市針原中町Ⅱ遺跡発掘調査概要』富山市教育委員会
斎藤隆2006「日方江城」「鶯野城」「宮町遺跡」「小西北遺跡」『富山県中世城館遺跡総合調査報告書』富山県埋蔵文化財センター
泉田侑希2020『富山市内遺跡発掘調査概要22』富山市教育委員会
田中道子編2022『平榎亀田遺跡　浜黒崎野田・平榎遺跡　横越水窪遺跡　横越遺跡発掘調査報告』公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
田中道子編2022『県営農地整備事業浜黒崎地区埋蔵文化財試掘調査報告』富山県埋蔵文化財センター
常深尚編2021『富山市横越遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
富山市教育委員会2002「試掘確認調査　高来」『富山市の遺跡物語』第３号
富山市教育委員会2003「試掘確認調査　水橋二杉」『富山市の遺跡物語』第４号
富山市教育委員会2005「試掘確認調査　横越、中野」『富山市の遺跡物語』第６号
富山市教育委員会2006「試掘確認調査　日方江城跡、針原中町Ⅱ、宮成」『富山市の遺跡物語』第７号
富山市教育委員会2008「試掘確認調査　宮町」『富山市の遺跡物語』第９号
富山市教育委員会2010「試掘確認調査　宮町」『富山市の遺跡物語』第11号
富山市教育委員会2011「試掘調査　高来、宮条南、浜黒崎野田Ⅱ」『富山市の遺跡物語』第12号
富山市教育委員会2014「試掘調査　水橋池田舘」『富山市の遺跡物語』第15号
富山市教育委員会2015「試掘調査　浜黒崎飯田、浜黒崎野田・平榎、平榎亀田」『富山市の遺跡物語』第16号
富山市教育委員会2016「試掘調査　浜黒崎野田・平榎、浜黒崎野田Ⅱ、横越、平榎亀田、水橋入部」『富山市の遺跡物語』第17号
富山市教育委員会2017「試掘調査　横越水窪、水橋入部」『富山市の遺跡物語』第18号
富山市教育委員会2018「試掘調査　水橋入部」『富山市の遺跡物語』第19号
富山市教育委員会2020「試掘調査・工事立会　高島」『富山市の遺跡物語』第21号
富山市教育委員会2021「試掘調査・工事立会　宮条南、金泉寺、宮成、日方江、浜黒崎飯田」『富山市の遺跡物語』第22号
富山市教育委員会2022「試掘調査・工事立会　日方江、浜黒崎飯田、横越、平榎亀田、宮町、宮条南、水橋二杉、水橋沖」『富山市の遺跡物語』第23号
富山市教育委員会2023「試掘調査・工事立会　高来、水橋二杉、水橋入部、宮町」『富山市の遺跡物語』第24号
早川荘作1936『越中史前文化』中田書店
秀嶋龍男2005『富山市小西北遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
藤田慎一編2005『富山市水橋荒町・辻ヶ堂遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
古川知明1989「日方江遺跡」『昭和63年度　富山市埋蔵文化財発掘調査概要』富山市教育委員会
細辻嘉門2007「宮町遺跡」『富山市内遺跡発掘調査概要　Ⅱ』富山市教育委員会
細辻嘉門2013「宮条南遺跡」『富山市内遺跡発掘調査概要　Ⅷ』富山市教育委員会
細辻真澄2007「新堀遺跡」『北陸新幹線関係埋蔵文化財包蔵地調査報告（７）』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
森隆2005「水橋入部遺跡」『北陸新幹線関係埋蔵文化財包蔵地調査報告（５）』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
森隆2006「水橋入部遺跡」『北陸新幹線関係埋蔵文化財包蔵地調査報告（６）』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

第Ⅲ章　浜黒崎町畑遺跡

1　概要（第７図）

浜黒崎町畑遺跡は、富山県埋蔵文化財センターによって令和２（2020）年度と令和４（2022）年度に行われたほ場整備事業に伴う試掘調査（田中編2022）の結果、富山市教育委員会が南側の浜黒崎飯田遺跡の一部を統合して遺跡範囲を拡大した。新たな遺跡範囲は、95,259㎡に及ぶ。遺跡の時期は奈良時代、平安時代の集落として登録されている。

今回、令和５（2023）年度の調査地は、遺跡南東部のＡ地区、遺跡北東部のＢ・Ｃ地区の３か所である。Ａ地区はＳ１－９号排水路部分の178㎡、Ｂ地区はＳ１－８号排水路部分の152㎡、Ｃ地区はＳ１－８号排水路部分の54㎡で、いずれも排水路掘削に伴う調査であることから細長い。遺跡の現況はＡ・Ｃ地区が水田、Ｂ地区が農道である。調査前の標高は、2.2～2.3mである。

検出した遺構は、掘立柱建物４、溝19、井戸１、土坑13、柱穴・ピット22、噴砂１である。出土遺物は、縄文土器５、弥生土器１、土師器69、須恵器18、中世土師器７、珠洲７、瀬戸美濃３、青磁３、土師質土器１、越中瀬戸13、肥前系陶磁器12、近世～近代不明陶磁器18、炉壁３、土錘２の計162点、2,339.44ｇである。ただし、遺跡は、昭和30年代に行われた区画整理によって大きく削平を受けており、遺物は数少なく、小破片が多い。

2　Ａ地区（第８～13図、図版２）

（1）基本層序

基本層序は、Ⅰ層からⅤ層まである（第11・12図）。Ⅰ層は表土で、にぶい黄褐色シルト。現在の水田耕作土にあたる。Ⅱ層は盛土で、４層に分けられる。Ⅱ－１層は、現水田の床土とみられる明黄褐色シルト。Ⅱ－２層は根による攪乱層で、にぶい黄褐色シルト。Ⅱ－３・４層は旧表土とみられ、Ⅱ－３層はにぶい黄褐色シルト、Ⅱ－４層は黄褐色砂質シルト。Ⅲ層は遺物包含層と考えられ、２層に分けられる。Ⅲ－１層は灰黄褐色シルト、Ⅲ－２層は黒褐色シルトである。Ⅳ層は地山で、遺構検出面にあたる。これは２分でき、Ⅳ－１層はにぶい黄褐色砂質シルト、Ⅳ－２層は明黄褐色シルトである。Ⅴ層は、噴砂や断割で確認した褐色粗砂である。

（2）遺構（ＳＤ、ＳＫ）

検出した遺構は、溝９、土坑２、噴砂１である。埋土は、主に中世（13～14Ｃ）が黒褐色シルト、近世（17Ｃ）以降が灰黄褐色シルトとなっている。

Ａ　溝（ＳＤ）

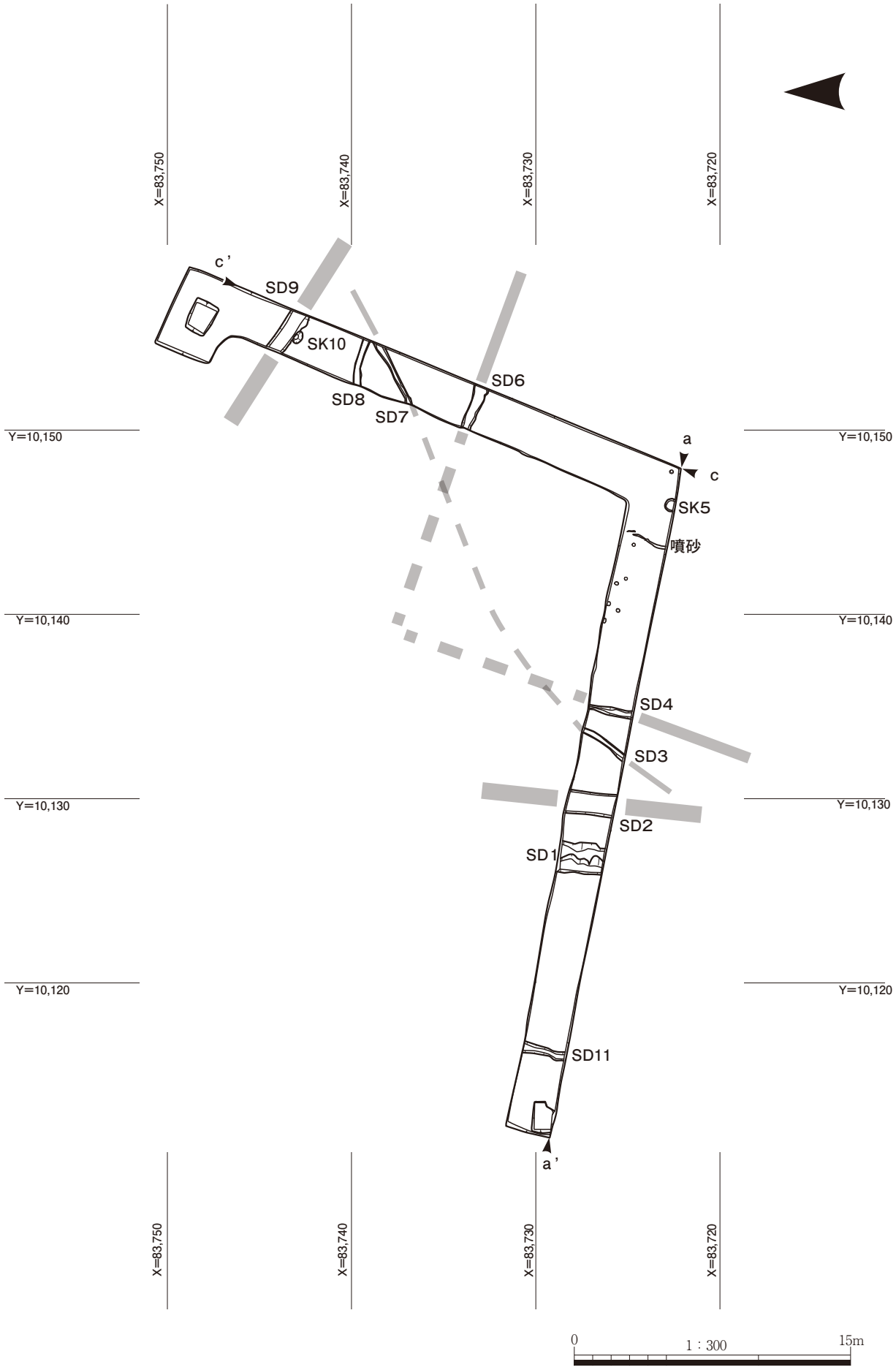
１号溝（ＳＤ１、第10・11図、図版３）

調査区西側を南北方向の溝。幅310cmとこの調査区で最も幅広となり、深さも65cmと最も深い。平面形は不整形で、レンズ状の堆積。断面は、ほぼＶ字状だが底面は一定ではなく、自然流路の可能性がある。埋土から近世以降だろう。遺物は出土していない。

２号溝（ＳＤ２、第10・11・13図、図版３・12）

2　A地区

第７図　浜黒崎町畑遺跡　調査区位置図（１：1,500）



第８図　浜黒崎町畑遺跡Ａ地区　遺構全体図（１：300）

調査区西側で、南北方向の溝。断面は、逆台形を呈する。埋土は、３層からなる。珠洲の甕片（１）が出土。中世の区画溝か。溝の構造はＳＤ９と類似しているが、延長しても直交しない。１は珠洲の甕胴部の破片。生焼け気味で残存状態が悪い。

３・７号溝（ＳＤ３・７、第９～12図、図版３・４）

北東－南西方向の溝。調査区西側をＳＤ３、調査区東側をＳＤ７としたが、埋土や形状から延長上の同一遺構と考える。幅37～45cm、深さ10～15cm。埋土は、単層。Ⅲ層下に掘り込みがあることから中世か。遺物は出土していない。

４号溝（ＳＤ４、第10・11図、図版３）

調査区西側で、南北方向の溝。幅45cm、深さ28cmと中規模。埋土は、単層。遺物は出土していないが、埋土の土色から中世とみられる。延長すると、ＳＤ６と直交する可能性がある。区画溝か。

６号溝（ＳＤ６、第９・12図、図版４）

調査区東側で、東西方向の溝。幅84cm、深さ12cmと中規模。埋土は、単層。Ⅱ層に上面を削られ、遺存状況が悪い。遺物は出土していないが、埋土の土色から中世とみられる。延長すると、ＳＤ４と直交する可能性がある。区画溝か。

８号溝（ＳＤ８、第９・12図、図版４）

調査区東側で、北西－南東方向の溝。幅は42cm、深さ18cmで小規模。埋土は、単層。Ⅲ層下に掘り込みがあることから中世か。遺物は出土していない。平面形がやや湾曲している。

９号溝（ＳＤ９、第９・12・13図、図版４・12）

調査区北東側で、北東－南西方向の溝。断面は、逆台形を呈する。埋土は、２～４層からなる。珠洲の壺片（２）が出土。中世の区画溝か。溝の構造はＳＤ２と類似しているが、延長しても直交しない。２は珠洲の壺で口縁部片。ヨコナデ調整のみ。吉岡編年のⅢ～Ⅳ期か。

11号溝（ＳＤ11、第10・11図、図版４）

調査区最も西側で、南北方向の溝。幅63cmあるが、深さ10cmと浅い。埋土は、砂混じりの単層。底面に酸化鉄が固着し、水が通っていたことが推定される。遺物は出土していないが、埋土から最も新しい遺構とみられる。近世から近代か。

Ｂ　土坑（ＳＫ）

５号土坑（ＳＫ５、第９・11図、図版３）

調査区の屈曲部付近にある土坑。約半分が調査区外。直径69cm、深さ30cm。埋土は、単層。Ⅲ層を切って掘り込みがあることから、近世以降か。遺物は出土していない。

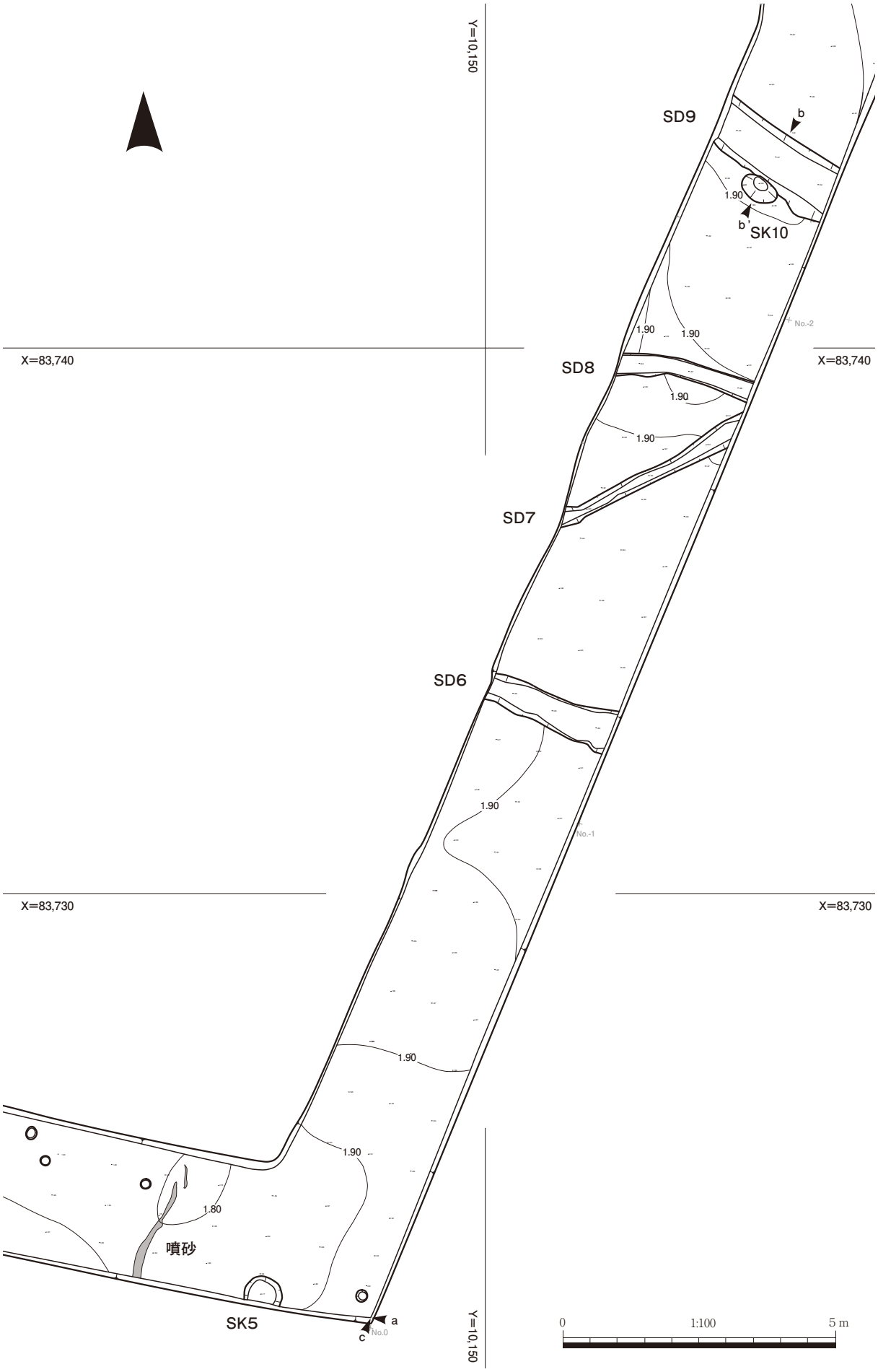
10号土坑（ＳＫ10、第９・12図、図版４）

調査区北東側にある土坑。直径70cm、深さ22cmと中規模。埋土は、単層。ＳＤ９を切り、それより新しい。遺物は出土していないが、埋土の土色から中世とみられる。

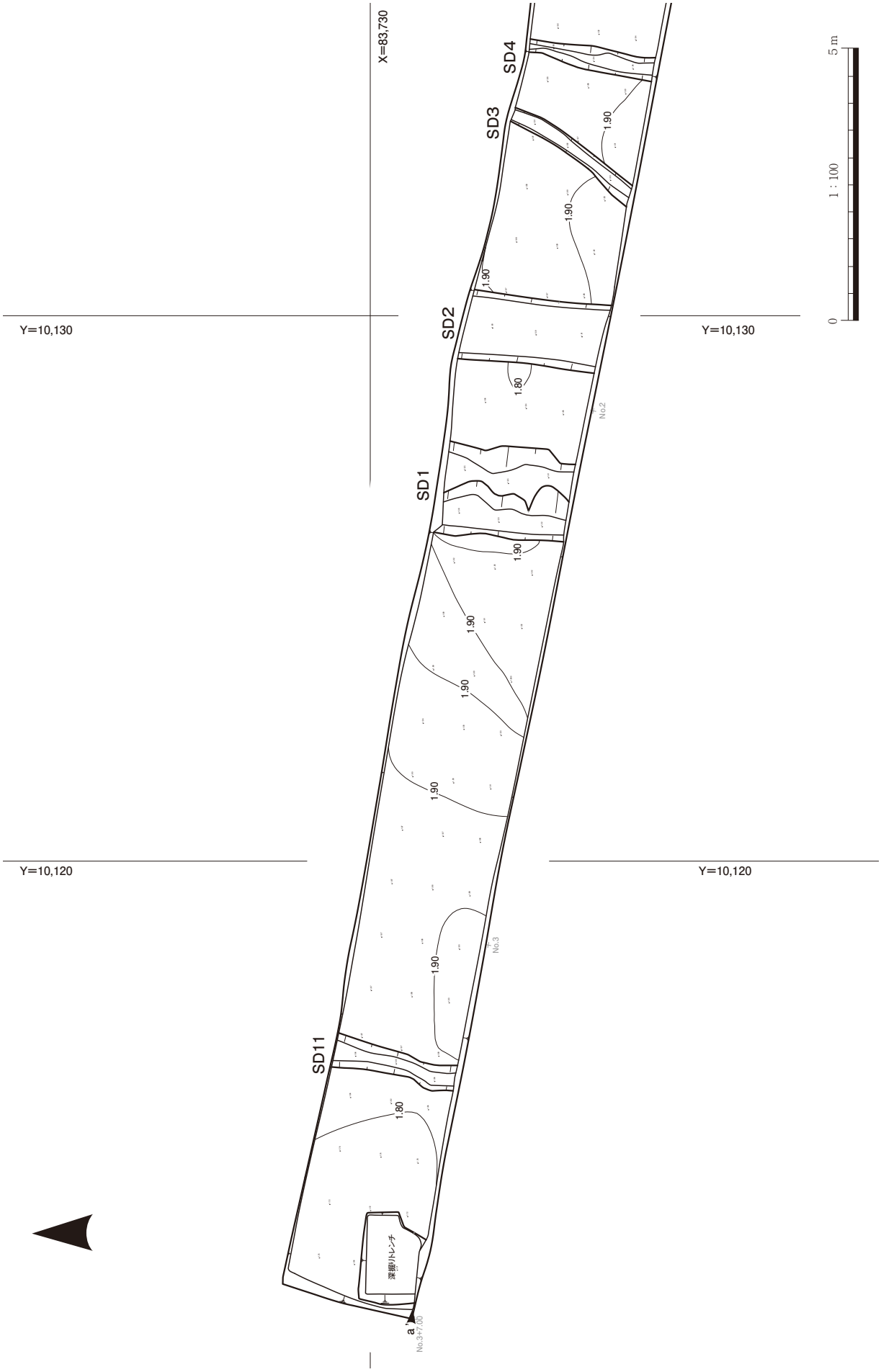
Ｃ　噴砂

噴砂１（噴砂、第９・11図、図版４）

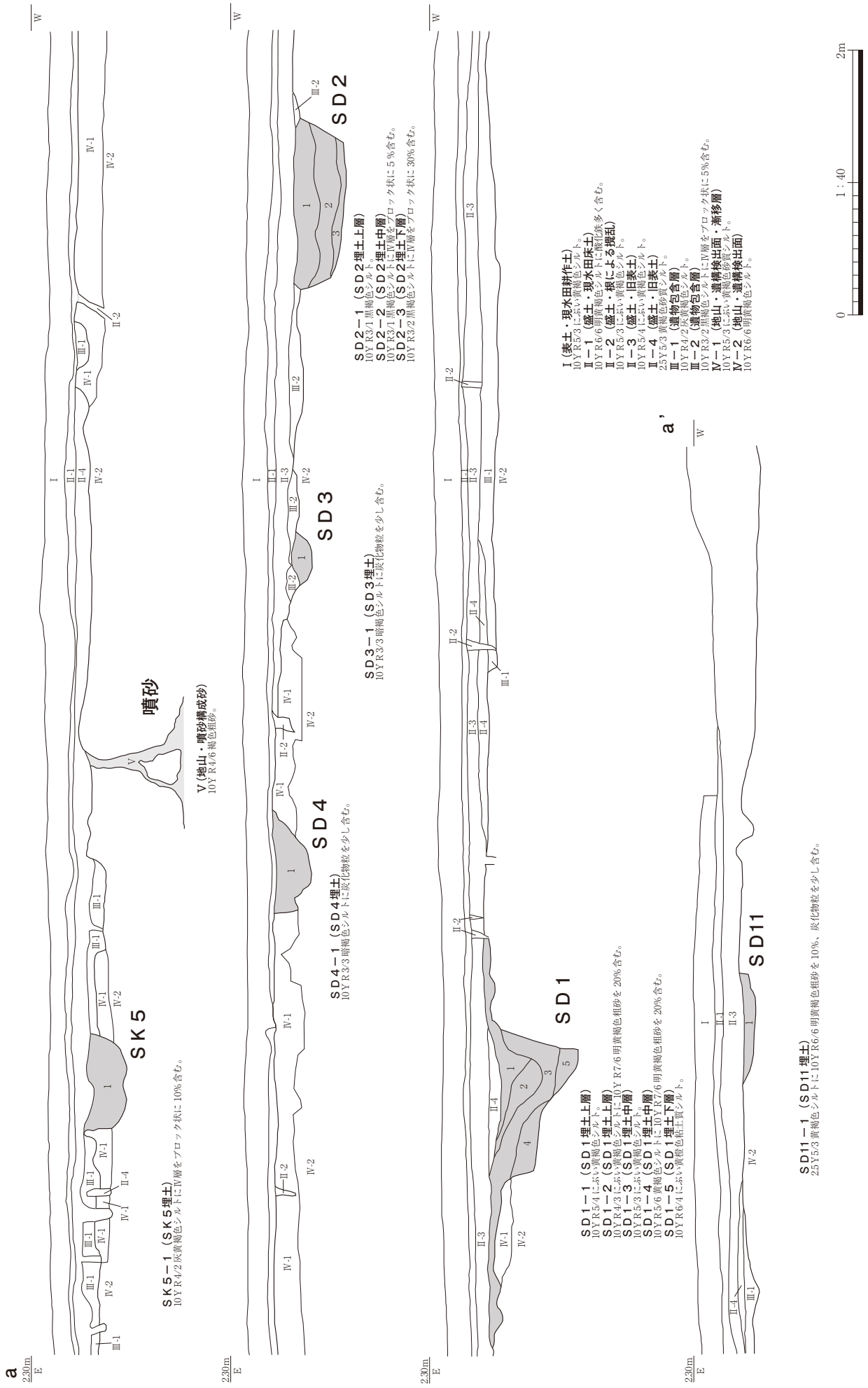
調査区の屈曲部で確認した噴砂。南北方向に延びる。検出面での砂脈幅は８cm。調査終了後、残務で断ち割りを行い砂脈の供給源を確認したところ、検出面から73cm下で砂層（Ⅴ層）を確認した。遺構や遺物包含層の切り合いがなく、盛土層（Ⅱ層）下で確認したため、本来の噴出面は削られており、層位から詳細な時期は絞り込むのは難しい。ただし、地震の少ない富山県で噴砂を発生させる中世以降の地震とすれば、1586（天正13）年の天正地震と1858（安政５）年の安政飛越地震しかない。『岩



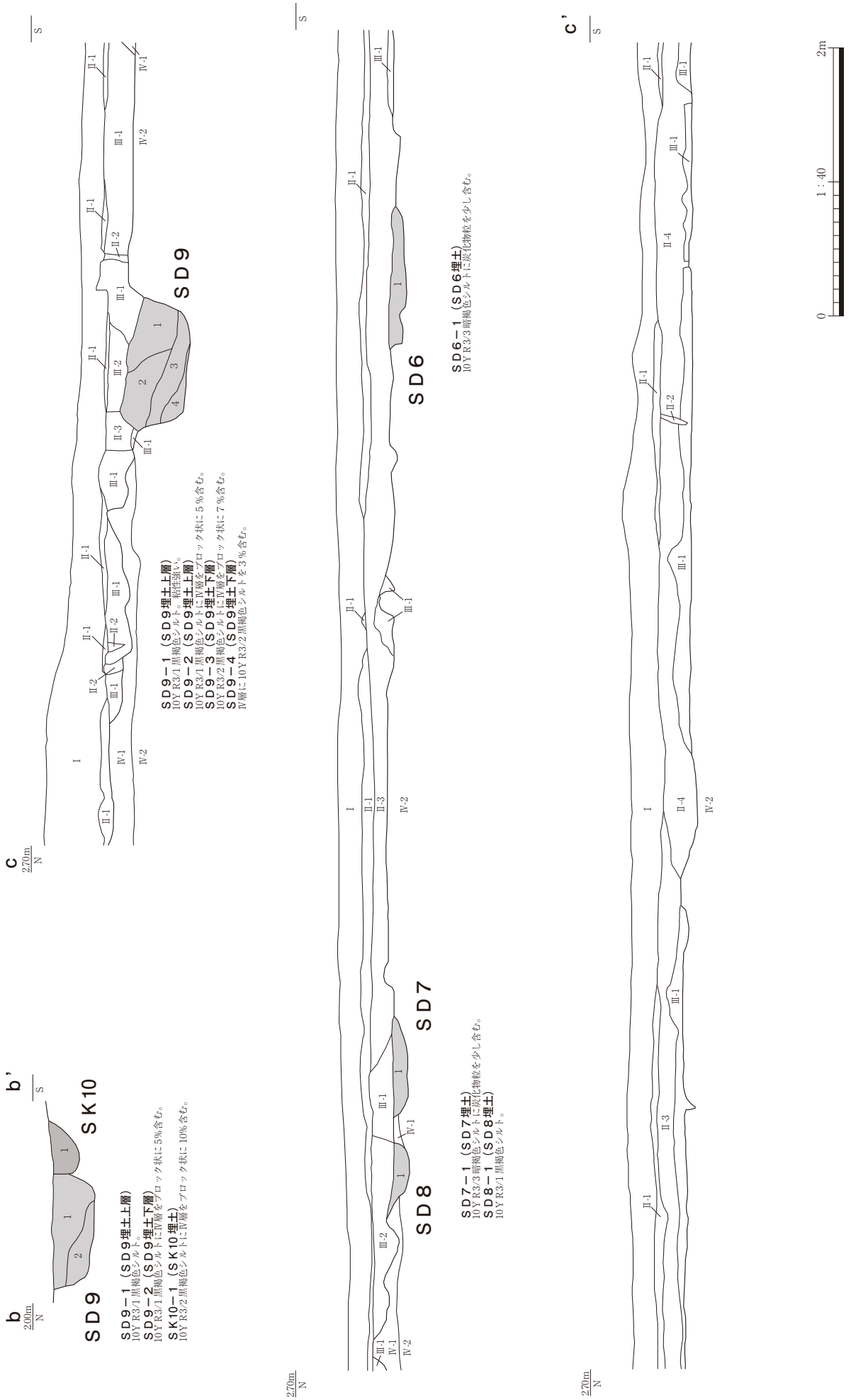
第９図　浜黒崎町畑遺跡Ａ地区　遺構平面図１（１：100）



第10図　浜黒崎町畑遺跡Ａ地区　遺構平面図２（１：100）



第11 図　浜黒崎町畑遺跡Ａ地区　基本層序・遺構断面図１（１：40）



第12図　浜黒崎町畑遺跡Ａ地区　基本層序・遺構断面図２（１：40）

城家文書』によれば、安政飛越地震によって浜黒崎に噴砂の被害があったと報告されていることから、後者の可能性が極めて高いだろう。

（３）遺物（第13図・図版12・13）

遺物の多くは表土、排土から出土し、遺構からの出土（１・２）は、わずかに２点である。縄文土器から近代の陶磁器まで幅広い時期の遺物があるが、いずれも小片で摩滅が激しく、原位置を保っているとは言えない。３は縄文土器。深鉢の胴部とみられる。縦走する縄文から考えると中期後葉～後期前葉か。内面にタール状の付着物がみえる。４は土師器の甕か。全体に摩滅が激しい。５は青磁碗の口縁部小片。14世紀か。６は中世土師器皿。ナデ調整とみられるが、全体に摩滅が激しい。７は白磁釉？の掛かった産地不明の陶磁器。近代か。

８～33はＡ地区ではなく、隣接する南側の水田で表面採集したもの。８は土師器のくの字状口縁部か。９～11は須恵器。９は杯蓋の口縁部小片。８～９世紀。10は甕、11は壺の胴部か。いずれも外面にタタキ、内面当て具痕が残る。12～16は中世土師器。12・13は小型で、全体に摩滅が激しい。14・15は口縁部にススが付着し、灯明皿。16は破片の一端を打ち欠いてなんらかの転用を行っている。17～19は珠洲。17は片口鉢の口縁部。吉岡編年のⅠ～Ⅱ期か。18は甕または壺の胴部下半。外面上部をタタキ、下部をヨコナデ。19は壺で、底部に近い胴部下半。ロクロナデ。20は瀬戸美濃の卸皿で、口縁部小片。卸目の後に灰釉をかける。15世紀か。21・22は青磁。21は同安窯系で、皿の底部。内面に片切り彫りの文様が入り、青磁釉をかける。12世紀か。22は龍泉窯系の碗口縁部。全面に青磁釉がかかる。14世紀か。23は土製品で、土錘。中央に貫通孔があるが、上下端を欠損。24は土師質土器の口縁部。口縁端部を面取りしており、鉢やバンドコのようなものか。25～28は越中瀬戸。25は鉄釉の皿口縁部。26は天目の底部。削り出し高台。内面に鉄釉がかかる。27･28は擂鉢の胴部片。卸目の後、錆釉をかける。29～33は伊万里とみられる肥前系陶磁器。29は皿で内面に二重格子文を描く。30～32は碗。30は格子文、31は草花文を描く。32は外面に山水文？、内面に四方襷文を描く。33は小皿状。外面に染付の一部がみえる。

３　Ｂ地区（第14～20・25図、図版５）

（１）基本層序

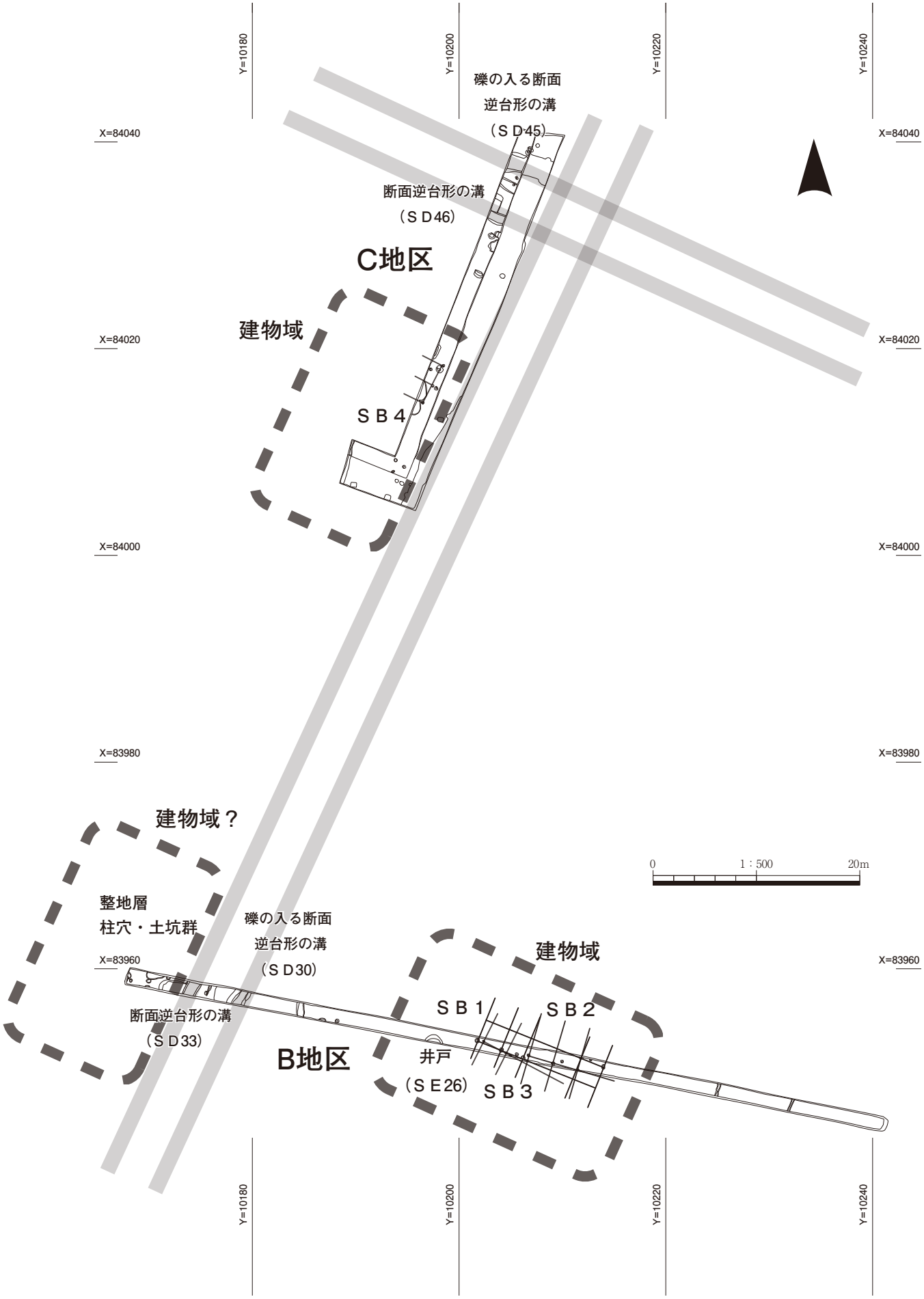
基本層序は、Ⅰ層からⅤ層まである（第19・20図）。Ⅰ層は農道構成土で、暗褐色砂質シルトに砂利を多く含む。Ⅱ層は盛土で、８層に分けられる。Ⅱ－１・２層は旧水田の表土とみられ、Ⅱ－１層はにぶい明黄褐色砂質シルト、Ⅱ－２層は黒褐色砂質シルト。Ⅱ－３～８層は、旧水田床土とみられる。Ⅱ－３層は明黄褐色粘土質シルト、Ⅱ－４層はにぶい黄褐色砂質シルト、Ⅱ－５層はにぶい黄褐色粘土質シルト、Ⅱ－６層は明黄褐色粘土質シルト、Ⅱ－７層はにぶい黄褐色粘土質シルト、Ⅱ－８層は明黄褐色粘土質シルトである。Ⅲ層は遺物包含層と考えられ、黒褐色シルトである。Ⅳ層は整地層と考えられ、３層に分けられる。Ⅳ－１層は灰黄褐色砂質シルト、Ⅳ－２層は黒褐色シルト、Ⅳ－３層は黒褐色シルトである。Ⅴ層は地山で、遺構検出面にあたり、明黄褐色砂質シルトである。

（２）遺構（ＳＢ、ＳＤ、ＳＥ、ＳＫ、ＳＰ）

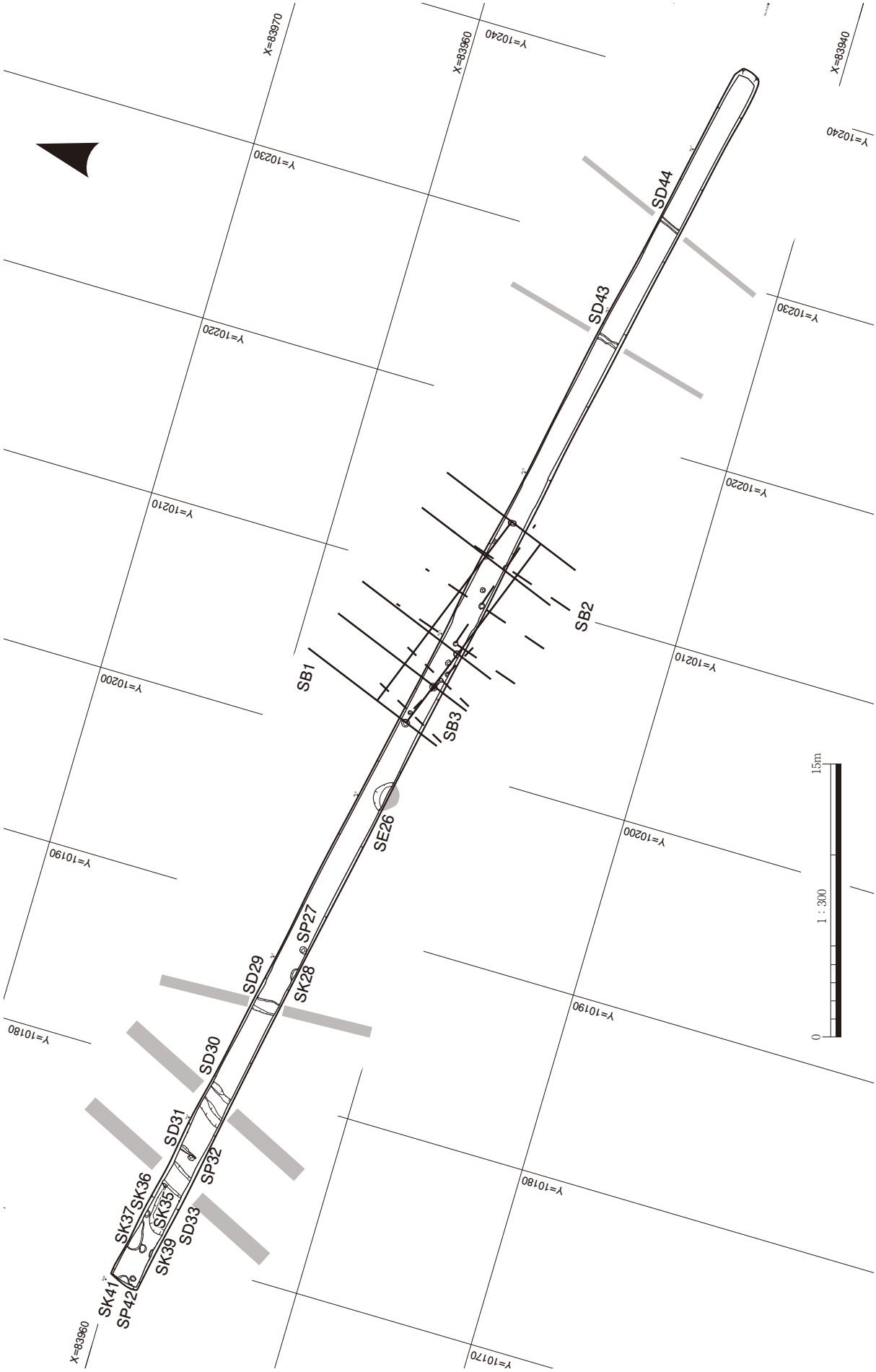
検出した遺構は、掘立柱建物３、溝６、井戸１、土坑６、柱穴・ピット10である。遺構の時期はお

第13図　浜黒崎町畑遺跡Ａ地区　遺物実測図（1：3）

ＳＤ２（1）　ＳＤ９（2）　遺構外（3～7）　隣接地表採（8～33）



第14図　浜黒崎町畑遺跡Ｂ・Ｃ地区　位置図（１：500）



第15図　浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　遺構全体図（１：300）

おむね中世と考えられるが、埋土から掘立柱建物のつくられた時期（第Ⅱ期）とその前（第Ⅰ期）と後（第Ⅲ期）の大きく３時期に分けられる。なお、掘立柱建物については、調査後の整理段階で柱穴の並びと埋土や掘り方から想定したものである。

A　掘立柱建物（ＳＢ）

１号掘立柱建物（ＳＢ１、第15・17・20図、図版５・８・９）

調査区中央にある柱穴群の一つ。ＳＰ12・14・19・20・21の５基の柱穴の並びから、５間×１間以上の総柱式掘立柱建物を想定した。主軸方向はＮ－21°－Ｅ。柱間距離は２～2.4m。遺跡内で最も大きな建物。ただし、上面を大きく削平されており、柱穴は浅く、遺物も見つかっていない。総柱式掘立柱建物の可能性から、中世前半と考えられる。ＳＢ２・３とほぼ同時期と考える。第Ⅱ期。

２号掘立柱建物（ＳＢ２、第15・17・20図、図版５・８）

調査区中央にある柱穴群の一つ。ＳＰ15・17・18の３基の柱穴の並びから、２間×１間以上の掘立柱建物を想定した。主軸方向はＮ－17°－Ｅ。柱間距離は2.4m。上面を大きく削平されており、柱穴は浅い。遺物は図示していないが、ＳＰ15から珠洲破片が見つかっている。ＳＢ１・３とは軸の新旧関係はわからないが、埋土がほぼ同じであり、ほぼ同時期と考えられる。第Ⅱ期。

３号掘立柱建物（ＳＢ３、第15・17・20図、図版５・９）

調査区中央にある柱穴群の一つ。ＳＰ24・25の２基の柱穴の並びから、１間×１間以上の掘立柱建物を想定した。主軸方向はＮ－29°－Ｅ。柱間距離は2.4m。ただし、上面を大きく削平されており、柱穴は浅く、遺物も見つかっていない。平行して走る溝ＳＤ30・33、Ｃ地区のＳＢ４と同じ軸線にある。このことからＳＤ33出土中世土師器皿（38）から考えると中世前半になるだろう。第Ⅱ期。

B　溝（ＳＤ）

29号溝（ＳＤ29、第15・16・19・25図、図版６・12）

調査区西側で、南北方向の溝。幅74㎝、深さ25㎝と中規模。埋土は上下２層で、下層から土師器片（34）が出土している。建物の主軸方向にはあわず、第Ⅰ期か。

30・33号溝（ＳＤ30・33、第15・16・19・25図、図版６・７・12）

調査区西側で、北東－南西方向の併走する溝。第Ⅱ期。幅153～208㎝、深さ77～90㎝と大規模で、断面は逆台形を呈する。埋土は、４層からなる。ＳＤ30は、埋土上層に廃棄されたとみられる礫が複数まとまってあり、その中から土錘（37）が出土している。37は管状土錘で、細辻真澄の分類（細辻2001）によれば樽型Ｃ類になるだろう。付近で網漁が行われていたことがうかがえる。下層からは須恵器片（35・36）が出土している。このほかに土師器片２点が出土している。これらはいずれも古代の所産で、混入と考えている。

ＳＤ33は、整地層とみられるⅣ層を切っており、それより新しい。西側の埋土から中世土師器（38）がみつかっている。38は非ロクロ成形の皿。器壁の厚い二段ナデで、越前慎子らの分類（越前ほか2007）によればＴＢタイプとなり、12Ｃ中～後半か。

二つの溝は約３ｍ離れ、同じ軸方向であり、併走する。掘立柱建物とも軸方向がほぼ同じで、集落の中心的な施設であったのであろう。時期は、埋土土壌のＡＭＳ年代測定では弥生～古墳時代の値が出ているが、中世土師器の年代から中世前半と考える。

31号溝（ＳＤ31、第15・16・19図、図版７）

調査区西側で、南北方向の溝。ＳＰ32に切られる。幅28㎝、深さ28㎝と規模が小さく、不整形。埋土は、単層。遺物は出土していない。第Ⅲ期。

43・44号溝（ＳＤ43・44、第15・18・19図、図版７）

調査区東側で、北東－南西方向の溝。幅29～36cm、深さ９～14cmと浅い。埋土は、単層。区画溝もしくは建物等の遺構が近くにないことから、水田などの水路か。遺物は出土していないが、埋土がＳＰ32やＳＫ39と同じであることからＳＤ30・33よりも新しい第Ⅲ期。

Ｃ　井戸（ＳＥ）

26号井戸（ＳＥ26、第15・17・20図、図版７）

調査区の中央部にある井戸。約半分が調査区外。直径177cm。狭小な調査区で壁面が崩壊するおそれがあり、人力掘削は78cmまでとなった。調査終了後、重機による断ち割りでさらに60cm下で、湧水面を確認した。埋土は、４層。木枠や曲物などはなく、素掘りとみられる。遺物は出土していない。掘立柱建物の近くにあり、これの付随施設と考えられ、第Ⅱ期。

Ｄ　土坑（ＳＫ）

28号土坑（ＳＫ28、第15・16・20図、図版８）

調査区西側にある土坑。約半分が調査区外。幅70cm、深さ31cmの中規模。埋土は２層で、堆積状況から１層は柱痕跡の可能性もあり、柱穴か。隅円方形の柱穴とすれば大型の建物が想定されるが、調査区内でこれと組む柱穴はなく不明。遺物は出土していない。第Ⅰ期もしくは第Ⅱ期。

35号土坑（ＳＫ35、第15・16・19図、図版７）

調査区西側にある土坑。長軸240cm、深さ40cmと大規模。ＳＫ37同様に小屋や貯蔵庫などの竪穴状土坑であろう。埋土は、２層。遺物は出土していない。ＳＤ33に切られ、掘立柱建物期よりも古く、第Ⅰ期。

36号土坑（ＳＫ36、第15・16・19図、図版８）

調査区西側にある土坑。約半分が調査区外。直径42cm、深さ35cm。埋土は、４層。埋土上部に整地層とみられるⅣ層が堆積し、ＳＫ37同様にＳＤ33より古い第Ⅰ期。遺物は出土していない。

37号土坑（ＳＫ37、第15・16・19図、図版８）

調査区西側にある土坑。約半分が調査区外。長軸170cm、深さ30cmと大規模。ＳＫ35同様に小屋や貯蔵庫などの竪穴状土坑であろう。埋土は、１層。埋土上部に整地層とみられるⅣ層が堆積し、ＳＫ36同様にＳＤ33より古い第Ⅰ期。遺物は出土していない。

39号土坑（ＳＫ39、第15・16・20図、図版８）

調査区西側にある土坑。約半分が調査区外。直径50cm、深さ30cmの中規模。埋土は、２層。灰黄褐色シルトの埋土からＳＰ32同様に新しい第Ⅲ期。

41号土坑（ＳＫ41、第15・16・20図）

調査区西端にある土坑。直径75cm、深さ40cmと中規模。埋土は３層で、２層が柱痕跡のようで柱穴の可能性がある。隅円方形の柱穴とすれば大型の建物が想定されるが、調査区内でこれと組む柱穴はなく不明。ＳＰ42に切られる。遺物は出土していない。第Ⅰ期か。

Ｅ　柱穴・ピット（ＳＰ）

13号ピット（ＳＰ13、第17・20図、図版８）

調査区中央部にある単独のピット。直径24cm、深さ22cmの小規模。約半分が調査区外。埋土は、単層。掘立柱建物域にあり、ほかの建物を構成する可能性がある。遺物は出土していない。第Ⅱ期か。

16号ピット（ＳＰ16、第17・20図）

調査区中央部にある単独のピット。直径28cm、深さ17cmの小規模。埋土は、単層。掘立柱建物域に

あり、ほかの建物を構成する可能性がある。遺物は出土していない。第Ⅱ期か。

22号ピット（ＳＰ22、第17・20図）

調査区中央部にある単独の柱穴。直径32cm、深さ23cmの小規模。埋土は４層で、柱痕跡がある。掘立柱建物域にあり、ほかの建物を構成する可能性がある。遺物は出土していない。第Ⅱ期か。

23号ピット（ＳＰ23、第17・20図）

調査区中央部にある単独のピット。直径26cm、深さ21cmの小規模。埋土は、単層。掘立柱建物域にあり、ほかの建物を構成する可能性がある。遺物は出土していない。第Ⅱ期か。

27号ピット（ＳＰ27、第15・16・20図、図版９）

調査区西側にある単独の柱穴。直径41cm、深さ28cmの中規模。埋土は４層で、柱痕跡がある。掘立柱建物域から離れているが、調査区外で建物を構成する可能性がある。遺物は、土師器が出土している。ＳＤ29と同時期とすれば第Ⅰ期か。

32号ピット（ＳＰ32、第15・16・20図、図版９）

調査区西側にある単独のピット。直径35cm、深さ16cmと中規模。埋土は２層で、灰黄褐色シルトであることから新しい第Ⅲ期。ＳＤ31を切る。遺物は出土していない。

34号ピット（ＳＰ34、第16・20図）

調査区西側にある単独のピット。直径22cm、深さ26cmで小規模。埋土は、単層。ＳＤ33に切られ、第Ⅰ期か。遺物は出土していない。竪穴状土坑ＳＫ35の付随施設の可能性がある。

38号ピット（ＳＰ38、第16・20図）

調査区西側にある単独の柱穴。直径45cm、深さ19cmで中規模。埋土は２層で、柱痕跡がある。調査区外にある建物の一部か。遺物は出土していない。第Ⅰ期。

40号ピット（ＳＰ40、第16・20図、図版９）

調査区西端にあるピット。直径34cm、深さ７cmで小規模。埋土は、２層。遺物は出土していない。第Ⅰ期か。

42号ピット（ＳＰ42、第15・16・20図、図版９）

調査区西端にあるピット。直径30cm、深さ16cmで小規模。埋土は、単層。遺物は出土していない。第Ⅰ期か。

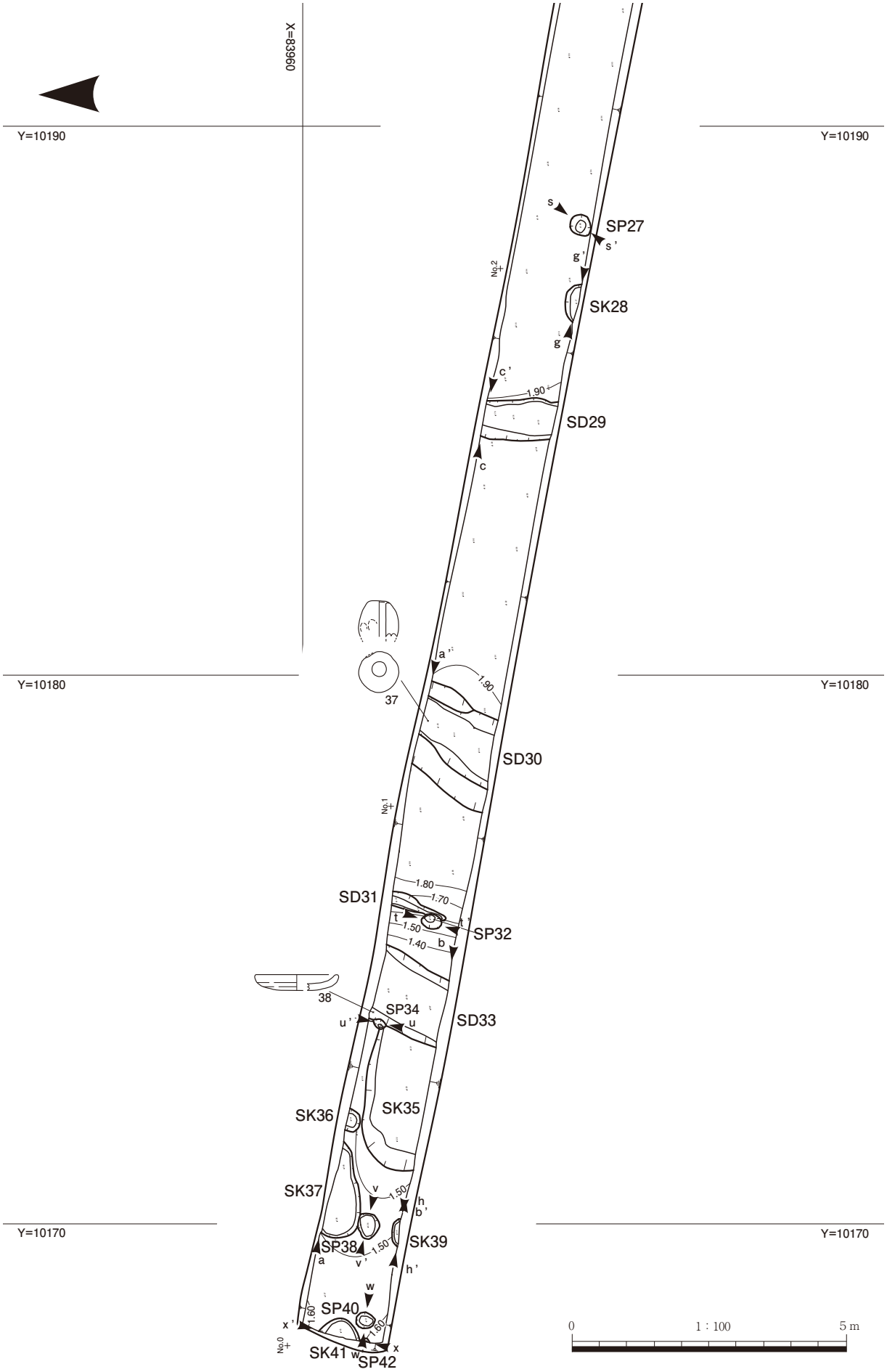
（３）遺物（第25図・図版12・13）

遺構外からの遺物には縄文土器、須恵器、瀬戸美濃、越中瀬戸、肥前系陶磁器、不明陶磁器がある。40は縄文土器深鉢の破片。縦走縄文とみられ、中期後葉～後期前葉か。39は須恵器の甕肩部とみられる。外面を平行タタキ、内面に当て具痕を残す。Ⅴ層直上から出土した。41は瀬戸美濃の灰釉のかかる筒形香炉か。42～44は越中瀬戸。42は部分的に鉄釉がかかる皿。43は壺の肩部か。44は碗の口縁部。45は唐津の擂鉢。46・47は近世～近代の不明陶磁器。透明釉がかかる。

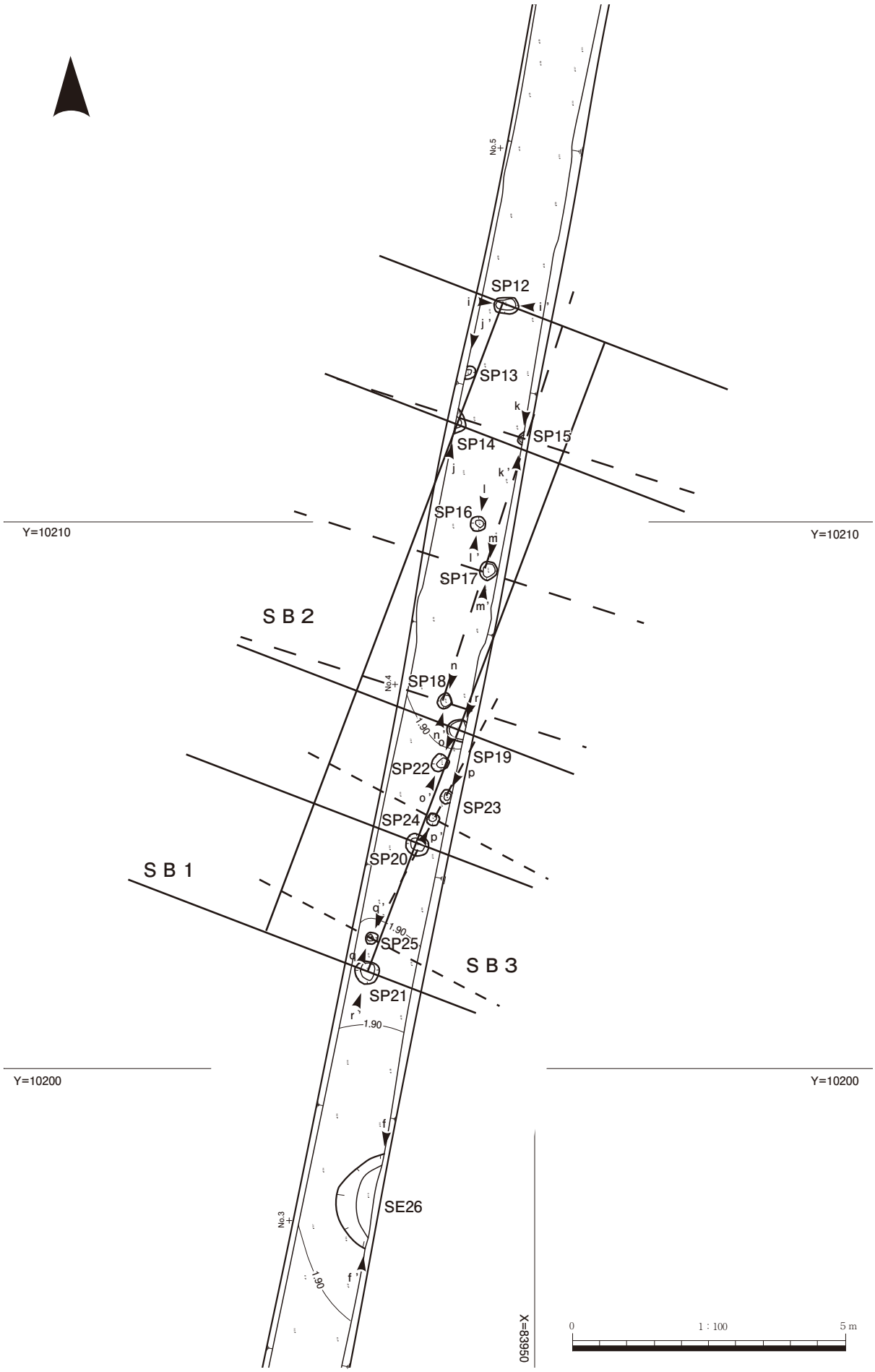
４　Ｃ地区（第21～26図、図版10）

（１）基本層序

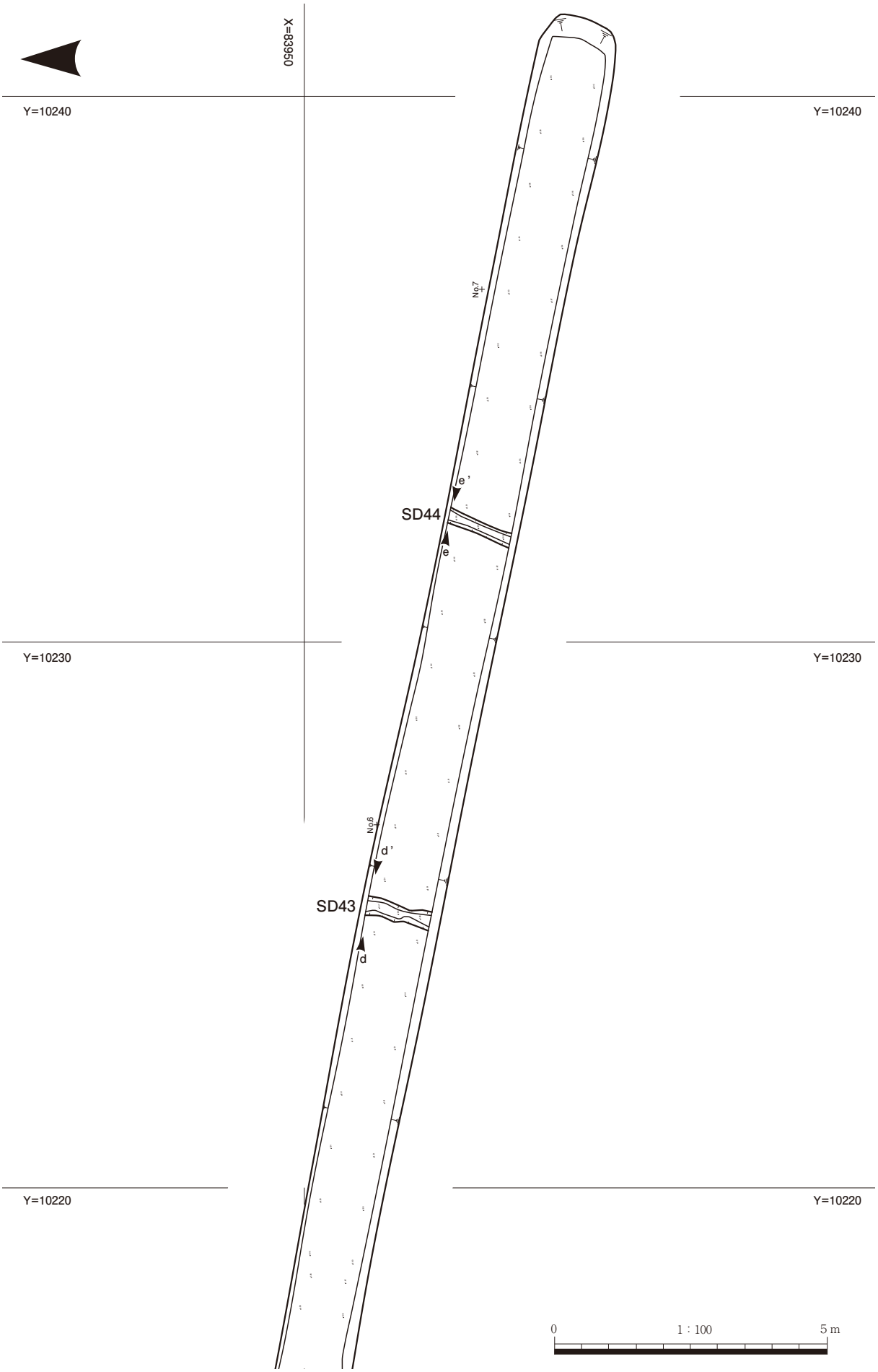
基本層序は、Ⅰ層からⅣ層まである（第24図）。Ⅰ層は表土で、灰黄褐色砂質シルト。現在の水田耕作土にあたる。Ⅱ層は盛土で、現水田の床土とみられ、灰黄褐色砂質シルト。Ⅲ層は遺物包含層と



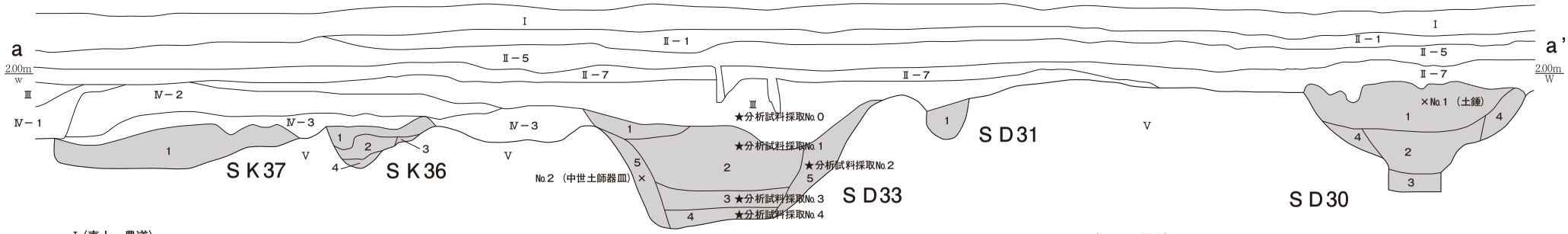
第16図　浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　遺構平面図１（１：100）



第17図　浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　遺構平面図２（1：100）



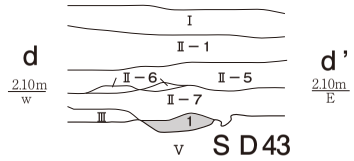
第18図　浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　遺構平面図３（１：100）

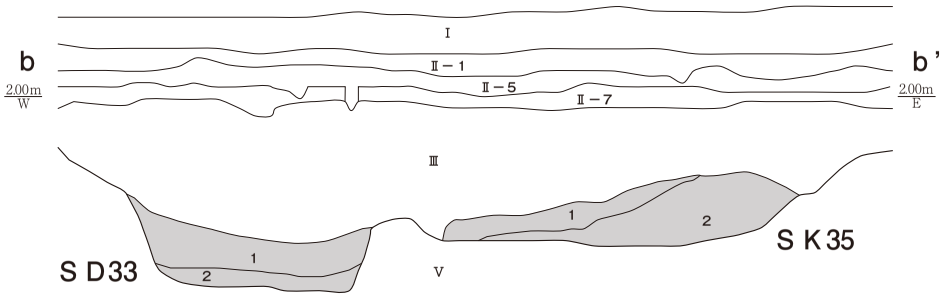


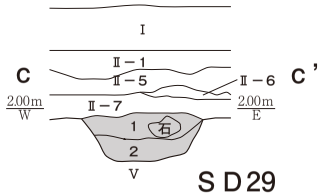
Ⅰ（表土・農道）
10YR3/3暗褐色砂質シルトに砂利を多く含む。
Ⅱ－1（盛土・旧水田表土）
10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト。
Ⅱ－5（盛土・旧水田床土）
10YR5/3にぶい黄褐色粘土質シルト。
Ⅱ－7（盛土・旧水田床土）
10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト。
Ⅲ（遺物包含層）
10YR2/3黒褐色シルトに炭化物粒を少し含む。
Ⅳ－1（整地層）
10YR4/2灰黄褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に3％含む。
Ⅳ－2（整地層）
10YR3/1黒褐色シルト。
Ⅳ－3（整地層）
10YR3/2黒褐色シルトにⅤ層を粒状に1％含む。炭化物粒を少し含む。
SK37－1（SK37埋土）
10YR3/3暗褐色シルトにⅤ層を粒状に7％含む。

SK36－1（SK36埋土上層）
10YR3/3暗褐色シルトにⅤ層を粒状にを7％含む。
SK36－2（SK36埋土中層）
10YR3/2黒褐色シルトにⅤ層を粒状に1％含む。炭化物粒を少し含む。
SK36－3（SK36埋土中層）
10YR4/4褐色粘土質シルト。
SK36－4（SK36埋土下層）
10YR3/2黒褐色シルトにⅤ層をブロック状に7％含む。粘性強い。
SD33－1（SD33埋土上層）
10YR3/3暗褐色シルトにⅤ層を粒状に2％含む。炭化物粒を少し含む。
SD33－2（SD33埋土上層）
10YR3/2黒褐色シルトに炭化物粒を少し含む。酸化鉄を少し含む。
SD33－3（SD33埋土中層）
10YR3/2黒褐色粘土質シルトに炭化物粒を少し含む。
SD33－4（SD33埋土下層）
10YR3/1黒褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に1％含む。
SD33－5（SD33埋土中層）
10YR4/2灰黄褐色シルトに酸化鉄を少し含む。

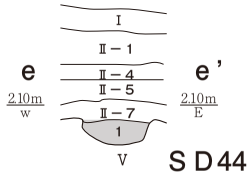
SD31－1（SD31埋土）
10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトにⅤ層を粒状に1％含む。
SD30－1（SD30埋土上層）
10YR3/2黒褐色シルトにⅤ層を粒状に2％含む。河原石を含む。
SD30－2（SD30埋土中層）
10YR3/3暗褐色シルトに地山ブロックを3％含む。
SD30－3（SD30埋土下層）
10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に10％含む。
SD30－4（SD30埋土中層）
10YR3/2黒褐色シルトにⅤ層をブロック状に10％含む。
Ⅴ（地山・遺構検出面）
10YR6/6明黄褐色砂質シルト。







SD29－1（SD29埋土上層）
10YR3/2黒褐色シルトにⅤ層をブロック状に3％含む。
SD29－2（SD29埋土下層）
10YR3/2黒褐色シルトにⅤ層をブロック状に10％含む。

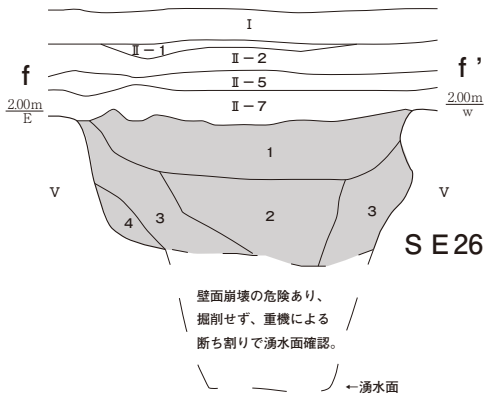


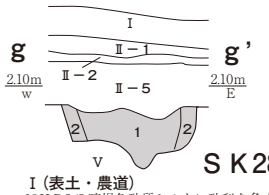
SD33－1（SD33埋土上層）
10YR3/2黒褐色シルトに炭化物粒をわずかに含む。酸化鉄を少し含む。
SD33－2（SD33埋土下層）
10YR3/1黒褐色砂質シルトに酸化鉄を少し含む。
SK35－1（SK35埋土上層）
10YR3/2黒褐色シルトにⅤ層を粒状に2％含む。酸化鉄を少し含む。
SK35－2（SK35埋土下層）
10YR3/1黒褐色シルトにⅤ層をブロック状に7％含む。

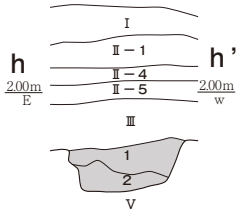
Ⅱ－4（盛土・旧水田表土）
10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に10％含む。
Ⅱ－6（盛土・旧水田床土）
10YR6/6明褐色粘土質シルト。
SD43－1（SD43埋土）
10YR4/2灰黄褐色シルトにⅤ層をブロック状に2％含む。
SD44－1（SD44埋土）
10YR4/2灰黄褐色シルトにⅤ層をブロック状に2％含む。

0　1：40　2m

第19図　浜黒崎町畑遺跡B地区　基本層序・遺構断面図1（1：40）

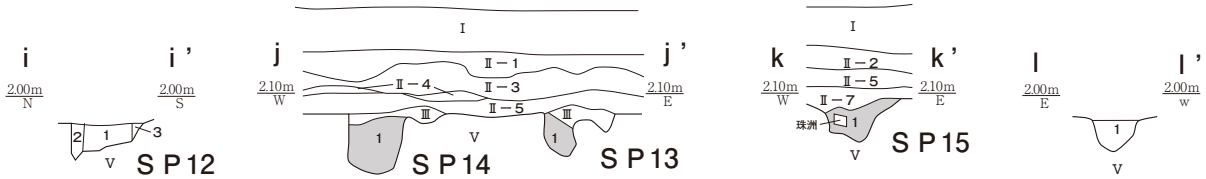






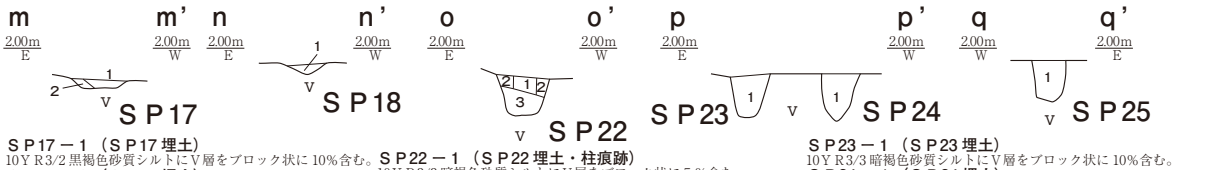
Ⅰ（表土・農道）
10Ｙ R3/3 暗褐色砂質シルトに砂利を多く含む。
Ⅱ－１（盛土・旧水田表土）
10Ｙ R4/3 にぶい黄褐色砂質シルト。
Ⅱ－２（盛土・旧水田表土）
10Ｙ R3/1 黒褐色砂質シルト。
Ⅱ－４（盛土・旧水田床土）
10Ｙ R4/3 にぶい黄褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に 10%含む。
Ⅱ－５（盛土・旧水田床土）
10Ｙ R5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。
Ⅱ－７（盛土・旧水田床土）
10Ｙ R4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト。
Ⅲ（遺物包含層）
10Ｙ R2/3 黒褐色シルトに炭化物粒を少し含む。
ＳＫ28－１（ＳＫ28 埋土）
10Ｙ R3/2 黒褐色シルトにⅤ層をブロック状に３％含む。
ＳＫ28－２（ＳＫ28 埋土）
10Ｙ R3/2 黒褐色シルトにⅤ層をブロック状に 10%含む。
ＳＫ39－１（ＳＫ39 埋土上層）
10Ｙ R4/2 灰黄褐色シルトに 10Ｙ R3/2 黒褐色シルトを 10%、Ⅴ層をブロック状に３％含む。
ＳＫ39－２（ＳＫ39 埋土下層）
10Ｙ R3/2 黒褐色シルトにⅤ層をブロック状に５％含む。

ＳＥ26－１（ＳＥ26 埋土上層）
10Ｙ R3/2 黒褐色シルトにⅤ層をブロック状に２％含む。炭化物粒を少し含む。
ＳＥ26－２（ＳＥ26 埋土中層）
10Ｙ R3/2 黒褐色シルトにⅤ層をブロック状に５％含む。炭化物粒を少し含む。
ＳＥ26－３（ＳＥ26 埋土中層）
10Ｙ R3/3 暗褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に 10%含む。
ＳＥ26－４（ＳＥ26 埋土中層）
10Ｙ R4/2 灰黄褐色シルトにⅤ層をブロック状に２％含む。
Ⅴ（地山・遺構検出面）
10Ｙ R6/6 明黄褐色砂質シルト。



ＳＰ12－１（ＳＰ12 埋土・柱痕跡）
10Ｙ R3/3 暗褐色砂質シルト。
ＳＰ12－２（ＳＰ12 埋土）
10Ｙ R2/2 黒褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に５％含む。炭化物粒を少し含む。
ＳＰ12－３（ＳＰ12 埋土）
10Ｙ R2/2 黒褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に 30%含む。炭化物粒・焼土粒を少し含む。
ＳＰ13－１（ＳＰ13 埋土）
10Ｙ R3/2 黒褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に５％含む。炭化物粒を少し含む。
ＳＰ14－１（ＳＰ14 埋土・柱痕跡）
10Ｙ R3/2 黒褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に２％含む。炭化物粒を少し含む。

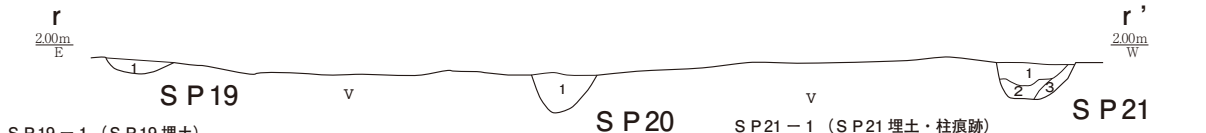
Ⅱ－３（盛土・旧水田床土）
10Ｙ R6/6 明黄褐色粘土質シルト。
ＳＰ15－１（ＳＰ15 埋土）
10Ｙ R3/2 黒褐色シルトにⅤ層を粒状に２％含む。
ＳＰ16－１（ＳＰ16 埋土）
10Ｙ R3/2 黒褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に 30%含む。



ＳＰ17－１（ＳＰ17 埋土）
10Ｙ R3/2 黒褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に 10%含む。
ＳＰ17－２（ＳＰ17 埋土）
10Ｙ R3/3 暗褐色砂質シルト。
ＳＰ18（ＳＰ18 埋土）
10Ｙ R3/2 黒褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に 30%含む。

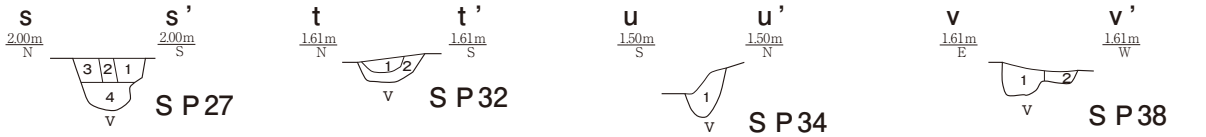
ＳＰ22－１（ＳＰ22 埋土・柱痕跡）
10Ｙ R3/3 暗褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に５％含む。
ＳＰ22－２（ＳＰ22 埋土上層）
10Ｙ R3/2 黒褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に 40%含む。
ＳＰ22－３（ＳＰ22 埋土下層）
10Ｙ R3/3 暗褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に 10%含む。

ＳＰ23－１（ＳＰ23 埋土）
10Ｙ R3/3 暗褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に 10%含む。
ＳＰ24－１（ＳＰ24 埋土）
10Ｙ R3/3 暗褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に 10%含む。
ＳＰ25－１（ＳＰ25 埋土）
10Ｙ R3/3 暗褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に 15%含む。



ＳＰ19－１（ＳＰ19 埋土）
10Ｙ R3/2 黒褐色砂質シルトに 10Ｙ R3/3 暗褐色砂質シルトを 30%、Ⅴ層を粒状に 20%含む。
ＳＰ20－１（ＳＰ20 埋土）
10Ｙ R3/2 黒褐色砂質シルトに 10Ｙ R3/3 暗褐色砂質シルトを 30%、Ⅴ層を粒状に 20%含む。

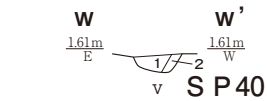
ＳＰ21－１（ＳＰ21 埋土・柱痕跡）
10Ｙ R3/2 黒褐色砂質シルトにⅤ層を粒状に 20%、炭化物粒を少し含む。
ＳＰ21－２（ＳＰ21 埋土・柱痕跡）
10Ｙ R2/2 黒褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に 20%含む。
ＳＰ21－３（ＳＰ21 埋土）
10Ｙ R3/3 暗褐色砂質シルトに炭化物粒を少し含む。



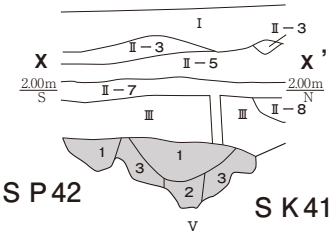
ＳＰ27－１（ＳＰ27 埋土上層）
10Ｙ R3/2 黒褐色砂質シルトにⅤ層を粒状に１％含む。
ＳＰ27－２（ＳＰ27 埋土・柱痕跡）
10Ｙ R3/2 黒褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に３％含む。
ＳＰ27－３（ＳＰ27 埋土上層）
10Ｙ R3/2 黒褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に７％含む。
ＳＰ27－４（ＳＰ27 埋土下層）
10Ｙ R3/2 黒褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に 10%含む。

ＳＰ32－１（ＳＰ32 埋土）
10Ｙ R4/2 灰黄褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に２％含む。
ＳＰ32－２（ＳＰ32 埋土）
10Ｙ R3/2 黒褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に５％含む。
ＳＰ34－１（ＳＰ34 埋土）
10Ｙ R3/2 黒褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に２％含む。
炭化物粒を少し含む。

ＳＰ38－１（ＳＰ38 埋土・柱痕跡）
10Ｙ R3/2 黒褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に２％含む。
炭化物粒を少し含む。
ＳＰ38－２（ＳＰ38 埋土）
10Ｙ R3/2 黒褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に５％含む。



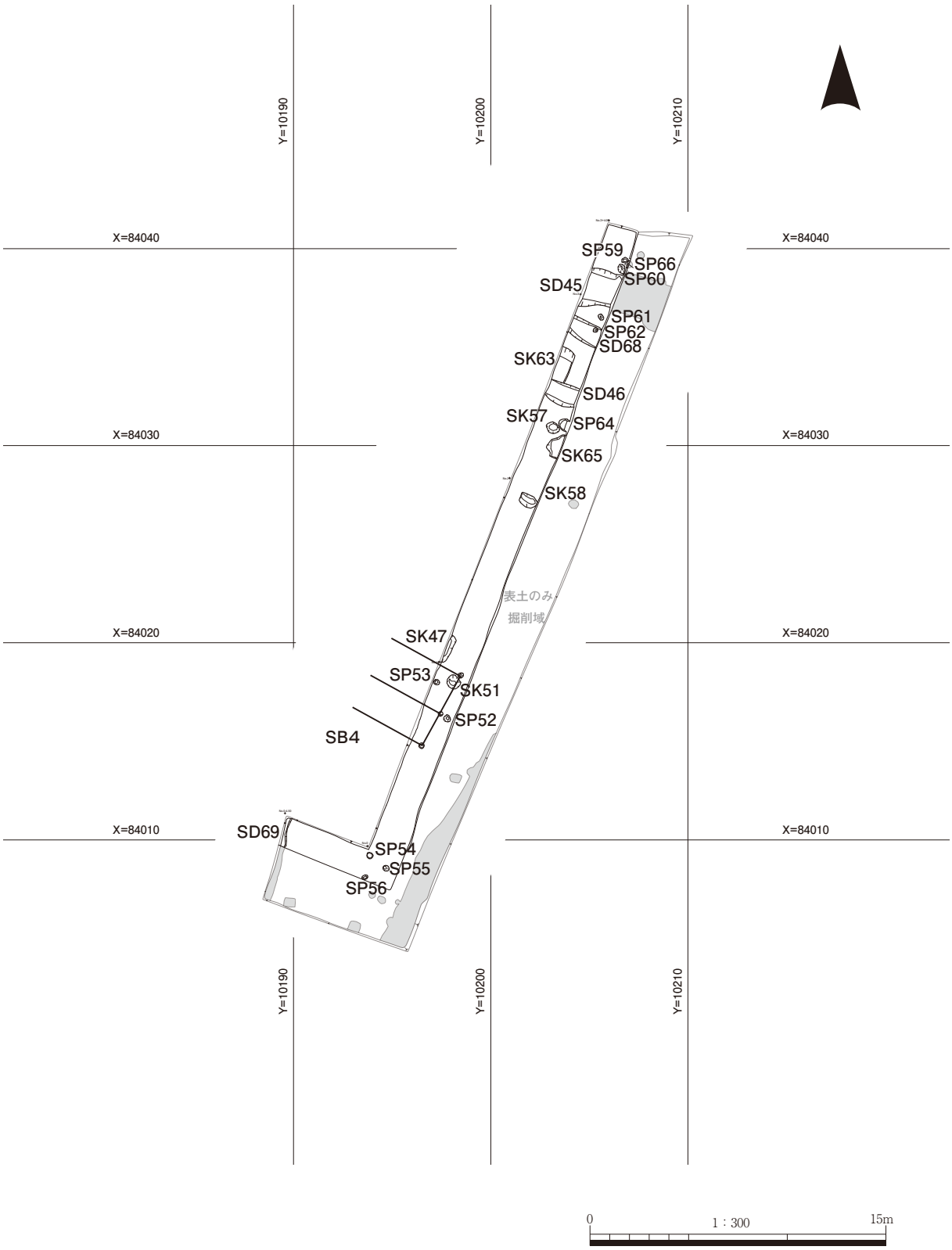
ＳＰ40－１（ＳＰ40 埋土）
10Ｙ R3/2 黒褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に３％含む。
炭化物粒を少し含む。
ＳＰ40－２（ＳＰ40 埋土）
10Ｙ R3/2 黒褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に 10%含む。



Ⅱ－８（盛土・旧水田床土）
10Ｙ R6/6 明黄褐色粘土質シルト。
ＳＫ41－１（ＳＫ41 埋土上層）
10Ｙ R3/2 黒褐色砂質シルトにⅤ層を粒状に１％含む。
ＳＫ41－２（ＳＫ41 埋土下層）
10Ｙ R3/2 黒褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に３％含む。
ＳＫ41－３（ＳＫ41 埋土下層）
10Ｙ R3/2 黒褐色砂質シルトにⅤ層をブロック状に７％含む。
ＳＰ42－１（ＳＰ42 埋土）
10Ｙ R3/1 黒褐色砂質シルト。

0　1：40　2m

第20図　浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　基本層序・遺構断面図２（１：40）



第21図　浜黒崎町畑遺跡Ｃ地区　遺構全体図（１：300）

考えられ、暗褐色砂質シルト。Ⅳ層は地山で、遺構検出面にあたり、明黄褐色砂質土である。B地区のⅤ層に相当する。C地区は、B地区の延長にある地区で様相が似ているが、より海岸線に近く、埋土や地山は砂質が強い。

（2）遺構（SB、SD、SK、SP）

検出した遺構は、掘立柱建物1、溝4、土坑5、柱穴・ピット12である。遺構の時期は、B地区の延長であることから、その時期区分にあわせて第Ⅰ～Ⅲ期とする。なお、掘立柱建物については、B地区同様に調査後の整理段階で柱穴の並びと埋土や掘り方から想定したものである。

A　掘立柱建物（SB）

4号掘立柱建物（SB4、第21・23・24図、図版11）

調査区中央にある柱穴群の一つ。SP48・49・50の3基の柱穴の並びから、2間×2間以上の掘立柱建物を想定した。主軸方向はN－29°－Eで、B地区SB3と同じ。柱間距離は、約2m。上面を大きく削平されており、柱穴は浅い。遺物は出土していない。隣接する表土掘削部分で検出したSD33の延長とみられる溝と同じ軸線にある。第Ⅱ期。

B　溝（SD）

45号溝（SD45、第21・22・24・25図、図版11・12）

調査区北側で、北西－南東方向の溝。幅203cmとこの調査区で最も幅広で、深さも56cmと最も深い。断面は逆台形を呈する。埋土は2層で、上層に礫が入る。遺物は、土師器1（48）、須恵器4（49～52）、土錘1（53）が出土している。53は、B地区SD30出土（37）と同類で樽型C類になるとみられる。土師器と須恵器は、いずれも古代の所産で混入と考えている。B地区のSD30とほぼ同じサイズで、礫を含み、この延長と直角に交わることから関連する区画溝などと考えられる。また、約2m離れたSD46と併走する。第Ⅱ期。

46号溝（SD46、第21・22・24・26図、図版11～13）

調査区北側で、北西－南東方向の溝。幅103cm、深さ41cmの断面逆台形。埋土2層からなる。遺物は、土師器20（54～57）、越中瀬戸1（58）、炉壁3（59）が出土している。54～57は古代の土師器。54は椀、55～57は甕。58は越中瀬戸で両肩に耳が付き、中央に注口とみられる穴があり、水注と考える。59は炉壁の一部。これ以外に2点あるが同一個体だろう。SK63を切る。SD45と併走する。第Ⅱ期。

68号溝（SD68、第21・22・24図、図版11）

調査区北側で、北西－南東方向の溝。幅103cm、深さ36cmの断面逆台形。埋土は、3層からなる。軸方向を同一とするSD45・46と併走する可能性もある。遺物は出土していない。第Ⅱ期。

69号溝（SD69、第21・23図）

調査区南西端で、北東－南西方向の溝。大半が調査区外で、全容は不明。埋土は単層で、黒褐色砂質シルト。遺物は出土していない。第Ⅰ期または第Ⅱ期。

C　土坑（SK）

47号土坑（SK47、第21・23・24・26図、図版12）

調査区中央の不整形な土坑。長軸147cm、深さ18cm。埋土は2層で、上部にⅡ層が入る。埋土から掘立柱建物よりも新しい第Ⅲ期。遺物は、須恵器の甕（60）が出土している。

51号土坑（SK51、第21・23・24図）

調査区中央の不整円形の土坑。長軸70cm、深さ24cm。埋土は、2層。遺物は出土していない。掘立

柱建物域にあり、その関連遺構か。第Ⅱ期。

58号土坑（ＳＫ58、第21・22・24図、図版11）

調査区北側の不整形の土坑。長軸94cm、深さ28cm。埋土は２層で、１層はピット状の堆積であることからなんらかの構築物があったのかもしれない。遺物は出土していない。第Ⅰ期または第Ⅱ期。

63号土坑（ＳＫ63、第21・22・24図）

調査区北側の隅円方形の大型土坑。ＳＤ46に切られ、残存で長軸174cm、深さ50cm。B地区の西側にみられるような竪穴状土坑か。とすれば第Ⅰ期か。

65号土坑（ＳＫ65、第21・22・24・26図、図版12）

調査区北側の不整形の土坑。東側は調査区外。埋土は２層で、水平堆積。弥生土器とみられる高杯脚裾部（62）が出土している。小破片で摩滅しており混入と考えている。第Ⅰ期または第Ⅱ期。

Ｄ　柱穴・ピット（ＳＰ）

52・53号ピット（ＳＰ52・53、第21・23・24図）

調査区中央の円形のピット。直径29～38cm、深さ15～21cm。埋土は、１～２層。遺物は出土していない。第Ⅱ期か。

54～56号ピット（ＳＰ54～56、第21・23・24図）

調査区南側の円形のピット。直径29～33cm、深さ５～22cm。埋土は、単層。遺物は出土していない。埋土の土色から第Ⅲ期。

57号ピット（ＳＰ57、第21・22・24図、図版11）

調査区北側の不整円形の柱穴。直径65cm、深さ25cm。埋土は２層で、柱痕跡がある。調査区外にある建物の一部か。遺物は出土していない。第Ⅰ期または第Ⅱ期。

59・60号ピット（ＳＰ59・60、第21・22・24図、図版11）

調査区北側の円形のピット。直径39～50cm、深さ28～45cm。埋土は、単層。遺物は出土していない。埋土の土色から第Ⅲ期。

61号ピット（ＳＰ61、第21・22・24図）

調査区北側の円形のピット。直径32cm、深さ27cm。埋土は、単層。遺物は出土していない。埋土の土色から第Ⅲ期。

62号ピット（ＳＰ62、第21・22・24図）

調査区北側の円形のピット。直径24cm、深さ28cm。埋土は、単層。遺物は出土していない。ＳＤ68を切る。埋土の土色から第Ⅲ期。

64号ピット（ＳＰ64、第21・22・24図、図版13）

調査区北側の円形のピット。直径58cm、深さ20cm。埋土は、単層。遺物は、越中瀬戸の壺底部（61）が出土している。埋土上層から出土しており、混入と考えている。第Ⅰ期または第Ⅱ期。

66号ピット（ＳＰ66、第21・22・24・26図、図版11・12）

調査区北側の円形のピット。直径42cm、深さ50cm。埋土は、単層。遺物は出土していない。第Ⅰ期または第Ⅱ期。ピット断割時に北側の地山から縄文土器（63）が出土している。

（３）遺物（第25・26図・図版12・13）

遺構外からの遺物には縄文土器、土師器、須恵器、越中瀬戸、肥前系陶磁器がある。63は縄文土器で上部をナナメ・ヨコナデ、下部を斜行縄文。前期後半の蜆ヶ森Ⅱ式でも新しい段階とみられる。こ

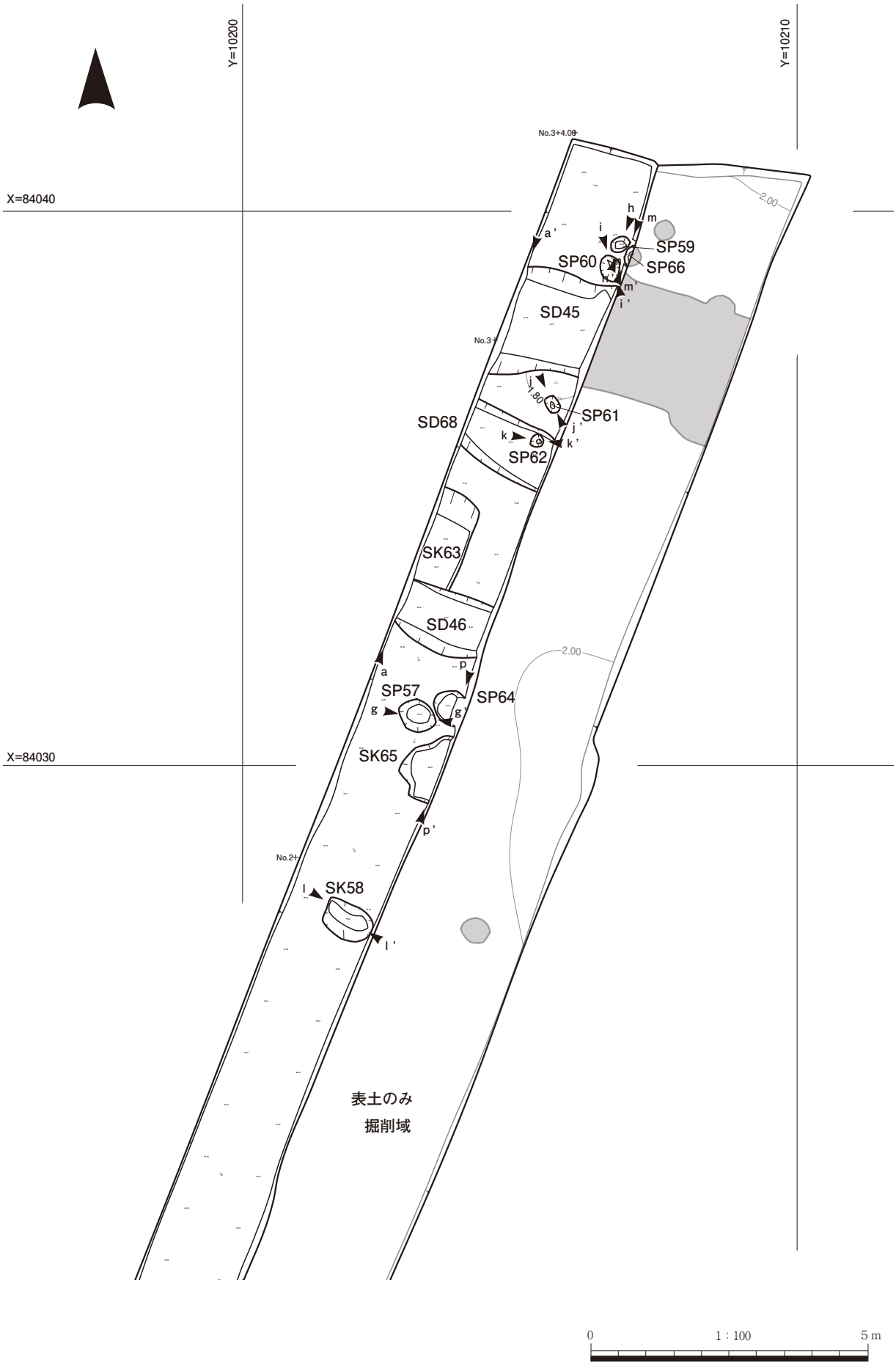
の土器は、地山であるⅣ層中から出土しており、海岸近くの立地から砂丘形成を考える上で、重要な遺物になる。64・65は土師器の甕。64は内面をハケ調整。66～69は須恵器。67は杯身。68・69は甕の一部とみられ、内面に当て具痕が残る。70は越中瀬戸の皿。内外面に一部鉄釉がかかる。71・72は肥前系陶磁器で伊万里か。71は二重格子文、72は草花文と四方襷文の後釉がかかる。

5　小括

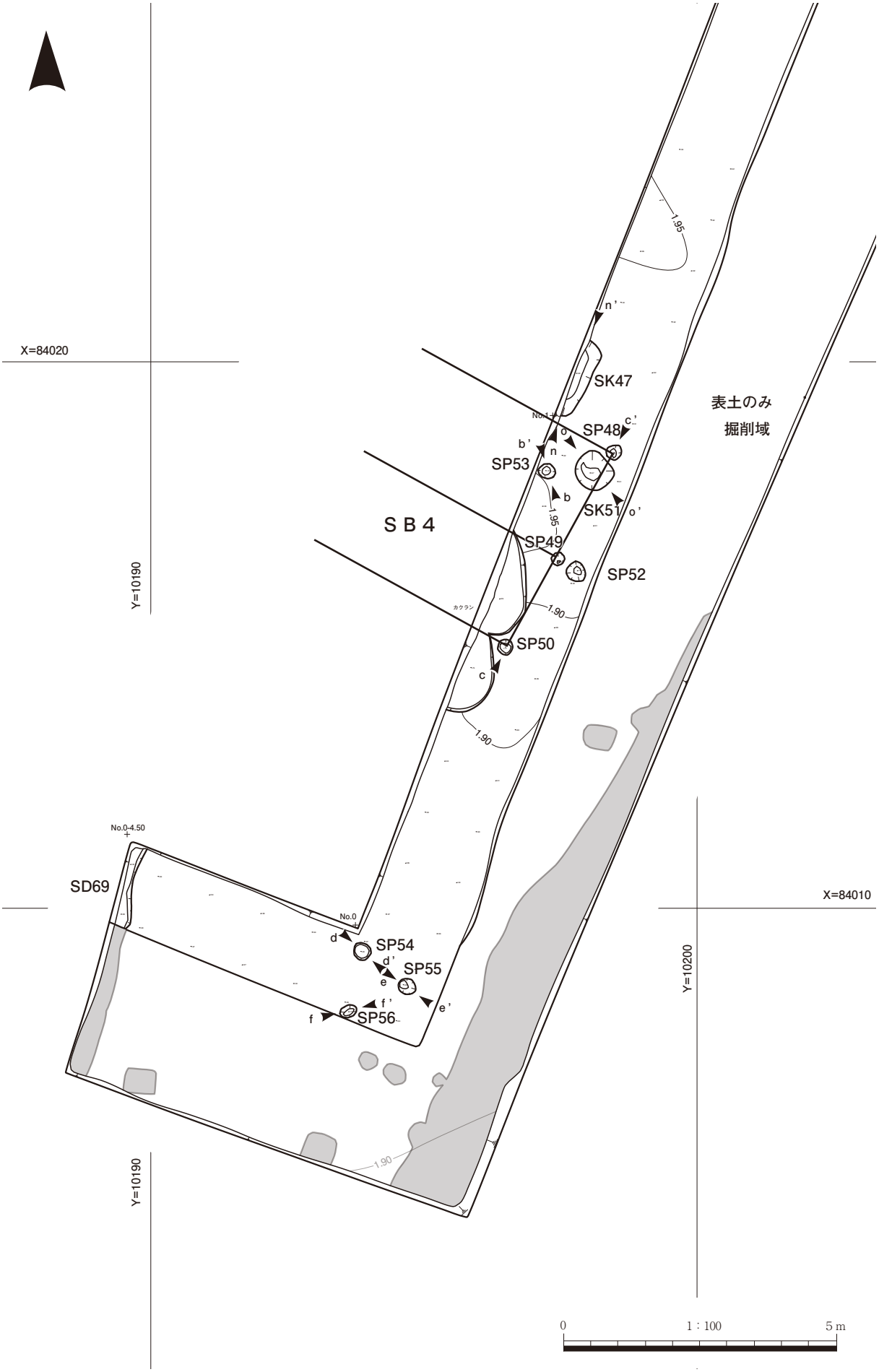
Ｂ・Ｃ地区では、掘立柱建物４棟とそれに沿う区画溝からなる集落の一部を検出した。掘立柱建物は狭小な調査区のため全容はつかめず、柱穴の一部の検出にとどまっている。ＳＢ３とＳＢ４は軸を同じくし、ＳＢ１・２もそれほど変わらない。このことから、おおむね同じ時期と考える。井戸であるＳＥ26はいずれかの建物に付随するものであろう。溝はＢ地区ＳＤ30・33とＣ地区ＳＤ45・46がそれぞれ併走し、直交するものとみられる。ＳＤ33埋土の花粉分析では、樹木花粉はほとんどなく、乾燥地に生える草本花粉が多いことから人為的に開けた環境が想定される。また、イネ属やソバ属の花粉から周辺に水田やソバ畑などの耕作地が広がっていたと考えられる。埋土の珪藻分析結果からは、ＳＤ33は常時流水の可能性は低く、水田の用水などの水路としての利用は考えにくい。また、海岸に近いが、海水の流入はほとんどないようである。このことから、屋敷地の区画や境界を示す溝だったのだろうか。遺構の時期は、ＡＭＳによる年代測定値３点がいずれも弥生時代と古い値を示しているが、土壌由来を測定したものとみられ、遺物は少ないが、ＳＤ33中世土師器皿（38）から12世紀、総柱式掘立柱建物が想定されることから中世前半と考えられる。遺構の切り合いから、その前後の時期も遺構が検出されている。富山県埋蔵文化財センターによる令和２（2020）年と令和４（2022）年の試掘調査でも、近くのトレンチから中世土師器や珠洲など中世の遺物が出土している（田中編2022）。また、調査区の東方には、中世の石塔を集積したか所もある（第７図）。このようにＢ・Ｃ地区のある遺跡北側は、中世では中心的な位置にあったのであろう。

一方、Ａ地区はＢ・Ｃ地区より南方に離れた場所にあり、溝以外に主だった遺構はない。出土遺物からＢ・Ｃ地区より新しい13～14世紀を主体にするものと想定される。このため、Ｂ・Ｃ地区とは異なる時期と考えられる。さらに、溝のみであることから、集落というより農耕地の一部の可能性もある。浜黒崎町畑遺跡の遺跡範囲の縁辺にあることから、遺構が希薄なのだろう。また、Ａ地区では大きな地震による液状化現象で発生した噴砂を確認した。文献の記述から幕末（1858年）の安政飛越地震によるものと考えられる。噴砂は１条にすぎないが、沿岸部での地震被害の一端を示す資料である。

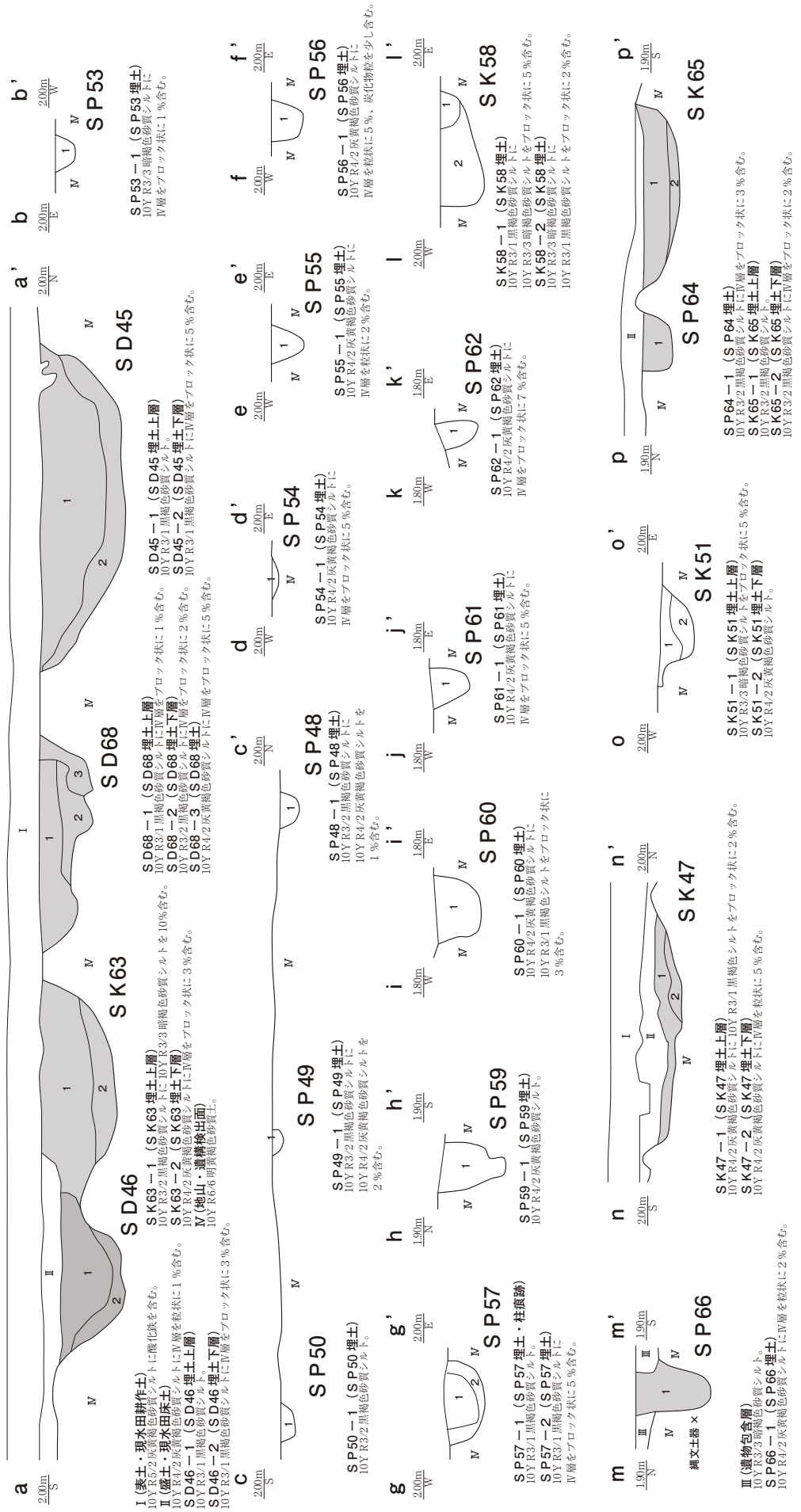
（町田賢一）



第22図　浜黒崎町畑遺跡Ｃ地区　遺構平面図１（１：100）



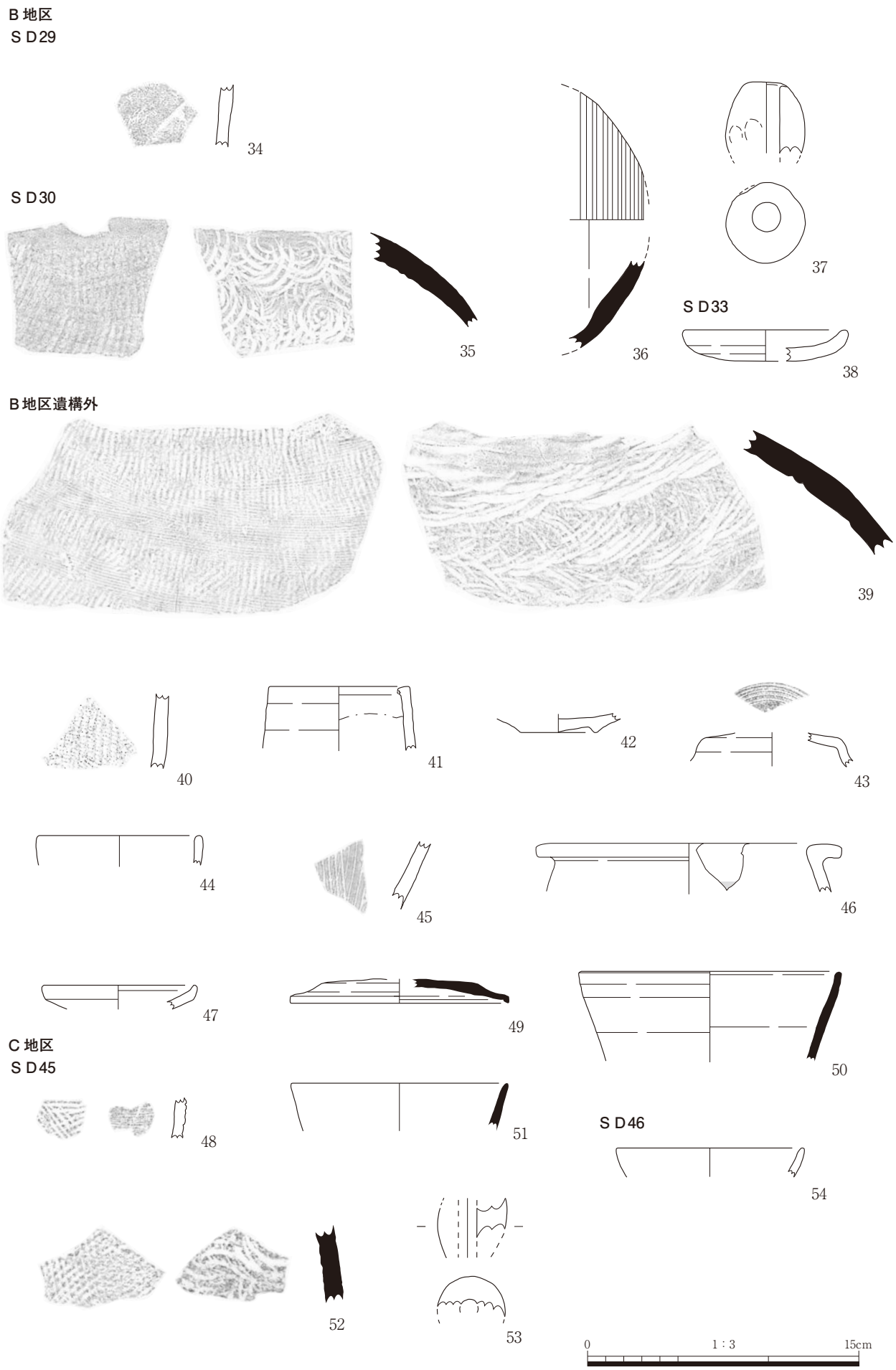
第23図　浜黒崎町畑遺跡Ｃ地区　遺構平面図２（１：100）



第24図　浜黒崎町畑遺跡Ｃ地区　基本層序・遺構断面図（1：40）

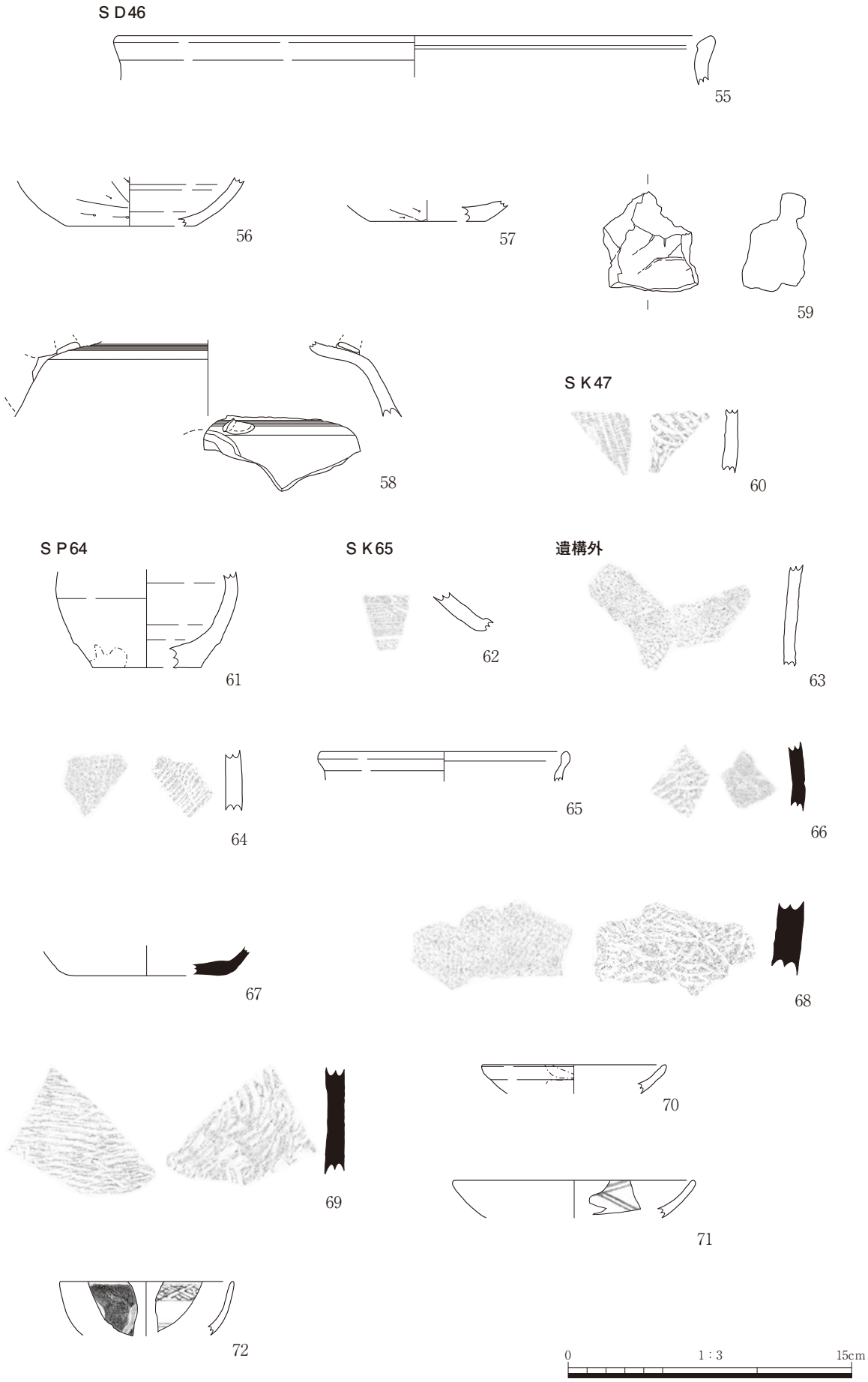
第７表　浜黒崎町畑遺跡　遺構一覧

地区	建物番号	遺構番号	種類	規模（cm）			時期		遺物	埋土	備考	挿図	写真
				長軸	短軸	深さ							
A		ＳＤ１	溝	(252)	310	65	近世～近代			５層	深い。不整形。	10、11	3
		ＳＤ２		(267)	130	38	中世		珠洲	３層	断面逆台形。	10、11、13	3、12
		ＳＤ３		(279)	37	15				１層	細い。浅い。	11 ～ 14	3
		ＳＤ４		(247)	45	28				１層		10、11	3
		ＳＤ６		(246)	84	12				１層	浅い。炭化物混じる。	９、12	4
		ＳＤ７		(387)	45	10				１層	浅い。炭化物混じる。	９～12	4
		ＳＤ８		(259)	42	18				１層		９、12	4
		ＳＤ９		(253)	115	52			珠洲	４層	断面逆台形。＜ＳＫ10	９、12、13	4、12
		ＳＤ11		(239)	63	10	近世～近代			１層	底面に酸化鉄固着	10、11	4
		ＳＫ５	土坑	(57)	69	30	近世？			１層	半分調査区外。	９、11	3
		ＳＫ10		70	43	22	中世			１層	楕円形。>ＳＤ９	９、12	4
		噴砂		(200)	8	73	近世		-	-		９、11	4
B	ＳＢ１	ＳＰ12	掘立柱建物	45	30	20	中世	第Ⅱ期		３層	柱痕跡あり。	15、17、20	５、８、９
		ＳＰ14		48	(19)	30				１層			
		ＳＰ19		(35)	39	9				１層			
		ＳＰ20		43	38	22				１層			
		ＳＰ21		45	43	18				３層			
	ＳＢ２	ＳＰ15		(22)	(８)	25			珠洲	１層			５、８
		ＳＰ17		35	31	5				２層	柱痕跡あり。		
		ＳＰ18		30	26	4				１層			
	ＳＢ３	ＳＰ24		23	21	24				１層			５、９
		ＳＰ25		23	21	22				１層			
		ＳＤ29	溝	(150)	74	25		第Ⅰ期	土師器	２層		15、16、19、25	6
		ＳＤ30		(170)	156	77		第Ⅱ期	土師器、須恵器、土錘	４層			6、7、12
		ＳＤ31		(120)	38	28		第Ⅲ期		１層	＜ＳＰ32	15、16、19	7
		ＳＤ33		(173)	130	90		第Ⅱ期	中世土師器	５層	＞ＳＫ35	18、21、27	６、７、12
		ＳＤ43		(149)	36	9		第Ⅲ期		１層		15、18、19	
		ＳＤ44		(141)	29	14				１層			7
		ＳＥ26	井戸	177	(68)	138		第Ⅱ期		４層	素掘り。	15、16、20	
		ＳＫ28	土坑	70	(21)	31		第Ⅰor Ⅱ期		２層		18、22	8
		ＳＫ35		(240)	(115)	40		第Ⅰ期		２層	＜ＳＤ33	15、16、19	7
		ＳＫ36		42	(24)	35				４層			8
		ＳＫ37		170	(62)	30				１層			
		ＳＫ39		(50)	(12)	30		第Ⅲ期		２層		15、16、20	
		ＳＫ41		(75)	(35)	40		第Ⅰ期		３層	＜ＳＰ42		
		ＳＰ13	柱穴・ピット	(16)	24	22		第Ⅱ期		１層		17、20	8
		ＳＰ16		28	27	17				１層			
		ＳＰ22		32	30	23				３層	柱痕跡あり。		
		ＳＰ23		26	(17)	21				１層			
		ＳＰ27		41	38	28		第Ⅰ期	土師器	４層	柱痕跡あり。	15、16、20	9
		ＳＰ32		35	27	16		第Ⅲ期		２層	柱痕跡あり。		9
		ＳＰ34		22	16	26		第Ⅰ期		１層	＜ＳＤ33	16、20	
		ＳＰ38		45	39	19				２層	柱痕跡あり。		
		ＳＰ40		34	30	7				１層			9
		ＳＰ42		(15)	(５)	16				１層	＞ＳＫ41	15、16、20	
C	ＳＢ４	ＳＰ48	掘立柱建物	28	27	14		第Ⅱ期		１層		21、23、24	11
		ＳＰ49		25	24	8				１層			
		ＳＰ50		28	27	7				１層			
		ＳＤ45	溝	(175)	203	56			土師器、須恵器、土錘	２層	断面逆台形。	21、22、24、25	11、12
		ＳＤ46		(172)	103	41			土師器、越中瀬戸、炉壁	２層	＞ＳＫ63。断面逆台形。	21、22、24、26	11～13
		ＳＤ68		(172)	103	36				３層		21、22、24	11
		ＳＤ69		(155)	(37)	(10)		第Ⅰor Ⅱ期		１層		21、23	
		ＳＫ47	土坑	147	(41)	18		第Ⅱ期	須恵器	２層		21、23、24、26	12
		ＳＫ51		70	63	24				２層		21、23、24	
		ＳＫ58		94	65	28		第Ⅰor Ⅱ期		２層		21、22、24	11
		ＳＫ63		(174)	81	50		第Ⅰ期		２層	＜ＳＤ46		
		ＳＫ65		126	(76)	30		第Ⅰor Ⅱ期	弥生土器？	２層		21、22、24、26	12
		ＳＰ52	柱穴・ピット	38	34	21		第Ⅱ期		２層		21、23、24	
		ＳＰ53		29	28	15				１層			
		ＳＰ54		33	30	5		第Ⅲ期		１層			
		ＳＰ55		33	29	22				１層			
		ＳＰ56		31	22	21				１層			
		ＳＰ57		65	57	25		第Ⅰor Ⅱ期		２層	柱痕跡？	21、22、24	11
		ＳＰ59		39	32	45		第Ⅲ期		１層			
		ＳＰ60		50	36	28				１層			
		ＳＰ61		32	23	27				１層			
		ＳＰ62		24	22	28				１層			
		ＳＰ64		(37)	58	20		第Ⅰor Ⅱ期	越中瀬戸	１層			13
		ＳＰ66		42	(11)	50				１層		21、22、24、26	11、12



第25図　浜黒崎町畑遺跡Ｂ・Ｃ地区　遺物実測図（１：３）

ＳＤ29（34）　ＳＤ30（35～37）　ＳＤ33（38）　ＳＤ45（48～53）　ＳＤ46（54）　Ｂ地区遺構外（39～47）



第26図　浜黒崎町畑遺跡Ｃ地区　遺物実測図（１：３）

ＳＤ46（55～59）　ＳＫ47（60）　ＳＰ64（61）　ＳＫ65（62）　遺構外（63～72）

第８表　浜黒崎町畑遺跡　遺物一覧（１）

挿図	遺物番号	写真	地区	出土地点 グリッド	出土地点 遺構	出土地点 層位	種類	器種		法量（cm） 口径	法量（cm） 器高	法量（cm） 底径	法量（cm） 厚さ	重量（g）	時期		調整 外面	調整 内面	色調 外面	色調 内面	胎土	備考
13	1	12	A		ＳＤ２		珠洲	甕	胴部	-	-	-	1.3	60.5	中世		平行タタキ→摩耗	粘土痕→当て具痕→摩耗	2.5Y4/1黄灰色	10YR7/1灰白色	砂粒	生焼け気味、全体に摩耗
	2				ＳＤ９			壺	口縁部	-	-	-	1.3	26.59		Ⅲ－Ⅳ期？	ヨコナデ		N5/0灰色		石英	
	3				遺構外	盛土	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	-	0.9	6.67	縄文	中期～後期	縦走縄文→ススヨコナデ→付着物		2.5YR7/8橙色	7.5YR4/6褐色	石英、白色粒	
	4					排土	土師器	甕？		-	-	-	0.7	6.83	古墳～古代		摩耗	タテハケ→摩耗	10YR8/3浅黄橙色	2.5Y7/1灰白色	石英、白色粒、雲母	
	5	13					青磁	碗	口縁部	-	-	-	0.5	1.13	中世	14C ？	青磁釉		7.5Y5/2灰オリーブ色			
	6	12		№２～３			中世土師器	皿		12.8	-	-	0.4	11.47		15C ？	ヨコナデ→摩耗		7.5YR8/6浅黄橙色		橙色粒	
	7	13		№０～１			近代陶磁器	碗	底部	-	-	5.4	0.5	7.03	近代		透明釉		5GY灰白色			
	8	12	B	隣接南水田表土表採			土師器	壺	口縁部	-	-	-	0.6	9.16	古代		ヨコナデ→摩耗		10YR8/3浅黄橙色		砂粒、石英	くの字状口縁？
	9						須恵器	杯	蓋	18.0	-	-	0.6	9.04		８～９Ｃ	ロクロナデ		5Y6/1灰色		白色粒	
	10							甕？	胴部	-	-	-	0.8	21.02			格子状タタキ	同心円状当て具痕	N6/1灰色	7.5Y灰色	石英、白色粒、赤色粒	
	11							壺？		-	-	-	0.7	16.79			平行タタキ→カキメ	同心円状当て具痕	2.5Y5/2暗灰黄色		石英、白色粒	
	12						中世土師器	皿	口縁部	9.0	-	-	0.6	5.58	中世		摩耗		10YR8/4浅黄橙色		橙色粒、白色粒	
	13									8.0	-	-	0.5	4.39			ヨコナデ→摩耗		10YR8/2灰白色		橙色粒	
	14									7.8	-	-	0.7	4.04			ススヨコナデ→摩耗		7.5YR8/6黄橙色		橙色粒	灯明皿
	15									12.0	-	-	0.4	3.75			ヨコナデ→ススヨコナデ→ガジリ	板状工具タテナデ→ヨコナデ→ススヨコナデ	7.5YR7/3にぶい橙色		橙色粒	灯明皿
	16								胴部？	-	-	-	0.9	12.4			ナデ→打割		7.5YR7/6橙色		橙色粒、雲母	転用土製品？
	17						珠洲	鉢	口縁部	-	-	-	0.8	13.55		Ⅰ－Ⅱ期？	ヨコナデ→酸化鉄付着		7.5YR7/1灰白色		白色粒	
	18							甕？	胴部	-	-	-	1.5	86.34			斜行タタキ→ヨコナデ→剥離	ヨコナデ	7.5Y4/1灰色	5Y7/1灰白色	白色粒、海綿骨針	
	19							壺		-	-	-	0.8	79.85			ロクロナデ		2.5Y6/1黄灰色		白色粒	
	20	13					瀬戸美濃	卸皿	口縁部	-	-	-	0.6	11.13		15C	緑釉、露胎	卸目→緑釉	5Y6/2灰オリーブ色			
	21						青磁	皿	底部	-	-	4.0	0.5	6.63		12C	青磁釉（発色悪い）	片切り彫り→青磁釉（発色悪い）	5Y7/1灰白色	5Y6/2灰オリーブ色		同安窯系
	22							碗	口縁部	13.2	-	-	0.4	9.17		14C	青磁釉		2.5Y6/3にぶい黄色			龍泉窯系
	23	12					土製品	土錘		5.1	-	-	1.5	25.12	古代～中世		摩耗		7.5YR8/4浅黄橙色		橙色粒多い	上下端欠損
	24	12					土師質土器	鉢？	口縁部	-	-	-	0.8	6.26	近世		ヨコナデ		7.5YR7/6橙色	5YR7/6橙色	砂粒	火鉢？バンドコ？
	25	13					越中瀬戸	皿		-	-	-	0.5	2.23			鉄釉		5YR4/3にぶい赤褐色			
	26							天目	底部	-	-	4.6	0.6	11.97			削りだし高台	鉄釉	10YR8/2灰白色	5YR6/3にぶい橙色		
	27							擂鉢	胴部	-	-	-	0.8	15.25			錆釉	卸目→錆釉	7.5YR4/3褐色			
	28									-	-	-	0.8	23.66			錆釉	卸目→錆釉	5YR5/6明赤褐色		白色粒	
	29						伊万里？	皿	口縁部	12.9	-	-	0.5	8.43			透明釉	透明釉→染付（二重格子文）	5GY8/1灰白色	5B6/1青灰色		
	30							碗		8.8	-	-	0.5	3.88			透明釉→染付（格子文）		10Y8/1灰白色	10BG4/1暗青灰色		
	31									7.5	-	-	0.4	8.83			透明釉→染付（草花文）	透明釉	2.5PB4/4くすんだ青色	2.5GY8/1灰白色		
	32									7.7	-	-	0.4	10.51			透明釉→染付（山水文）	透明釉→染付（四方襷文）	2.5Y8/2灰白色	10GY5/1緑灰色		
	33								口縁～底部	7.0	2.4	1.6	0.4	3.97			透明釉→染付？	透明釉	7.5Y8/1灰白色			

第８表　浜黒崎町畑遺跡　遺物一覧（２）

25	34	12	B		ＳＤ29		土師器	甕	胴部	-	-	-	0.7	13.16	古代		ヨコハケ→摩耗	摩耗	2.5YR6/6橙色		赤色粒	
	35				ＳＤ30	№2	須恵器		肩部	-	-	-	1.2	118.49			平行タタキ	同心円状当て具痕	5Y6/1灰色		石英、長石	
	36							横瓶	側面	-	-	-	0.8	74		８～９C	カキメ	ふくらみ、ナデ、カキメ	2.5Y6/１黄灰色		黒色粒多	閉塞側面？
	37					№1	土製品	土錘		4.4	5.4		1.4	65.36	古代～中世		頂部平坦面、外面ユビオサエ		10YR8/3浅黄橙色		赤色粒	孔径1.6cm
	38				ＳＤ33	№1	中世土師器	皿	口～底部	8.8	1.7	3.6	0.7	16.18	中世	12C ？	２段ナデ	ヨコナデ	10YR8/4浅黄橙色		金雲母多、赤色粒	
	39				遺構外	地山直上	須恵器	甕	肩部	-	-	-	1.4	442.02	古代		平行タタキ→カキメ→ナデ	同心円状当て具痕→ナデ	2.5Y6/１黄灰色		白色粒、長石	
	40					表土	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	-	0.7	15.88	縄文		縦位縄文ＬＲ？	ナデ→膜状の付着物	10YR5/4にぶい黄褐色	10YR3/1黒褐色	骨針、砂粒	
	41	13					瀬戸美濃	筒形香炉？	口縁部	7.8	-	-	0.6	8.54	中世	16C ？	灰釉	灰釉、露胎	2.5Y6/3にぶい黄色	10YR7/2にぶい黄橙色		
	42			№5～6			越中瀬戸	皿	底部	-	-	4.2	0.6	12.03	近世	17C ？	露胎、一部鉄釉	露胎一部鉄釉、重ね焼き痕	2.5Y7/2灰黄色			削り出し高台
	43							壺？	肩部	-	-	-	0.4	8.03		17C ？	平行沈線４→鉄釉	鉄釉一部露胎	5YR4/2灰褐色	7.5YR6/4にぶい橙色		
	44					盛土		碗	口縁部	9.0	-	-	0.5	2.04		17C ？	鉄釉		10YR2/1黒色			
	45			№0～1		表土	唐津	擂鉢	胴部	-	-	-	0.6	13.32		17～18C	ナデ	ナデ→卸目	10YR4/2灰黄褐色		白色粒、赤色粒	
	46			№4～5			近世陶器	壺？	口縁部	17.0	-	-	0.6	14.12			透明釉	透明釉、一部褐色化	5Y7/1灰白色			
	47			№3～4				皿？		8.4	-	-	0.5	4.61			透明釉		2.5Y7/1灰白色			
	48	12	C		ＳＤ45		土師器	甕	胴部	-	-	-	0.6	5.36	古代		平行タタキ→炭化物	ヨコハケ	7.5YR4/3褐色	7.5YR7/6橙色	白色粒	
	49						須恵器	杯蓋	口縁部	12.0	-	-	0.6	10.87		８～９C	ロクロナデ		2.5Y6/2暗灰黄色		白色粒	擬宝珠欠損
	50							杯身		14.2	-	-	0.5	15.58		８～９C	ロクロナデ→自然釉	ロクロナデ	7.5Y4/1灰色		黒色粒、白色粒	
	51									12.0	-	-	0.5	2.26			ロクロナデ		2.5Y7/2灰黄色		白色粒	
	52							甕	胴部	-	-	-	1.0	32.57			平行タタキ→摩耗	同心円状当て具痕→摩耗	10YR8/3浅黄橙色		黒色粒	生焼け
	53						土製品	土錘		3.9	6.0	-	1.2	21.87	古代～中世		ナデ		10YR7/3にぶい黄橙色		砂粒	２片、孔径1.2cm
26	54				ＳＤ46		土師器	椀	口縁部	10.2	-	-	0.4	2.18	古代		ヨコナデ→摩耗		7.5YR6/4にぶい橙色		白色粒	
	55							甕		31.4	-	-	0.8	13.34			ナデ→摩耗		2.5Y8/3浅黄色		赤色粒、長石	
	56							小型甕	底部	-	-	7.0	0.5	11.72			ヘラケズリ	ヨコナデ→炭化物	10YR6/4にぶい黄橙色		白色粒、長石	
	57									-	-	6.2	0.6	6.38			ヘラケズリ	ヨコナデ	10Y5/3にぶい黄褐色		白色粒	
	58	13					越中瀬戸	耳付水注？	肩部	-	-	-	0.7	39.03	近世	17C ？	平行沈線６→耳部→鉄釉	鉄釉	10YR3/2黒褐色		石英、長石	注口部欠損
	59	12					土製品	炉壁		-	-	-	2.9	46.6	古代～近世			平坦面、赤褐色化	5YR5/4にぶい赤褐色	10YR5/3にぶい黄褐色	小石、砂粒	
	60				ＳＫ47		須恵器	甕	胴部	-	-	-	0.7	9.23	古代		平行タタキ	同心円状当て具痕	N6/0灰色		白色粒	
	61	13			ＳＰ64		越中瀬戸	壺	底部	-	-	5.8	0.8	46.26	近世	17C ？	鉄釉、底部回転糸切？	鉄釉→褐色膜付着	2.5Y4/1にぶい橙色	7.5YR5/6明褐色	白色粒	
	62	12			ＳＫ65		弥生土器？	高杯	脚裾部	-	-	-	0.8	7.27	弥生	後期？	摩耗		10YR7/2にぶい黄橙色		白色粒	
	63			ＳＰ66北	遺構外	地山	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	-	0.6	25.5	縄文前期	蜆ヶ森Ⅱ式	斜行縄文→ナナメナデ	ヨコナデ	10YR7/6明黄褐色	5YR5/6明赤褐色	骨針、長石	
	64			№2～3		表土	土師器	甕		-	-	-	0.8	11.39	古代		ケズリ	ハケ	10YR4/2灰黄褐色		砂粒	
	65					撹乱		小型甕	口縁部	13.0	-	-	0.3	2.55			摩耗		2.5YR6/4にぶい橙色		白色粒	
	66			№2～3		表土	須恵器	甕？	胴部	-	-	-	0.6	7.13			平行タタキ	ナデ	10Y5/1褐灰色		白色粒	
	67							杯身	底部	-	-	8.0	0.8	8.01			ロクロナデ、一部赤褐色化	ロクロナデ、一部コゲ？	2.5Y7/2灰黄色		白色粒	生焼け
	68			№1～2				甕	胴部	-	-	-	1.4	82.72			平行タタキ→ナデ	同心円状当て具痕	5Y5/1灰色		長石、石英	
	69					撹乱				-	-	-	0.8	57.78			平行タタキ	同心円状当て具痕	2.5Y6/1黄灰色		白色粒	
	70	13		№3～4		表土	越中瀬戸	皿	口～胴部	9.6	-	-	0.4	2.18	近世	17C ？	ロクロナデ→一部鉄釉		10YR8/2灰白色			
	71			№0～1		排土	伊万里			12.6	-	-	0.4	4.83		18C ？	透明釉	染付（二重格子文）→透明釉	7.5Y8/1灰白色	2.5B7/3うすい青色		
	72					表土		碗		9.4	-	-	0.3	3.33		18C ？	染付（草花文）→透明釉	染付（四方襷文）→透明釉	5PB3/6くすんだ青色	5Y9/1灰白色		

6　浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区の自然科学分析

はじめに

浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区ＳＤ33埋土と、その上部の遺物包含層であるⅢ層より採取された試料について、放射性炭素年代測定（AMS法）、花粉分析、珪藻分析を行い、ＳＤ33の年代の特定と当時の環境および植生の復原を行う。また、珪藻分析から海水の流入の有無についても検討する。

（1）分析試料

分析試料は、遺物包含層のⅢ層、ＳＤ33（２・３・４・５層）より採取された試料５点である。これらは、花粉分析と珪藻分析に共通の試料で、ＳＤ33の２・３・４層については放射性炭素年代測定（ＡＭＳ法）も行う。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

（2）放射性炭素年代測定（AMS法）

A　化学処理工程

a　木質片の化学処理

①　メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。

②　酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により、不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では、水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、１M未満の場合は「AaA」と第９表に記載する。

③　試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

④　真空ラインで、二酸化炭素を精製する。

⑤　精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

⑥　グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

b　土壌の化学処理

①　試料を超純水の中に入れ、超音波で分散させた後、ふるいにかけて根等の混入物を除去する。ふるいを通過した土を乾燥させ、この後の処理に用いる。

②　酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用い、第９表に「HCl」と記載する。

以下、ａ③以降と同じ。

B　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

C　算出方法

①　δ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第９表）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

② ^{14}C年代（Libby Age：yrBP、第９表）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（０yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用し、δ^{13}Cによって同位体効果を補正する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±１σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

③ pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正されている（第９表）。

④ 暦年較正年代（または単に較正年代）とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（１σ＝68.3％）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下１桁を丸めない^{14}C年代値である（第10表の「暦年較正用（yrBP）」）。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20較正曲線（Reimer et al. 2020）を用い、OxCalv4.4較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正の結果を第10表（１σ・２σ暦年代範囲）に示す。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。今後、較正曲線やプログラムが更新された場合、「暦年較正用（yrBP）」の年代値を用いて較正し直すことが可能である。

D　測定結果

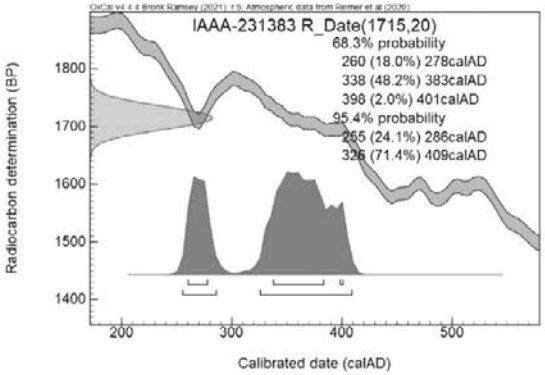
第９表　浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C、^{14}C年代（Libby Age）、pMC）

測定番号	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C補正あり	
					LibbyAge（yrBP）	pMC（%）
IAAA-231383	浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区 ＳＤ33　２層	土壌	HCl	-14.17±0.28	1,720±20	80.77±0.21
IAAA-231384	浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区 ＳＤ33　３層	土壌	HCl	-14.92±0.22	1,680±20	81.18±0.21
IAAA-231385	浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区 ＳＤ33　４層	土壌	HCl	-15.82±0.25	1,630±20	81.64±0.2

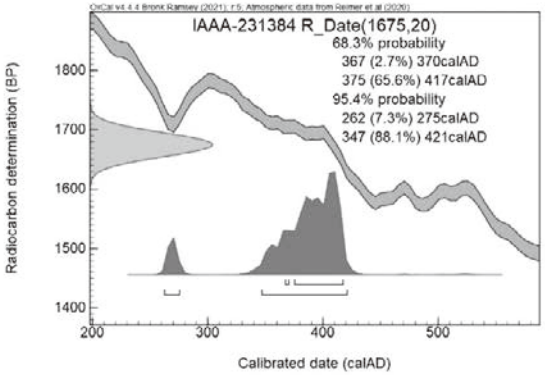
第10表　浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　放射性炭素年代測定結果（暦年較正用^{14}C年代、較正年代）

測定番号	試料名	暦年較正用（yrBP）	較正条件	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
IAAA-231383	B地区 遺物包含層 SD33 ２層	1715±20	OxCal v4.4 IntCal20	260calAD - 278calAD（18.0%） 338calAD - 383calAD（48.2%） 398calAD - 401calAD（ 2.0%）	255calAD - 286calAD（24.1%） 326calAD - 409calAD（71.4%）
IAAA-231384	B地区 遺物包含層 SD33 ３層	1675±20	OxCal v4.4 IntCal20	367calAD - 370calAD（ 2.7%） 375calAD - 417calAD（65.6%）	262calAD - 275calAD（ 7.3%） 347calAD - 421calAD（88.1%）
IAAA-231385	B地区 遺物包含層 SD33 ４層	1629±19	OxCal v4.4 IntCal20	412calAD - 436calAD（39.7%） 465calAD - 475calAD（ 9.1%） 501calAD - 508calAD（ 5.2%） 516calAD - 530calAD（14.2%）	406calAD - 480calAD（63.5%） 493calAD - 537calAD（32.0%）

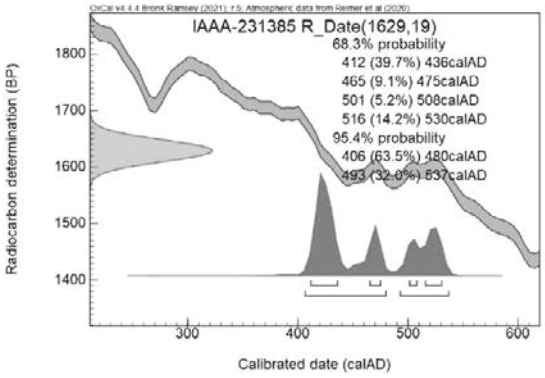
ＳＤ33の２・３・４層の試料はいずれも土壌で、二酸化炭素の重量（%）はそれぞれ5.1%、4.4%、4.6%であった。土壌では、有機物が多く含まれればその有機物が生きていた時代に近い年代値を示すと考えられ、多少年代の異なるものが混入しても年代値への影響は限定的であるとみなされる。しかし、有機物含有量が少ない場合、そこに含まれる炭素の由来が不明確になり、年代値に大きな影響を及ぼすことがあり、結果には注意が必要である。なお、埋土であることから、埋土が堆積物として形成された時期の年代を示すか影響されることも考えられ、遺構の年代と異なることもある。



浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区 ＳＤ33　２層



浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　ＳＤ33　３層



浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　ＳＤ33　４層

第27図　浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　暦年較正年代グラフ

（３）花粉分析

A　分析の特色

花粉分析は、花粉層序によるゾーン解析で地層を区分し、ゾーン間比較によって植生や環境の変化を復原する方法で、第四紀学研究においてよく実施されている。そのため普通は湖沼などの堆積物が対象となり、堆積盆単位など比較的広域な植生・環境の復原を行う方法として用いられる。遺跡調査においては、遺構内の堆積物など局地的でかつ時間軸の短い堆積物も対象となり、より現地性の高い植生・環境・農耕の復原もデータ比較の中で行える場合もある。さらに遺物包含層など、乾燥的な環境下の堆積物も対象となり、その分解性も環境の指標となる。また、風媒花や虫媒花などの散布能力などの差で、狭い範囲の植生に由来する結果が得られるなど、陸域の堆積物が分析に適さないわけではない。

B　分析方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

①　試料から１㎤を採量

②　0.5％リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え、15分間湯煎

③　水洗処理の後、0.25㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去

④　25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

⑤　水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す

⑥　再び氷酢酸を加えて水洗処理

⑦　沈渣にチール石炭酸フクシン染色液を加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製

⑧　検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡（Nikon ECLIPSE *Ci*）によって300～1000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉（1973）、中村（1980）を参照して行った。イネ属については、チール石炭酸フクシンで染色を施すことにより特徴がより鮮明になるため、中村（1974,1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定している。なお、花粉分類では樹木花粉（AP）および非樹木花粉（NAP）となるが非樹木花粉（NAP）は草本花粉として示した。

C　結果

a　分類群

出現した分類群は、樹木花粉15、樹木花粉と草本花粉を含むもの３、草本花粉21、シダ植物胞子２形態の計41分類群である。これらの学名と和名および粒数を第11表に示し、花粉数が50個以上計数できた試料については、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第28図に示す。また、主要な分類群は顕微鏡写真に示した（第29図）。同時に寄生虫卵についても観察したが、検出されなかった。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

スギ、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、サン

ショウ属、トチノキ
〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕
　クワ科－イラクサ科、マメ科、ウコギ科
〔草本花粉〕
　ガマ属－ミクリ属、イネ科、イネ属、カヤツリグサ科、ネギ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ツリフネソウ属、アリノトウグサ属－フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、ナス科、オオバコ属、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属
〔シダ植物胞子〕
　単条溝胞子、三条溝胞子

b　花粉群集の特徴

遺物包含層のⅢ層、ＳＤ33（２・３・４・５層）において、下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。

下位の５層では、樹木花粉が３％、草本花粉が78％、樹木・草本花粉が９％、シダ植物胞子が10％を占める。草本花粉では、ヨモギ属、イネ属を含むイネ科の出現率が高く、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科が伴われ、ソバ属が出現する。他に樹木・草本花粉のクワ科－イラクサ科の出現率も比較的高く、樹木花粉はわずかである。

４層では、樹木花粉が８％、草本花粉が78％、樹木･草本花粉が６％、シダ植物胞子８％を占める。５層と類似した出現傾向を示し、草本花粉では、ヨモギ属、イネ属を含むイネ科の出現率が高く、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科が伴われる。樹木・草本花粉のクワ科－イラクサ科の出現率も比較的高く、樹木花粉では、スギ、コナラ属コナラ亜属が低率に出現する。

３層、２層では、出現傾向が極めて類似し、樹木花粉が３～５％、草本花粉が80～81％、樹木・草本花粉が８～６％、シダ植物胞子９％を占める。草本花粉では、イネ属を含むイネ科が優占し、イネ属の割合も高い。ヨモギ属、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科が伴われ、ソバ属が出現する。樹木・草本花粉のクワ科－イラクサ科の出現率も比較的高く、樹木花粉のコナラ属コナラ亜属が低率に出現する。

上位のⅢ層では、樹木花粉が４％、草本花粉が76％、樹木・草本花粉が７％、シダ植物胞子13％を占める。イネ属を含むイネ科、ヨモギ属の出現率が高く、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科が伴われ、ソバ属が出現する。樹木・草本花粉のクワ科－イラクサ科の出現率も比較的高く、樹木花粉のコナラ属コナラ亜属が低率に出現する。

D　花粉分析から推定される植生と環境

遺物包含層のⅢ層、ＳＤ33（２・３・４・５層）において、下位より花粉群集の特徴から植生と環境の復原を行う。下位の５層の時期は、ＳＤ33の周囲には樹木がほぼなく、草本が優勢に分布する環境であった。この環境は、最上部のⅢ層まで継続する。排水のよいやや乾燥した畑地や人里を好むヨモギ属、イネ科の草本が繁茂する陽当たりのよい比較的乾燥した環境であった。樹木・草本花粉のクワ科－イラクサ科も路傍や荒れ地に生育するカナムグラやカラムシの草本や二次林のヤマグワの可能性が高く、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科などの人里植物ないし耕地雑草とともに混在する。アブラナ科にはアブラナやダイコン類の栽培植物が含まれ、明らかな畑作物であるソバ属が検出され、これらの畑作が行われたと考えられる。また、イネ属も検出され、周辺地域で水田が分布する。

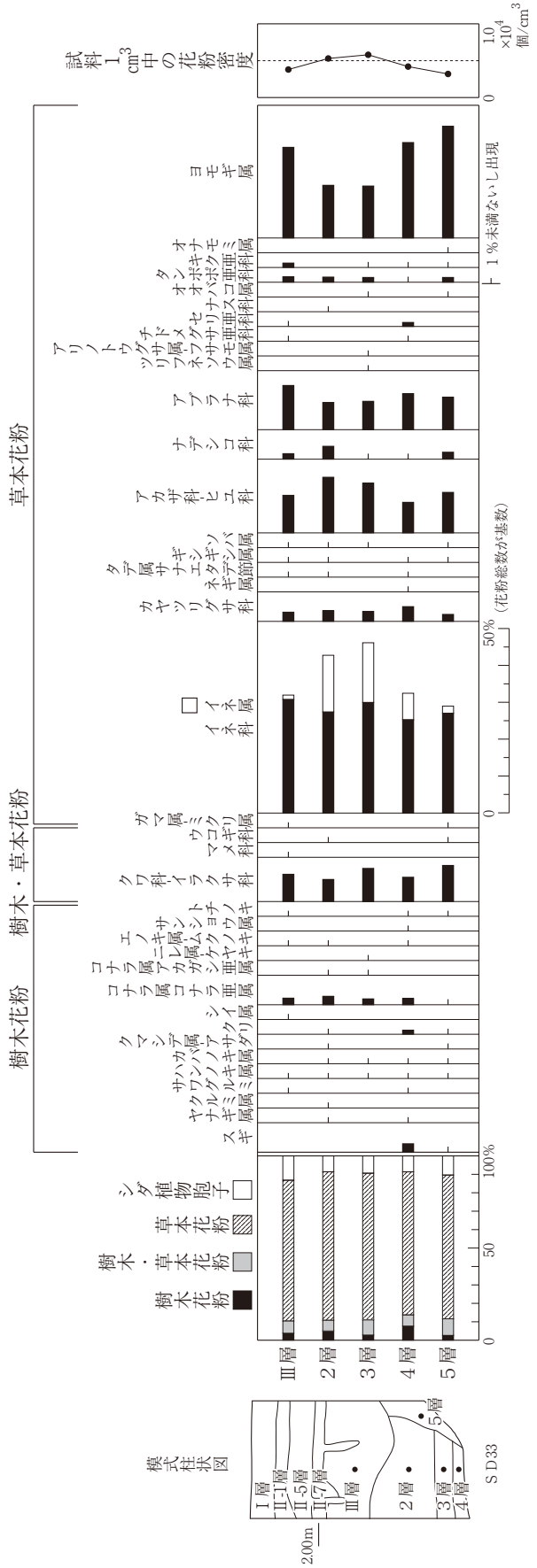
４層の時期は、下位の５層と大きな変化は見られず、周囲にはイネ科、ヨモギ属、クワ科－イラク

サ科の草本などが繁茂する陽当たりのよい比較的乾燥した環境で、水田とアブラナ科の畑が分布する。周辺地域にはコナラ属コナラ亜属などの二次林が分布し、周辺地域の山地にスギが分布していた。

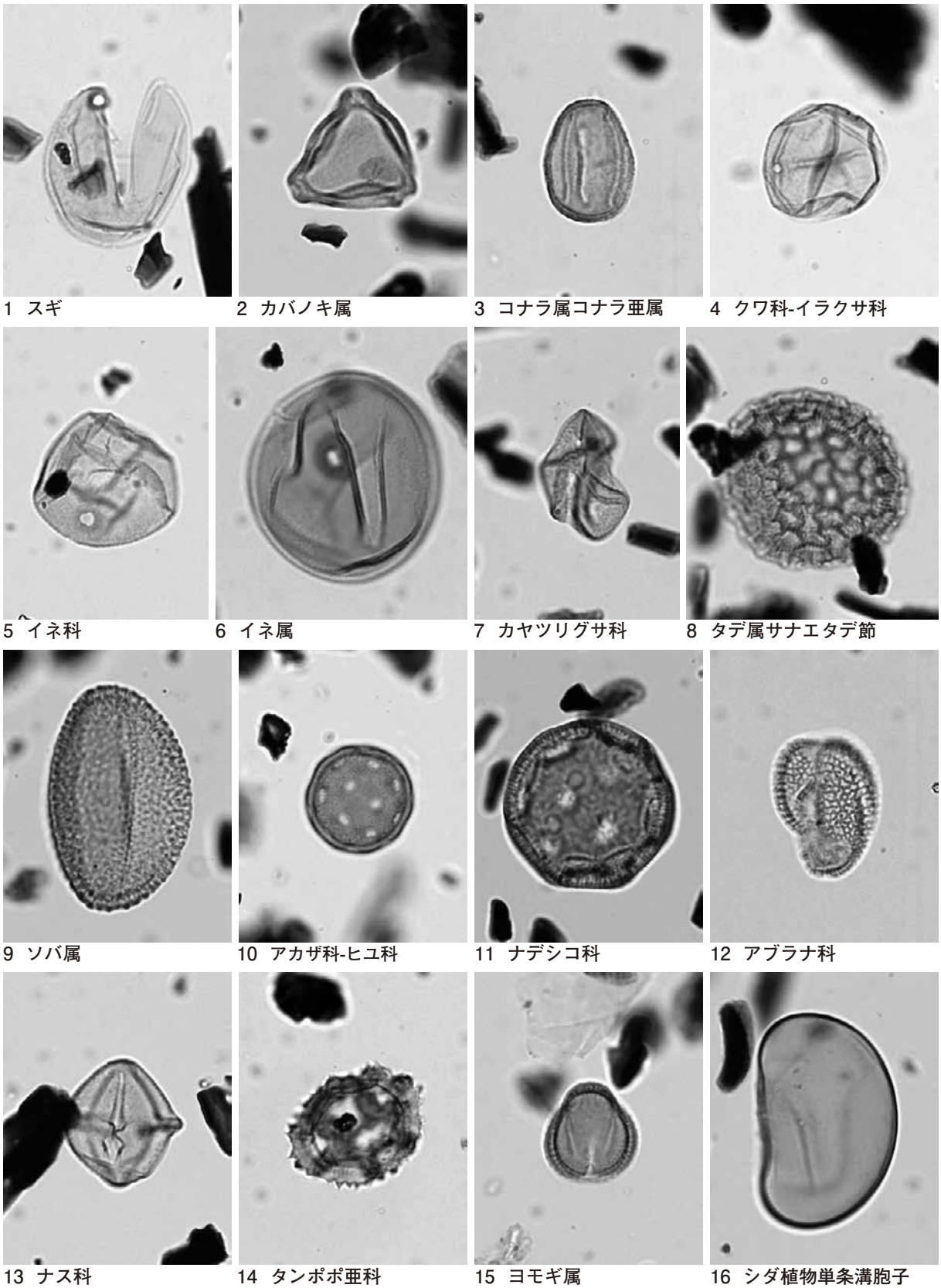
３層、２層の時期は、イネ属の割合が増加し、本地点か近隣で水田が営まれる。Ⅲ層の時期も大きな変化は認められないが、本地点ないし近隣で水田が衰退し、ソバ、アブラナ科の畑作は継続して行われた。

第11表　浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　花粉分析結果

Taxa（分類群）		浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　Ⅲ層・ＳＤ33				
Scientific name（学名）	Japanese name（和名）	Ⅲ層	２層	３層	４層	５層
Arboreal pollen	樹木花粉					
Cryptomeria japonica	スギ				8	1
Salix	ヤナギ属		1		1	
Juglans	クルミ属		1			
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ	1			2	
Alnus	ハンノキ属	3	2	1	2	2
Betula	カバノキ属		1	1	1	1
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ		1			1
Castanea crenata	クリ		1		4	1
Castanopsis	シイ属	2				
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	6	8	6	6	2
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属		1	1		
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ			3		
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ	1	3		1	
Zanthoxylum	サンショウ属				1	
Aesculus turbinata	トチノキ	1			3	1
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉					
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	24	21	34	23	31
Leguminosae	マメ科	1				
Araliaceae	ウコギ科		1			1
Nonarboreal pollen	草本花粉					
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属	1				1
Gramineae	イネ科	100	96	113	88	86
Oryza	イネ属	4	54	61	25	6
Cyperaceae	カヤツリグサ科	8	10	10	14	6
Allium	ネギ属				1	
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節	1	1		2	
Rumex	ギシギシ属	1	1		1	1
Fagopyrum	ソバ属	2	1	1		1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	33	53	51	29	35
Caryophyllaceae	ナデシコ科	5	12	3	3	6
Cruciferae	アブラナ科	39	26	29	34	28
Impatiens	ツリフネソウ属			1		
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属-フサモ属			1		
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	1			1	
Apioideae	セリ亜科	2			4	
Solanaceae	ナス科		1			
Plantago	オオバコ属			2		2
Lactucoideae	タンポポ亜科	5	5	5	3	4
Asteroideae	キク亜科	4		1	1	3
Xanthium	オナモミ属					1
Artemisia	ヨモギ属	80	50	53	90	96
Arboreal pollen	樹木花粉	14	19	12	29	9
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	25	22	34	23	32
Nonarboreal pollen	草本花粉	286	310	331	296	276
Total pollen	花粉総数	325	351	377	348	317
Pollen frequencies of 1cm³	試料１cm³中の花粉密度	3.8 $\times 10^3$	5.3 $\times 10^3$	5.8 $\times 10^3$	4.2 $\times 10^3$	3.2 $\times 10^3$
Unknown pollen	未同定花粉	5	2	5	9	6
Fern spore	シダ植物胞子					
Monolate type spore	単条溝胞子	42	25	28	15	31
Trilate type spore	三条溝胞子	7	8	11	18	6
Total Fern spore	シダ植物胞子総数	49	33	39	33	37
Parasite eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimains	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal・woods fragments	微細炭化物・微細木片	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
微細植物遺体（Charcoal・woods fragments）	（$\times 10^5$）					
未分解遺体片					0.4	0.5
分解質遺体片		19.7	20.1	29.6	20.5	20.2
炭化遺体片（微粒炭）						



第28図　浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　花粉ダイアグラム



※検出箇所
浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　Ⅲ層：12
ＳＤ33　２層：4-8,10,13,14
ＳＤ33　３層：2,3,9,11,15,16
ＳＤ33　４層：1

第29図　浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　花粉写真

（４）珪藻分析

Ａ　分析の特色

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息域を持っている。珪藻化石群集の組成は、生息当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

Ｂ　分析方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

①　試料から１㎤を採量

②　10％過酸化水素水を加え、加温反応させながら１晩放置

③　上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗（５～６回）

④　残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して、乾燥

⑤　マウントメディアによって封入し、プレパラート作製

⑥　検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡（Nikon ECLIPSE *Ci*）によって600～1000倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

Ｃ　結果

ａ　分類群

試料から出現した珪藻は、真塩性種（海水生種）２、中塩性種（汽水生種）１、貧塩性種（淡水生種）78の計81分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものと、中心域がない種については両端２個につき１個と数えた。分析結果を第12表に示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを第30図に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性はLowe（1974）の記載により、陸生珪藻は小杉（1986）により、環境指標種群は海水生種から汽水生種は小杉（1988）により、淡水生種は安藤（1990）による。また、主要な分類群は顕微鏡写真に示した（第31図）。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

〔貧塩性種〕

Achnanthidium minutissimum、*Amphora montana*、*Caloneis molaris*、*Caloneis silicula*、*Cocconeis disculus*、*Diploneis pseudovalis*、*Encyonema silesiacum*、*Eunotia minor*、*Eunotia praerupta*、*Gomphonema parvulum*、*Gomphonema pseudoaugur*、*Hantzschia amphioxys*、*Humidophila contenta*、*Lemnicola hungarica*、*Luticola mutica*、*Navicula cohnii*、*Navicula cryptocephala*、*Navicula cryptotenella*、*Navicula kotschyi*、*Navicula veneta*、*Neidium alpinum*、*Neidium bisulcatum*、*Nitzschia amphibia*、*Nitzschia nana*、*Nitzschia palea*、*Nitzschia* spp.、*Pinnularia appendiculata*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia interrupta*、*Pinnularia microstauron*、*Pinnularia obscura*、*Pinnularia schoenfelderi*、*Pinnularia* spp.、*Pinnularia viridis*、*Placoneis elginensis*、*Rhopalodia gibberula*、*Sellaphora pupula*、*Stauroneis phoenicenteron*、*Surirella angusta*

ｂ　珪藻群集の特徴

遺物包含層のⅢ層、ＳＤ33（２～５層）において、下位より珪藻構成と珪藻組成の変化の特徴を記載する。

下位の５層では、出現した珪藻はほとんど貧塩性種（淡水生種）で、真・好流水性種が４％、真・

好止水性種が10％、流水不定性種が26％、陸生珪藻が59％を占め、真塩性種（海水生種）が１％を占める。陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*の出現率が高く、*Pinnularia borealis*、*Luticola mutica*、*Pinnularia schoenfelderi* が伴われる。他に真流水性種で沼沢湿地付着生種の*Placoneis elginensis*、流水不定性種の*Encyonema silesiacum*、*Nitzschia palea*の出現率が比較的高い。

４層では、密度が極めて低く、珪藻はほとんど検出されない。

３層では、出現したのは貧塩性種（淡水生種）ばかりで、真･好流水性種が12％、真･好止水性種が８％、流水不定性種が19％、陸生珪藻が61％を占める。陸生珪藻のHantzschia amphioxysの出現率が高く、*Pinnularia appendiculata*、*Pinnularia schoenfelderi* 、*Pinnularia borealis*、*Luticola mutica*が伴われる。他に好止水性で沼沢湿地付着生種の*Stauroneis phoenicenteron*の出現率が比較的高く、真流水性種で沼沢湿地付着生種の*Placoneis elginensis*、流水不定性種で沼沢湿地付着生種の*Pinnularia viridis*が伴われる。

２層では、出現した珪藻はほとんど貧塩性種（淡水生種）で、真・好流水性種が３％、真・好止水性種が８％、流水不定性種が13％、陸生珪藻が76％を占め、中塩性種（汽水生種）がわずかに出現する。陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*が高率に出現し、*Luticola mutica*、*Pinnularia schoenfelderi*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia appendiculata*が伴われる。

Ⅲ層では、密度が極めて低く、珪藻はほとんど検出されない。

D　珪藻分析から推定される堆積環境

遺物包含層のⅢ層、ＳＤ33（２～５層）において、珪藻群集の特徴から堆積環境の復原を行う。

下位の５層の時期は、*Hantzschia amphioxys*を主とする陸生珪藻の割合が高く、陸生珪藻の中でも分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い種群で占められる。他に真流水性種で沼沢湿地付着生種の*Placoneis elginensis*や流水不定性種の*Encyonema silesiacum*、*Nitzschia palea*が出現し、湿った程度の土壌の環境が主要となるが、部分的もしくは短時期に水域が伴われたと考えられる。

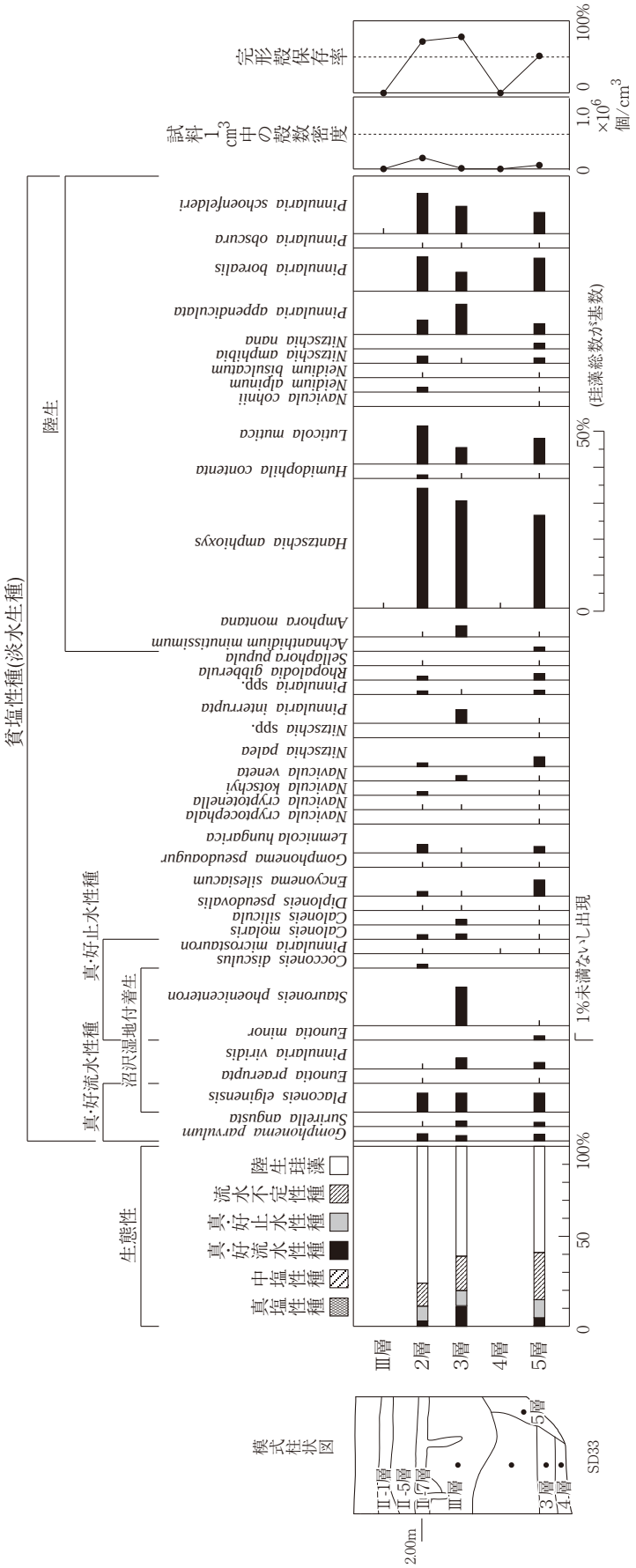
４層では、珪藻密度が極めて低く、珪藻の生育できない乾燥した環境であったか、堆積速度が速く珪藻が集積出来なかったことなどが考えられるが、花粉分析の結果で、大きな変化が認められないことから、堆積速度が速かったと推定される。

３層の時期は、*Hantzschia amphioxys*を主とする陸生珪藻の割合が高く、陸生珪藻の中でも分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い種群で占められ、好止水性で沼沢湿地付着生種の*Stauroneis phoenicenteron*、真流水性種で沼沢湿地付着生種の*Placoneis elginensis*が出現し、湿った程度の土壌の環境が主要となるが、部分的もしくは短時期に水域が伴われ、水生植物が生育する沼沢地の環境も分布していた。

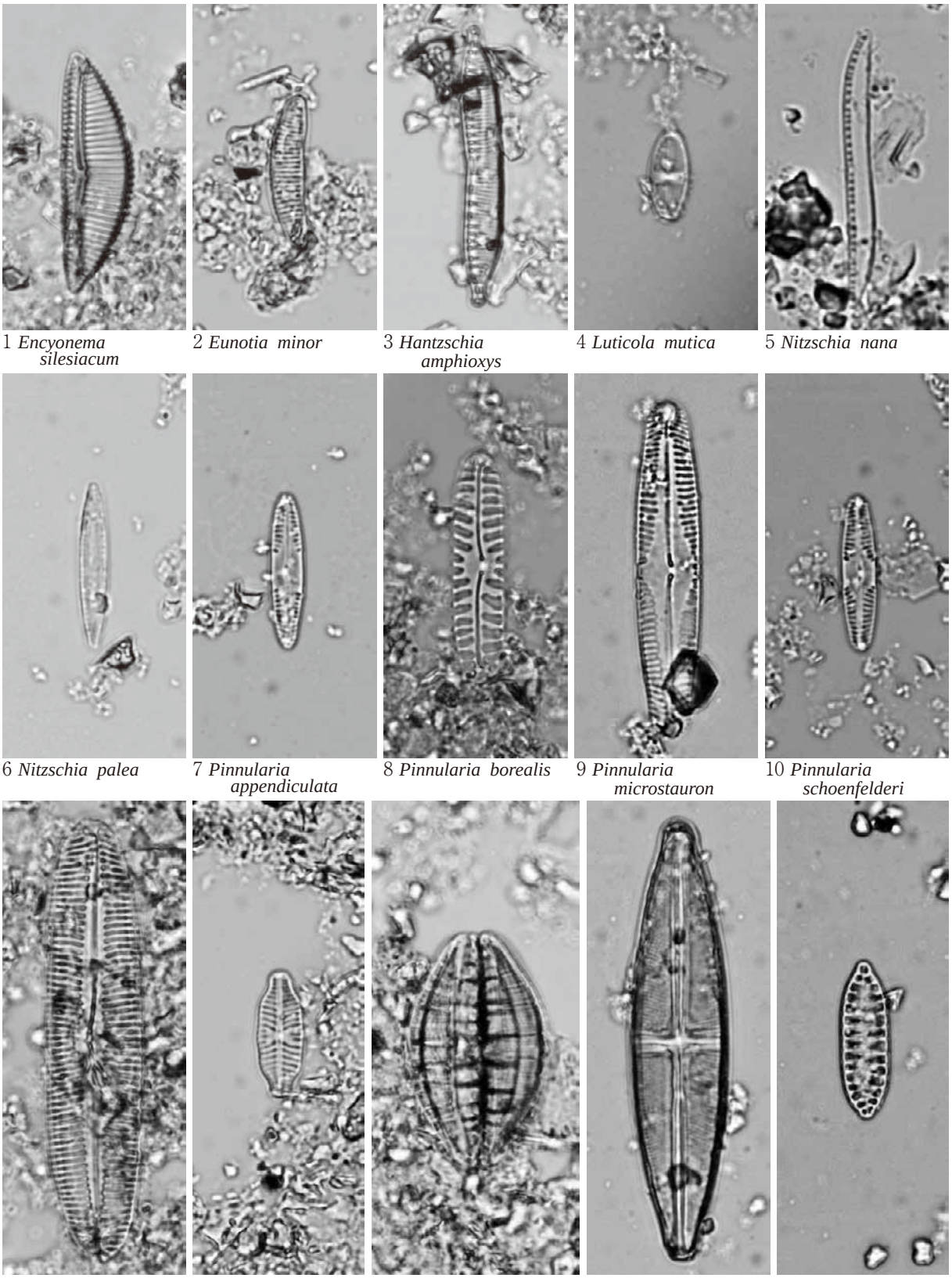
第12表　浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　珪藻分析結果

分類群	浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区 Ⅲ層 ＳＤ33				
	Ⅲ層	２層	３層	４層	５層
貧塩性種（淡水生種）					
Achnanthidium minutissimum					4
Amphora copulata					1
Amphora montana		1	4		1
Caloneis bacillum					2
Caloneis hyalina		1			
Caloneis lauta		1			1
Caloneis molaris		4	2		3
Caloneis silicula			2		1
Cocconeis disculus		3			
Craticula cuspidata		1			1
Cyclotella meneghiniana		1			
Cymbella cuspidata			1		
Cymbella minuta					2
Cymbella tumida			1		
Cymbella turgidula					1
Diadesmis confervacea		1			1
Diploneis pseudovalis		1	1		3
Encyonema gracile		1			1
Encyonema silesiacum		4	1		15
Eunotia bilunaris					1
Eunotia minor					4
Eunotia paludosa-rhomboidea					1
Eunotia pectinalis		1			
Eunotia praerupta		1			3
Fragilaria capitellata		1			
Frustulia vulgaris		1			1
Gomphonema angustatum			1		
Gomphonema clevei					1
Gomphonema gracile					1
Gomphonema parvulum		6	2		6
Gomphonema pseudoaugur		1	1		1
Gomphonema spp.		1			
Hantzschia amphioxys	2	101	39	1	87
Hippodonta pseudoacceptata					1
Humidophila contenta		3	1		1
Lemnicola hungarica		7	1		6
Luticola goeppertiana					2
Luticola mutica		32	6		24
Navicula clementioides					1
Navicula cohnii					3
Navicula cryptocephala					3
Navicula cryptotenella		1	1		1
Navicula ignota		1			1
Navicula kotschyi		3			2

分類群	浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区 Ⅲ層 ＳＤ33				
	Ⅲ層	２層	３層	４層	５層
Navicula placenta v. *obtusa*		1			1
Navicula radiosa					1
Navicula spp.					1
Navicula trivialis					1
Navicula veneta			2		1
Neidium alpinum		4			1
Neidium bisulcatum		2			1
Nitzschia amphibia		6	1		5
Nitzschia clausii					1
Nitzschia nana					5
Nitzschia palea		3			9
Nitzschia paleacea	1				
Nitzschia spp.					3
Pinnularia acrosphaeria					2
Pinnularia aestuarii					1
Pinnularia appendiculata		12	11		10
Pinnularia borealis		29	7		31
Pinnularia hemiptera					1
Pinnularia interrupta			5		3
Pinnularia microstauron		2		1	3
Pinnularia obscura		2	1		3
Pinnularia schoenfelderi	1	34	10		20
Pinnularia spp.		3	1		4
Pinnularia viridis		2	4		6
Placoneis elginensis		16	7		18
Reimeria sinuata		1			1
Rhopalodia gibba			1		
Rhopalodia gibberula		3			6
Sellaphora pupula		1			2
Stauroneis anceps			1		
Stauroneis phoenicenteron			14		1
Surirella angusta		1	2		4
Surirella ovata					1
Tabellaria fenestrata-flocculosa		1			
中塩性種（汽水生種）					
Nitzschia lorenziana		1			
真塩性種（海水生種）					
Coscinodiscus lineatus					1
Neodenticula spp.					1
合　計	4	303	131	2	337
未同定	0	7	2	0	13
破片	4	123	37	0	327
試料１㎤中の殻数密度	0.8 $\times 10^3$	1.7 $\times 10^5$	2.7 $\times 10^4$	0.4 $\times 10^3$	7 $\times 10^4$
完形殻保存率（％）	-	71.6	78.2	-	51.7



第30図　浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　主要珪藻ダイアグラム



※検出箇所

浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区ＳＤ33　２層：3,6,10,12,13　　ＳＤ33　４層：4,7,11,14,15

ＳＤ33　３層：1,2,5,8　　ＳＤ33　５層：9

第31図　浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　珪藻写真

２層の時期も、*Hantzschia amphioxys*を主とする陸生珪藻の割合が高く、陸生珪藻の中でも分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い種群で占められ、真流水性種で沼沢湿地付着生種の*Placoneis elginensis*が出現し、湿った程度の土壌の環境が主要となるが、部分的もしくは短時期に水域が伴われたと考えられる。

Ⅲ層の時期は、珪藻密度が極めて低く、珪藻の生育できない乾燥した環境であったか、堆積速度が速く珪藻が集積出来なかったことが考えられるが、花粉分析の結果で、大きな変化が認められないことから、堆積速度が速かったと推定される。

まとめ

放射線炭素年代測定で、遺物包含層ＳＤ33の２層は338calAD-383calAD（48.2％、１σ）、３層は375calAD-417calAD（65.6％、１σ）、４層は412calAD-436calAD（39.7％、１σ）の結果が得られた。遺構の年代より古く、埋積した堆積物本来の形成年代の影響を受けたとみられる。花粉分析では、各層において花粉群集は類似し、ヨモギ属やアカザ属－ヒユ属の畑作雑草が生育するやや乾燥した環境で、アブラナ科、ソバの畑作が行われ、周辺地域に水田が分布し、また、２層と３層では本地点ないし近隣で水田が行われた。溝は湿った程度の土壌の環境が主要で、部分的もしくは短時期に水域が伴われた。４層とⅢ層の時期は、堆積速度が速かったことが推定された。

（一般社団法人文化財科学研究センター　金原正子）

参考文献

安藤一男1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『東北地理』42　東北地理学会　p.73-88.

伊藤良永・堀内誠示1991「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』６　日本珪藻学会　p.23-45.

金子清俊・谷口博一1987「線形動物・扁形動物.医動物学」『医動物学　付　実験用動物学　新版臨床検査講座』８　医歯薬出版　p.9-134.

金原正明･金原正子1992「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構－藤原京７条１坊－』奈良国立文化財研究所　p.14-15.

金原正明1993「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本　第10巻　古代資料研究の方法』角川書店　p.248-262.

金原正明1999「寄生虫」『考古学と動物学』同成社　p.151-158.

金原正明・金原正子2013「植生と農耕における土壌層分析の実証的研究」『日本文化財科学会　第30回大会研究発表会要旨集』日本文化財科学会　p.112-113.

金原正明・金原正子2015「堆積物と植物遺体の総合的研究」『日本文化財科学会　第32回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会　p.146-147.

小杉正人1986「陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－」『植生史研究』第１号　植生史研究会　p.29-44.

小杉正人1988「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27　日本第四紀学会　p.1-20.

島倉巳三郎1973「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録』５　大阪市立自然史博物館　60p.

鈴木秀和･南雲保2013「珪藻類の分類体系（総説）～現生珪藻の属ランクのチェックリスト」『日本プランクトン学会報』60（2）日本プランクトン学会　p.60-7

土質工学会編1979『土質試験法』p.2-5-1～2-5-23,4-2-1～4-3-11.

中村純1967『花粉分析』古今書院　232p.

中村純 1974「イネ科花粉について､とくにイネ（Oryza sativa）を中心として」『第四紀研究』13　日本第四紀学会　p.187-193.

中村純1977「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』no.10　日本文化財科学会　p.21-30.

中村純1980「日本産花粉の標徴」『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録』第13集　大阪市立自然史博物館　91p.

渡辺仁治2005『淡水珪藻生態図鑑　群集解析に基づく汚濁指数DAIpo, pH耐性能』　内田老鶴圃666p.

Asai,K.&,Watanabe,T.（1995）Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution（2）Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35-47.

Hustedt, F.（1937－1938）Systematische und ologishe Untersuchungen uber die Diatomeen Flora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol, Suppl. 15, p.131－506. Lowe,R.L.（1974）Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh－water diatoms. 333p., National Environmental Reserch. Center.

K. Krammer・H.Lange-Bertalot（1986-1991）Bacillariophyceae,vol.2,no.1-no.4

Theriot, E. C.,J. J. Cannone, R. R. Gutell & A. J. Alverson 2009. The limits of nuclear-encoded SSU rDNA for resolving the diatom ohylogeny. Eur. J. Phycol. 44, p.277-290.

Warnock, P. J. and Reinhard, K. J.（1992）Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. Jounal of Archaeological Science, 19, p.231-245.

第Ⅳ章　浜黒崎悪地遺跡

1　概要（第32図）

浜黒崎悪地遺跡は、あいの風とやま鉄道（旧ＪＲ北陸本線）より南側を平成４（1992）年度から平成６（1994）年度まで富山市教育委員会（小林・堀沢1994・1995）が、北側を令和２（2020）年度に富山県埋蔵文化財センターがほ場整備事業に伴う試掘調査（一部本調査）を行った（田中編2022）。その結果、令和４（2022）年度に富山市教育委員会によって遺跡の範囲変更が行われ、126,743㎡におよぶ巨大な遺跡となった。遺跡の時期は、縄文時代後期・晩期、弥生時代中期、古墳時代前期、奈良時代、平安時代、中世、近世の集落として登録されている。

今回、令和５（2023）年度の調査地は、あいの風とやま鉄道より北側で遺跡北東端のＡ・Ｂ地区、遺跡北西部のＣ・Ｄ地区の４か所である。Ａ地区はＳ１－９号排水路部分の146㎡、Ｂ地区はＳ１－９号取付排水路部分の40㎡、Ｃ地区はＨ３用水路およびＨ３－１号用水路の193㎡、Ｄ地区はＳ１－９－１号排水路の72㎡である。いずれも用水路と排水路掘削に伴う調査であることから、細長い調査区となっている。遺跡の現況は、いずれも水田である。調査前の標高は3.3～4.0mである。

検出した遺構は、溝14、土坑６、柱穴･ピット20、自然流路３。出土遺物は縄文土器２、弥生土器４、土師器79、須恵器５、中世土師器１、白磁１、越中瀬戸３、肥前系陶磁器２の計97点、913.98ｇである。

2　Ａ地区（第33～36・49図、図版14）

（1）基本層序

基本層序は、Ⅰ層からⅢ層まである（第36図）。Ⅰ層は表土で、灰黄褐色シルト。現水田耕作土にあたる。Ⅱ層は現水田の床土とみられる盛土で、２層に分けられる。Ⅱ－１層は暗オリーブ褐色シルト、Ⅱ－２層はにぶい黄褐色砂質シルトである。Ⅲ層は地山で、黄褐色砂質シルト。遺構検出面となっている。

（2）遺構（ＳＤ、ＳＰ、ＮＲ）

検出した遺構は溝５（うち１条は暗渠）、柱穴・ピット３、自然流路（谷）２である。主要な遺構である溝は、二つの自然流路（ＮＲ９とＮＲ10）に挟まれた微高地状の平坦部に形成されている。ＮＲ10より北側にも安定した平坦地はあるが、表土下すぐに地山があり、仮に掘り方の浅い遺構があったとしても削平されてしまった可能性が高い。

Ａ　溝（ＳＤ）

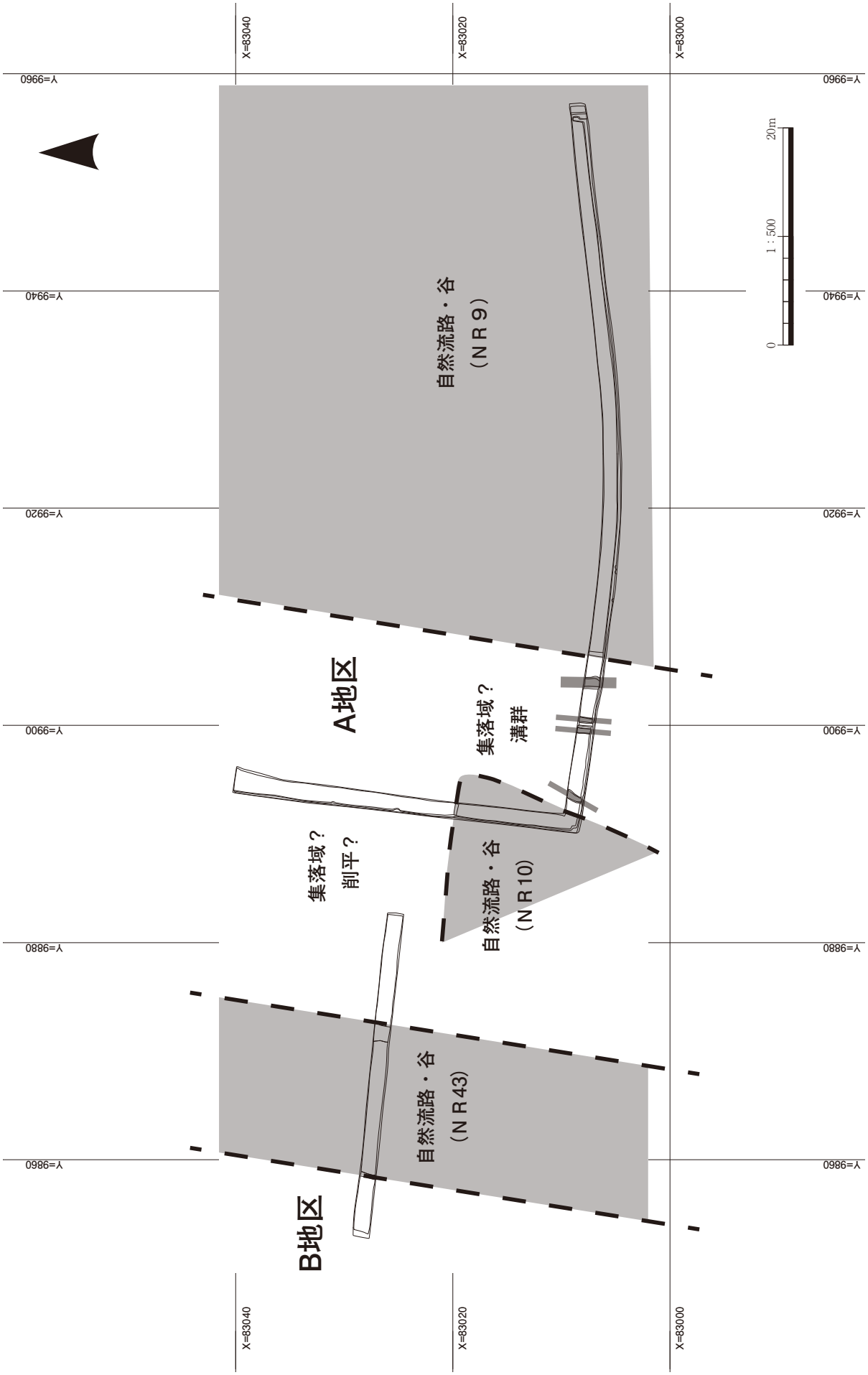
１号溝（ＳＤ１、第34～36・49図、図版14、20）

調査区南西端で、北東－南西方向の溝。幅75cmと幅広だが、深さは13cmで浅い。埋土は、単層。遺物が出土した唯一の遺構。73は古墳時代の土師器肩部で一部外面を欠損するものの、内外面にハケメを明瞭に残す。断面の摩滅はない。古墳時代の遺構か。ＮＲ10の肩部に位置し、境界の溝かもしれない。

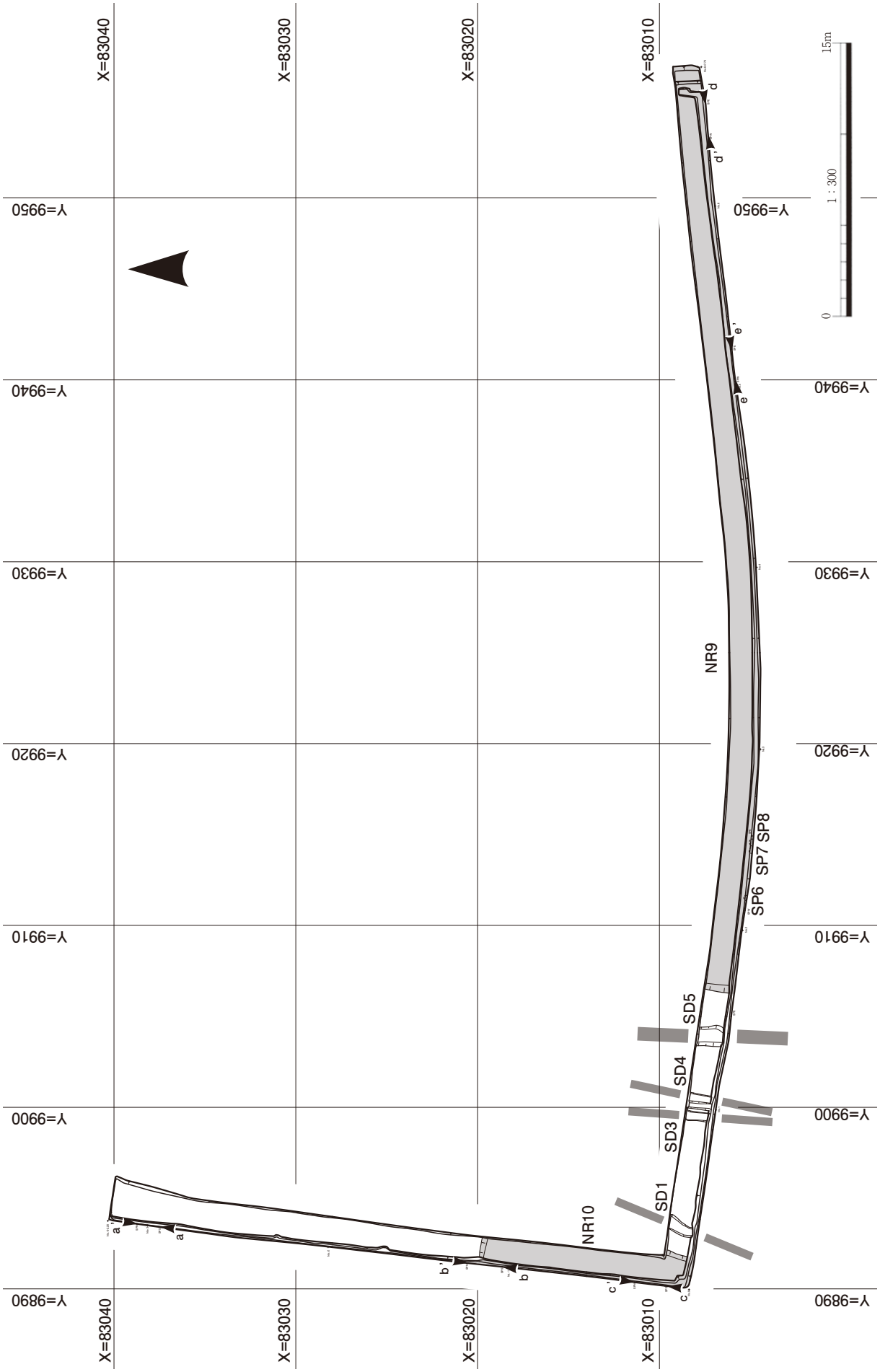
２号溝（ＳＤ２、第35・36図、図版14）

調査区南東で、南北方向の暗渠。断面逆台形。ＳＤ３・４を切る。底面に土管が入っており、近代

第32図　浜黒崎悪地遺跡　調査区位置図（1：1,500）



第33図　浜黒崎悪地遺跡Ａ・Ｂ地区　位置図（１：500）



第34図　浜黒崎悪地遺跡Ａ地区　遺構全体図（１：300）

以降の水田に伴う暗渠。遺物は出土していない。

３号溝（ＳＤ３、第34～36図、図版14）

調査区南東で、南北方向の溝。東側をＳＤ２に切られる。残存幅で54cmと幅広。深さは27cmとしっかりしている。埋土は、単層。表土下のＶ層直上で検出。一段高い地点のＳＤ４と同様の溝。遺物は出土していない。

４号溝（ＳＤ４、第34～36図、図版14）

調査区南東で、南北方向の溝。西側をＳＤ２に切られる。残存幅で46cm、深さ20cmと中規模。埋土は、単層。表土下のＶ層直上で検出。一段高い地点のＳＤ３と同様の溝。遺物は出土していない。

５号溝（ＳＤ５、第34～36図、図版14、15）

調査区南東で、南北方向の溝。幅116cmと調査区で最も幅広、深さも31cmと調査区で最も深い。埋土は、単層。Ⅱ層下のＶ層直上で検出。ＮＲ９の肩部に位置し、境界の溝か。遺物は出土していない。

Ｂ　柱穴・ピット（ＳＰ）

６～８号ピット（ＳＰ６・７・８、第34～36図、図版15）

調査区南側ほぼ中央にあるピット。南壁のみで検出し、約半分が調査区外。断面観察で直径29～40cm、深さ14～18cmで半円形。埋土は単層で、すべて同じ。自然流路ＮＲ９埋土上層の下に掘り込みがあり、ＮＲ９が一度安定化したときにつくられたものか。遺物は出土していない。

Ｃ　自然流路・谷（ＮＲ）

９号自然流路（ＮＲ９、第33～36図、図版15）

調査区の東側の一段低い谷部。長さや幅は調査区外に延び、不明。埋土は上層が黒色シルト、下層が灰黄褐色粘土質シルトの２層。砂層はなく、自然流路というよりは谷状の地形で湿地帯なのだろう。上層の埋没はＳＰ６～８の埋没後のため、一度安定化の後再び湿地化したものと考えられる。遺物は出土していない。富山市教育委員会が推定している常願寺川支流（安達他2002）や富山県埋蔵文化財センター試掘調査報告（田中編2020）にある旧河道Ｇ（第２図）の西岸にあたるのだろう。

10号自然流路（ＮＲ10、第33～36図、図版15）

調査区南西側の一段低い谷部。南北方向に延びるとみられる。長さや幅は調査区外に延び不明。埋土は上層が黒色シルト、下層が灰黄褐色粘土質シルトの２層。砂層はなく、自然流路というよりは谷状の地形で湿地帯なのだろう。遺物は出土していない。ＮＲ９よりは浅い。

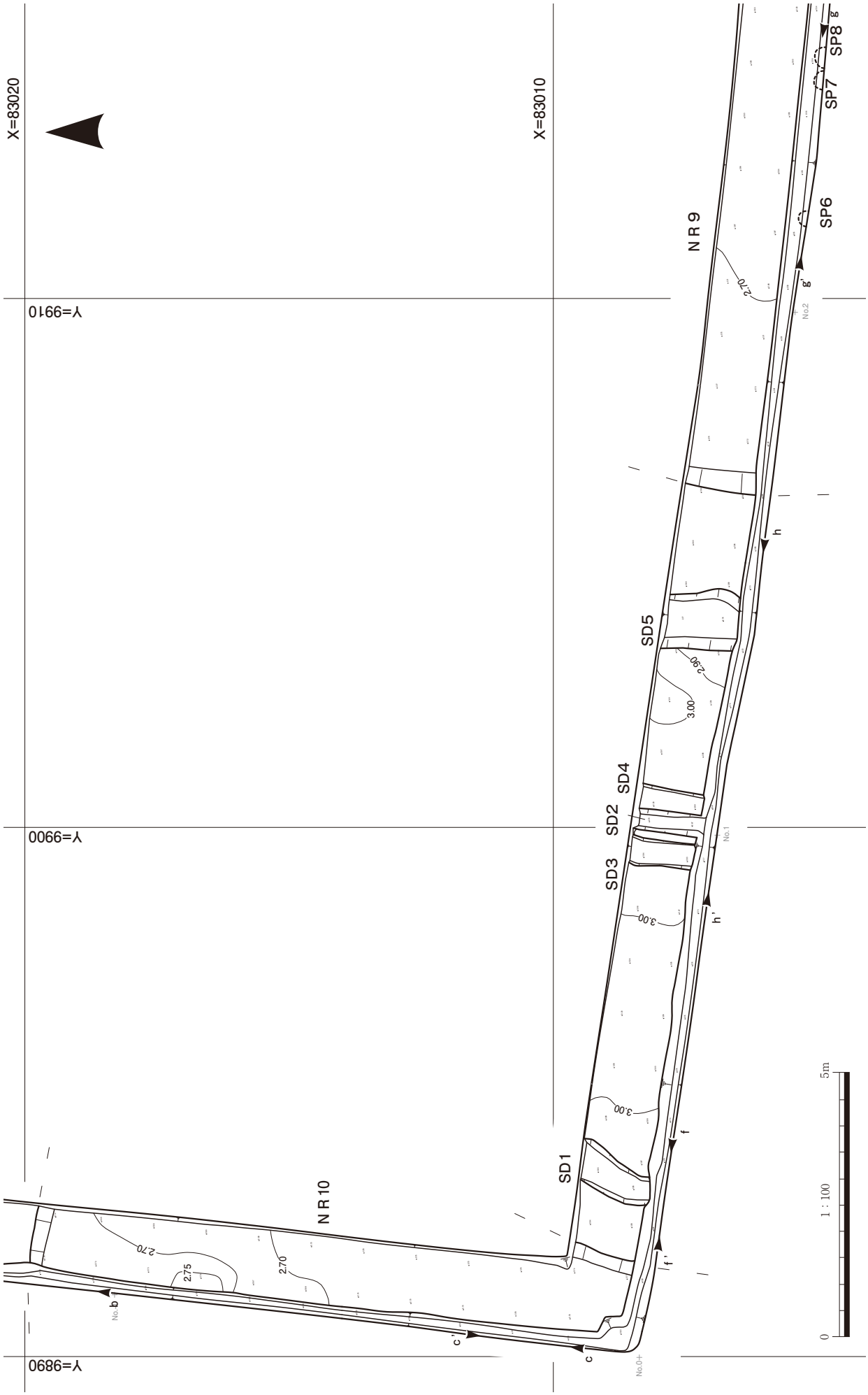
（３）遺物（第49図、図版20）

遺構外の遺物は、土師器、白磁、越中瀬戸がある。74は土師器の壺とみられる破片。外面は摩滅せず、ススが付着。75は白磁の口縁部。変色して、くすんでいる。76は越中瀬戸の擂鉢とみられる破片。摩滅が激しい。

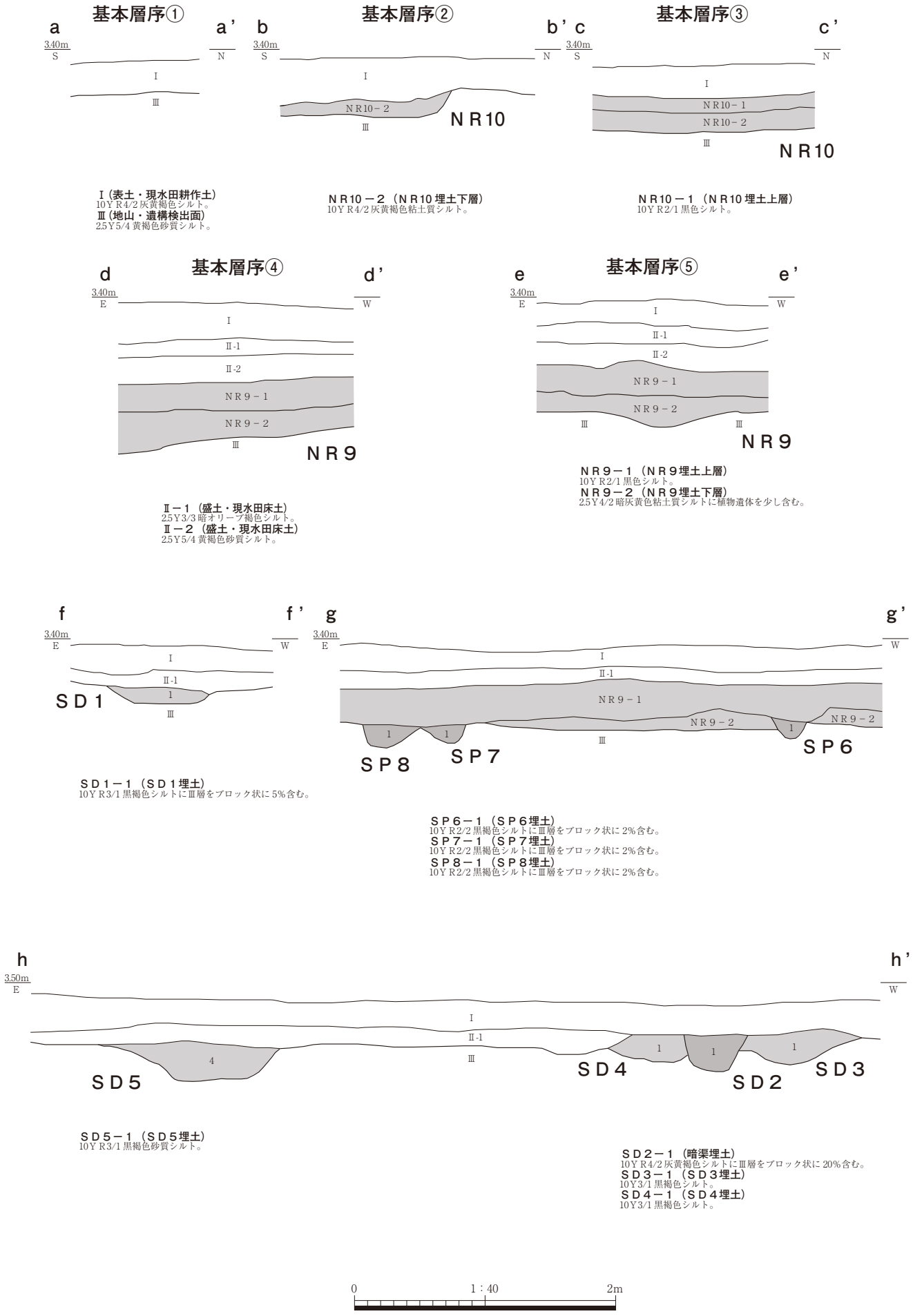
３　Ｂ地区（第33・37～39・49図、図版16）

（１）基本層序

基本層序は、Ⅰ層からⅢ層まである（第38・39図）。Ⅰ層は表土で、灰黄褐色シルト。現水田耕作土にあたる。Ⅱ層は盛土で、７層に分けられる。Ⅱ－１層は攪乱埋土で、黒褐色シルト。Ⅱ－２・３層は配水管埋設土。Ⅱ－２層は明黄褐色粗砂、Ⅱ－３層は黒褐色粘土質シルト。Ⅱ－４～７層は攪乱



第35図　浜黒崎悪地遺跡Ａ地区　遺構平面図（１：100）



第36図　浜黒崎悪地遺跡Ａ地区　基本層序・遺構断面図（１：40）

埋土である。Ⅱ－４は黒褐色シルト、Ⅱ－５層は明黄褐色粗砂、Ⅱ－６層は黒褐色シルト、Ⅱ－７層は黄灰色粘質土シルトである。Ⅲ層は地山で、明黄粗砂。遺構検出面となっている。

（２）遺構（ＮＲ）

検出した遺構は自然流路（谷）１のみである。

Ａ　自然流路・谷（ＮＲ）

43号自然流路（ＮＲ43、第33・37～39図、図版16）

調査区の大半を南北に流れる自然流路もしくは谷部。幅は約140m。長さは調査区外に延び不明。埋土は４層からなり、上層が暗褐色シルト、下層が黄褐色砂質シルトに明黄褐色粗砂を含む。上層は湿地状の堆積だが、下層はブロック状の埋土で一気に埋めたような感じ。遺物は出土していない。埋土土壌は一部を採取し、自然科学分析を行っている。ＡＭＳ年代測定では、上層が近世、下層が弥生時代の年代値を得た。上層は木片であり整合性が高いとみられるが､下層については土壌試料であり、実際よりも古い値が出ているのだろう。Ａ地区との関係から古墳時代以降と考えたい。花粉分析では、イネ属・ソバ属・アブラナ科が検出され、水田やソバ畑など耕作地に近い環境が考えられる。

（３）遺物（第49図、図版20）

遺構外の遺物は、土師器１点と肥前系陶磁器１点（77）が出土している。77は伊万里とみられるⅢの底部。山水文？の染付後、透明釉をかけている。Ⅱ層から出土。

４　Ｃ地区（第40～45・49図、図版17）

（１）基本層序

基本層序は、Ⅰ層からⅣ層まである（第45図）。Ⅰ層は表土で、灰黄褐色シルト。現在の水田耕作土にあたる。Ⅱ層は盛土で、７層に分けられる。Ⅱ－１･２は攪乱埋土で、灰黄褐色シルト。Ⅱ－３･４層は現水田の床土とみられ、Ⅱ－３層がにぶい黄褐色シルト、Ⅱ－４層が灰黄褐色シルトである。Ⅱ－５～７層は旧水田耕作土とみられ、Ⅱ－５層が暗褐色シルト、Ⅱ－６層が黒褐色シルト、Ⅱ－７層が暗褐色シルトである。Ⅲ層は遺物包含層と考えられ、黒褐色シルト。Ⅳ層は地山で、遺構検出面にあたり、黄褐色砂質シルトである。

（２）遺構（ＳＤ、ＳＫ、ＳＰ）

検出した遺構は溝６、土坑４、柱穴・ピット13である。

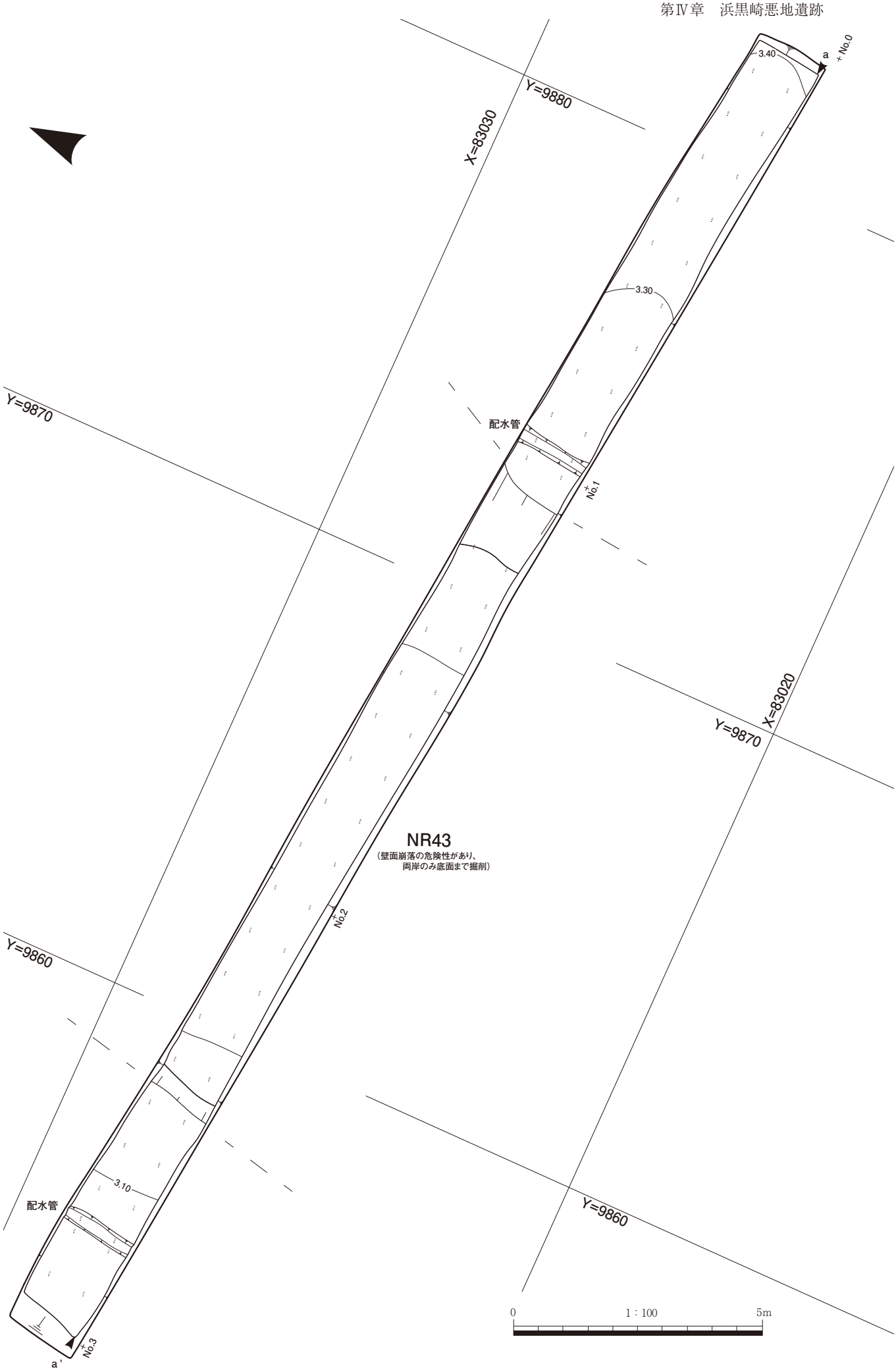
Ａ　溝（ＳＤ）

20号溝（ＳＤ20、第40・44・45図、図版18）

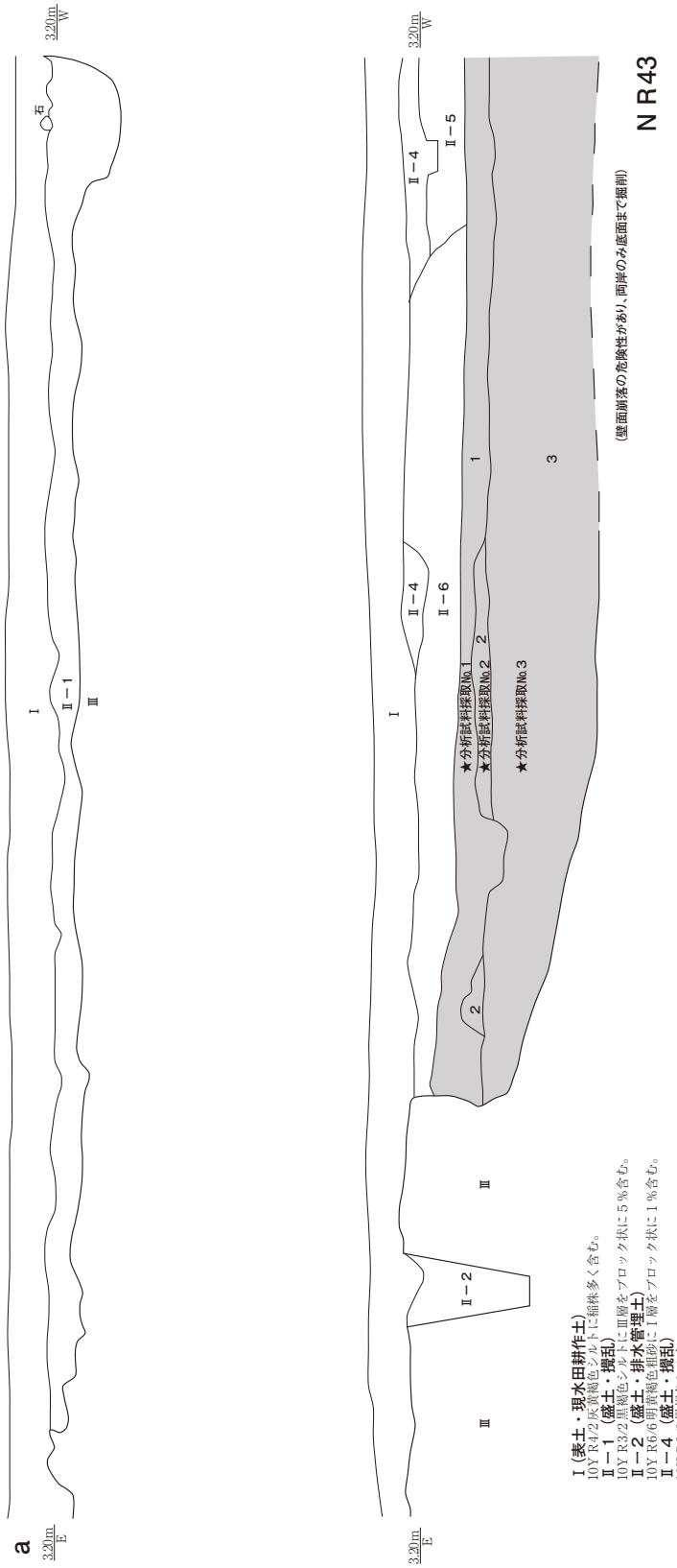
調査区南側を北東－南西方向の溝。幅45cm、深さ22cmで中規模。断面は逆台形で、ＳＤ21を切る。遺物は出土していないが、ＳＤ21とともにほかの遺構とは離れ、違う埋土でそれよりも新しい時期と考える。調査区の北側でその延長がみられないことから途中で止まるか西側へ屈曲する可能性がある。

21号溝（ＳＤ21、第40・44・45図、図版18）

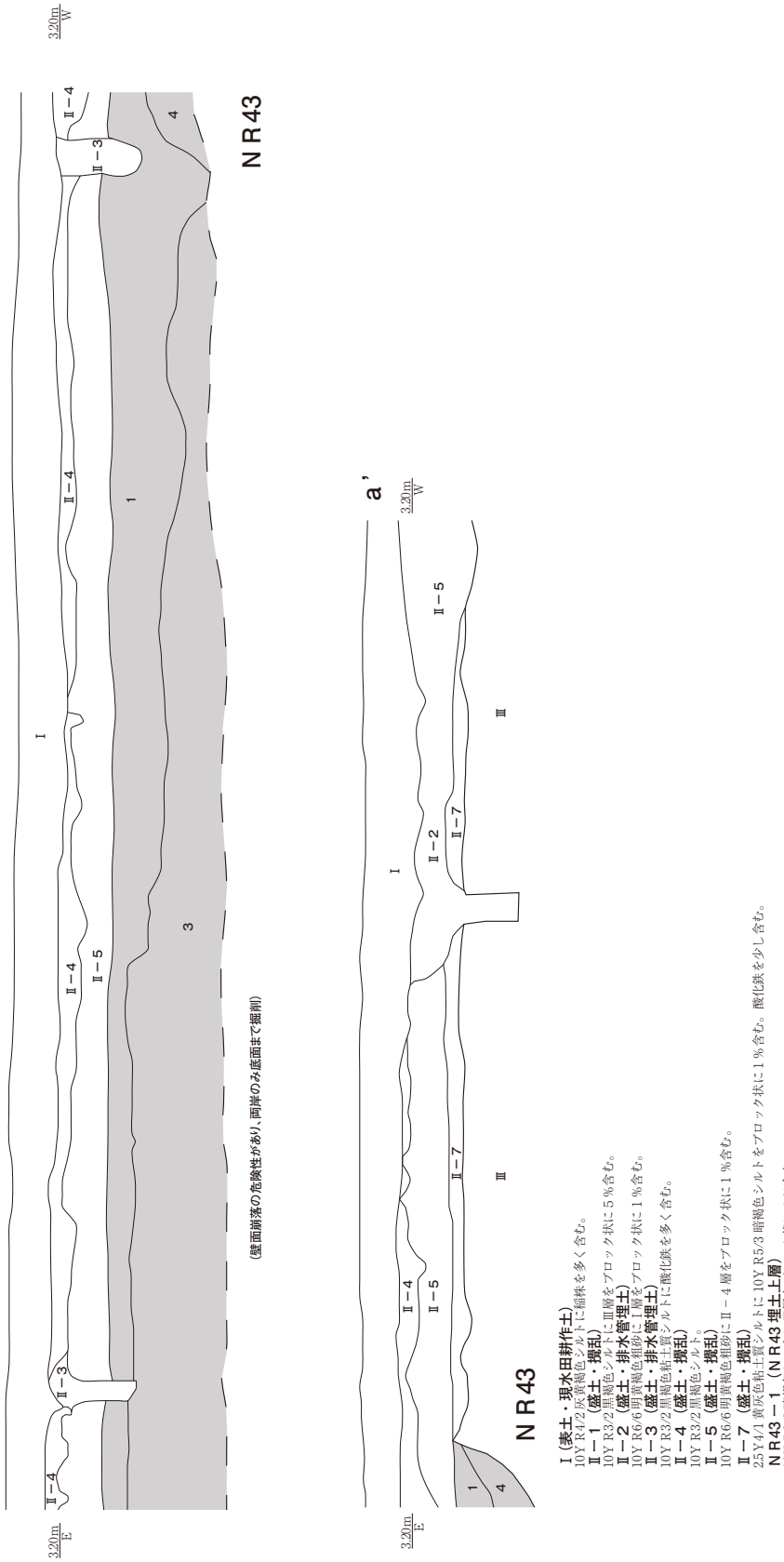
調査区南側を北東－南西方向の溝で、西にあるＳＤ20より軸が東に振れる。幅45cm、深さ35cm。埋土は２層で、上層をＳＤ20に切られる。遺物は出土していないが、ＳＤ21とともにほかの遺構とは離



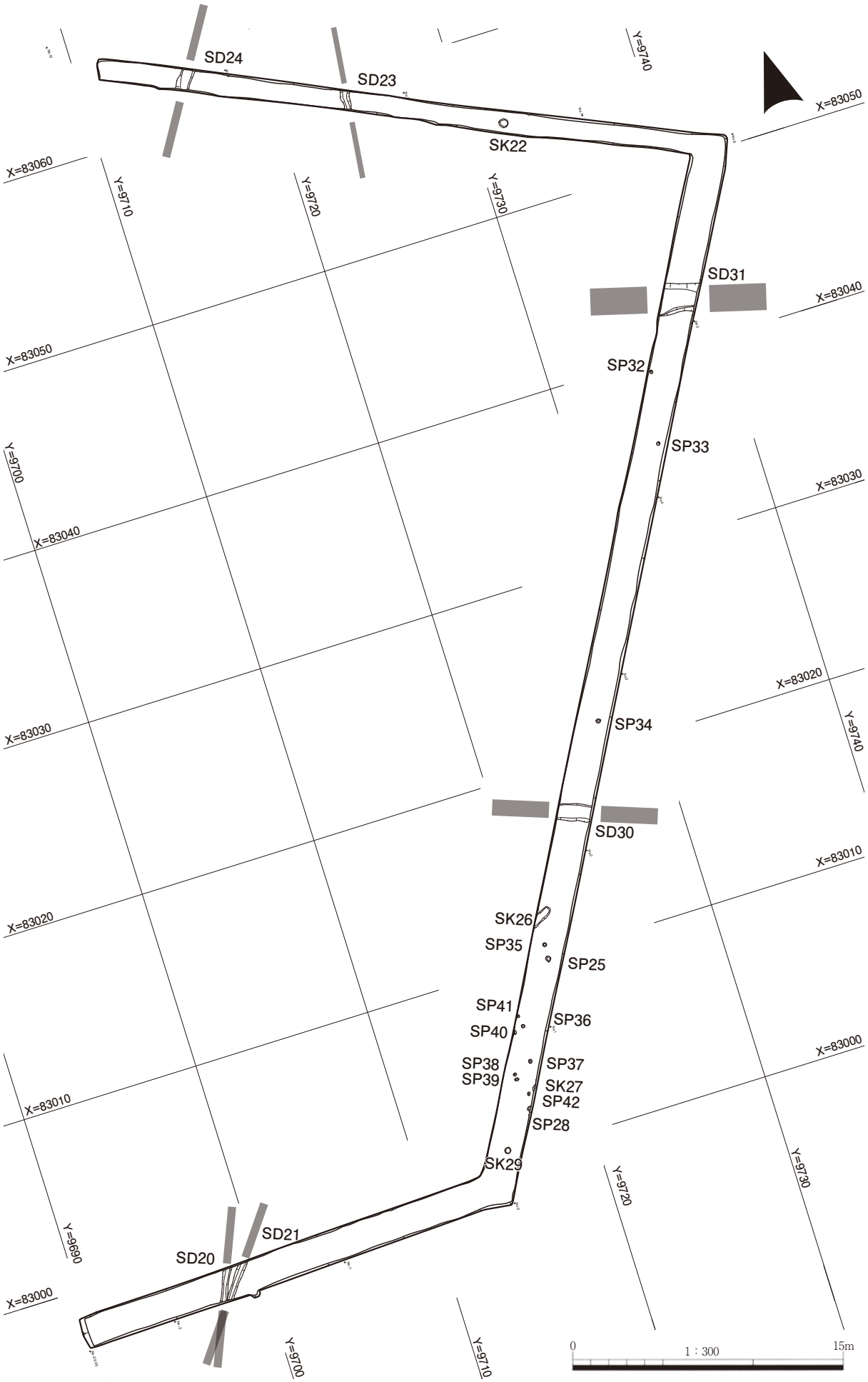
第37図　浜黒崎悪地遺跡Ｂ地区　遺構平面図（１：100）



第38図　浜黒崎悪地遺跡Ｂ地区　基本層序・遺構断面図１（１：40）



第39図　浜黒崎悪地遺跡Ｂ地区　基本層序・遺構断面図２（１：40）



第40図　浜黒崎悪地遺跡C地区　遺構全体図（1：300）

れ、違う埋土でそれよりも新しい時期と考える。調査区の北側でその延長がみられないことから、途中で止まるか、西側へ屈曲する可能性がある。

23号溝（ＳＤ23、第40・41・45図、図版18）

調査区北側で、南北方向の溝。幅54cm、深さ24cmと中規模。埋土は、２層。調査区の南側と東側でその延長がみられないことから、途中で止まるか、西側へ屈曲する可能性がある。遺物は出土していないが、埋土からＳＤ30と同時期と考える。

24号溝（ＳＤ24、第40・41・45図、図版18）

調査区北西側で、北東－南西方向の溝。幅75cm、深さ19cmと中規模。遺物は出土していないが、埋土からＳＤ30と同時期と考える。

30号溝（ＳＤ30、第40・43・45・49図、図版18・20）

調査区中央東側で、北西－南東方向の溝。幅90cm、深さ26cmと大規模で複数の遺物が出土する本調査区では中心的な遺構。断面逆台形。埋土は、２層からなる。遺物は土師器26、須恵器１、中世土師器皿１点が出土。78～80は土師器の甕。81･82は須恵器。81は壺の口縁部か。82は杯蓋で鈕部を欠く。83は中世土師器皿。遺構の時期は、出土遺物から古代から中世か。

31号溝（ＳＤ31、第40・42・45図）

調査区中央北で、北西－南東方向の溝。幅154cm、深さ20cmと大規模。埋土は２層で、中央に逆台形状の埋土が入ることから新旧関係があったのかもしれない。遺物は出土していないが、埋土からＳＤ30と同時期と考える。

Ｂ　土坑（ＳＫ）

22号土坑（ＳＫ22、第40・41・45図、図版18）

調査区北側にある土坑。ほぼ円形。直径54cm、深さ12cm。埋土は、２層。単独で立地し、円形状の土坑であることから農耕関係の穴か。遺物は出土していないが、埋土からＳＤ30と同時期と考える。

26号土坑（ＳＫ26、第40・43・45図、図版18）

調査区中央南側にある土坑。不整形で大半が調査区外。幅48cm、深さ12cmと中規模。埋土は、単層。断面逆台形で溝の可能性もある。遺物は出土していないが、埋土からＳＤ30と同時期と考える。

27号土坑（ＳＫ27、第40・43・45図）

調査区中央南側にある土坑。円形か、大半が調査区外。幅41cm、深さ18cm。埋土は、単層。遺物は出土していないが、埋土からＳＤ30と同時期と考える。ピット群の中にあり、これに伴う遺構か。

29号土坑（ＳＫ29、第40・43・45図、図版18）

調査区中央南側にある土坑。不整円形。直径37cm、深さ11cmと中規模。埋土は、単層。遺物は出土していないが､埋土からＳＤ30と同時期と考える｡ピット群の中にあり､これに伴う遺構なのであろう。

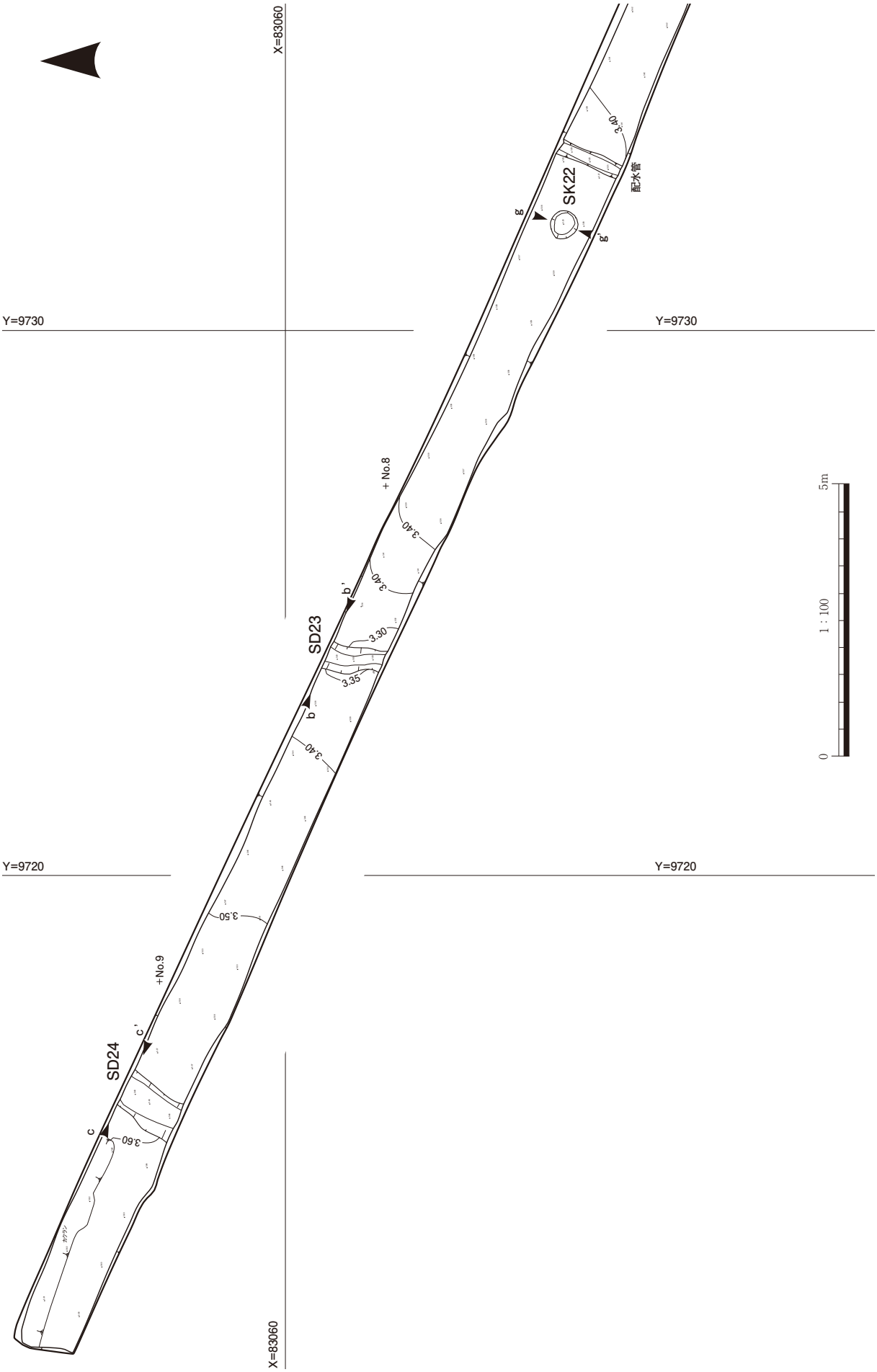
Ｃ　柱穴・ピット

25・28・35～42号ピット（ＳＰ25・28・35～42、第40・43・45図、図版18）

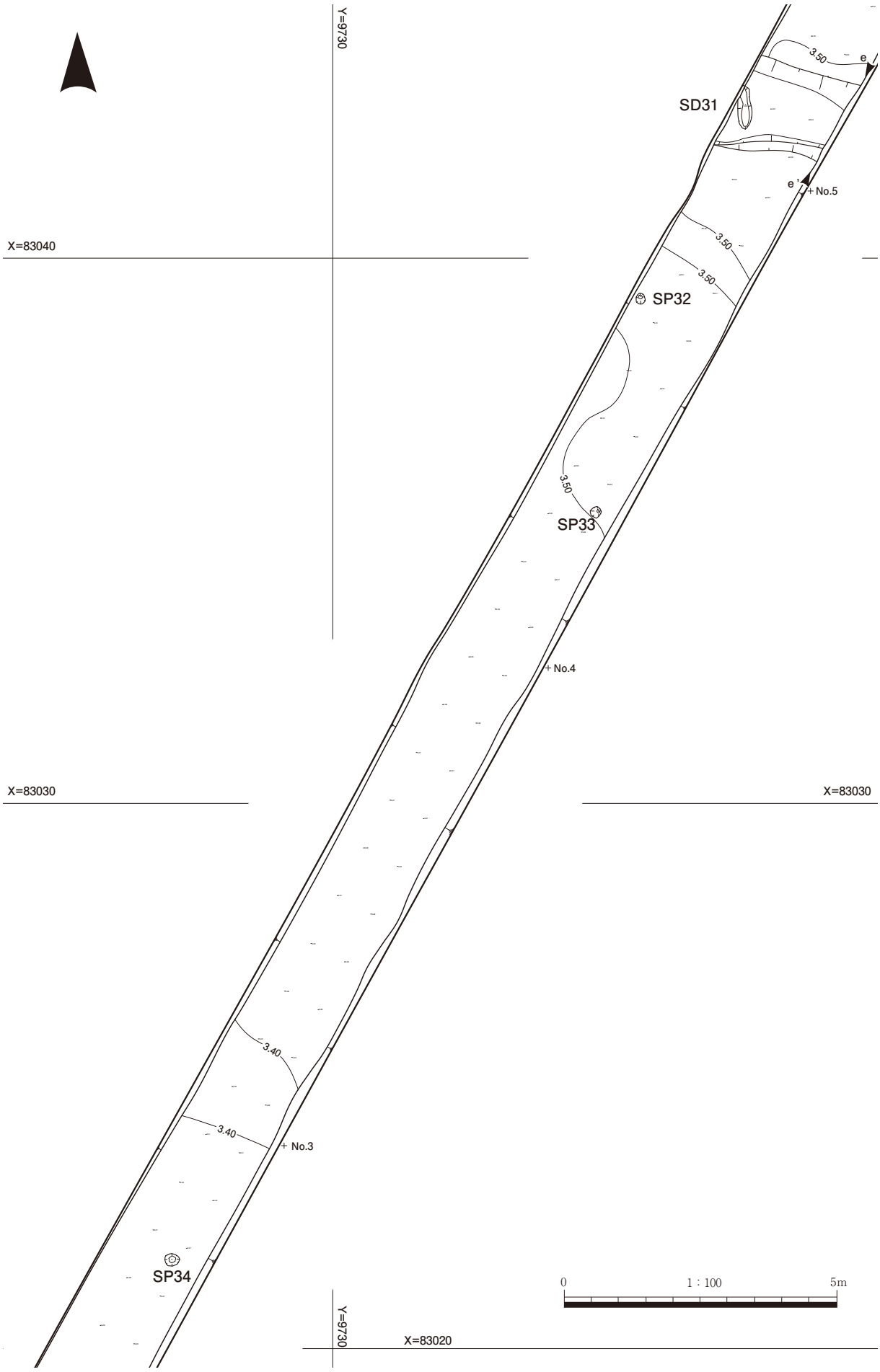
調査区中央南側にあるピット群。ほぼ円形で直径21～33cm、深さ９～33cm。埋土は、いずれも単層。同じようなサイズでまとまっており、柱穴の可能性があるものの、並ばない。遺物は、ＳＰ28から土師器片が出土している。埋土からＳＤ30と同時期と考える。

32・33号ピット（ＳＰ32・33、第40・42図）

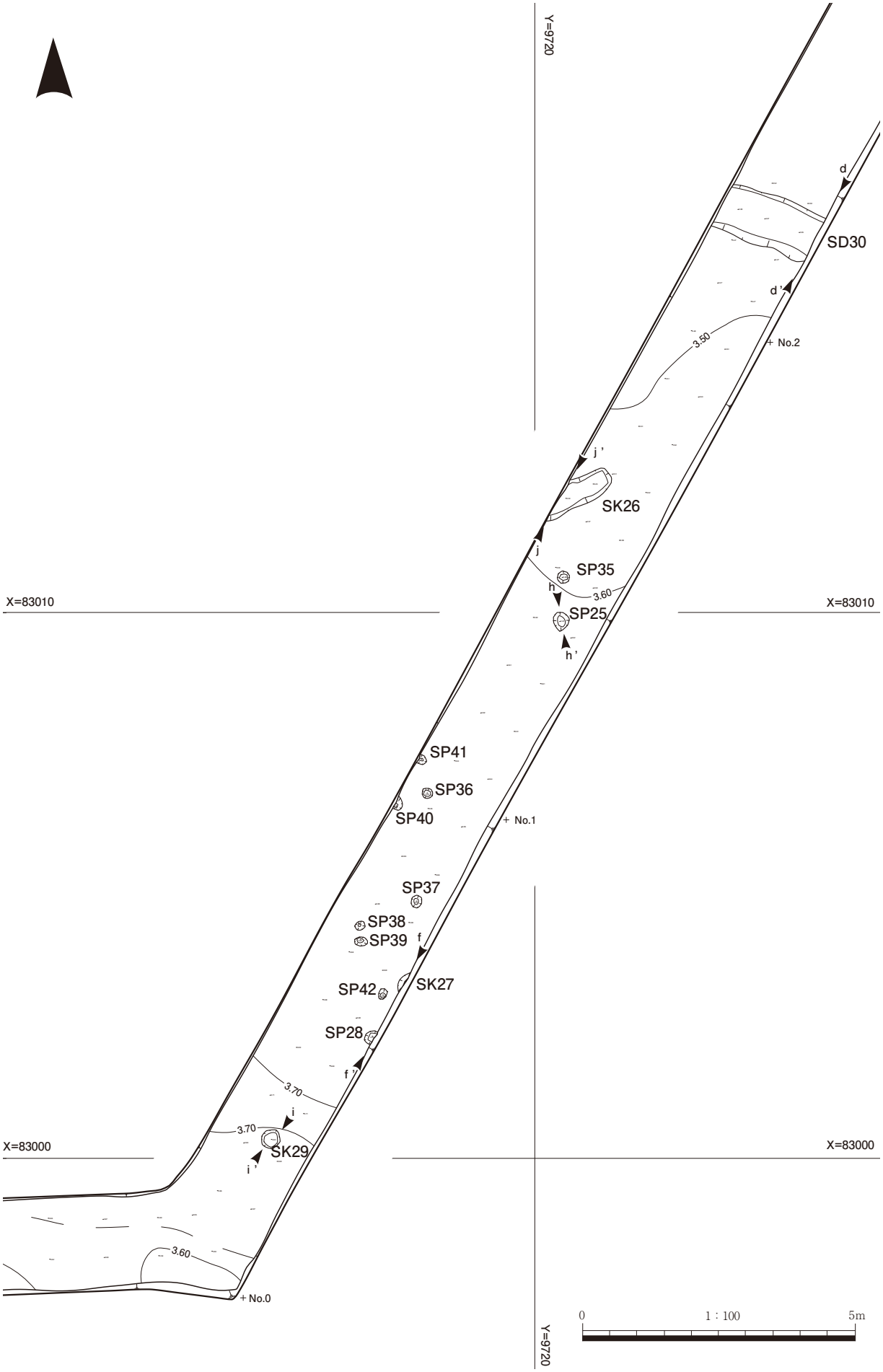
調査区中央北にあるピット。不整円形。直径20～21cm、深さ23～30cm。埋土は、単層。柱穴の可能性があるものの、並ばない。遺物は出土していないが、埋土からＳＤ30と同時期と考える。



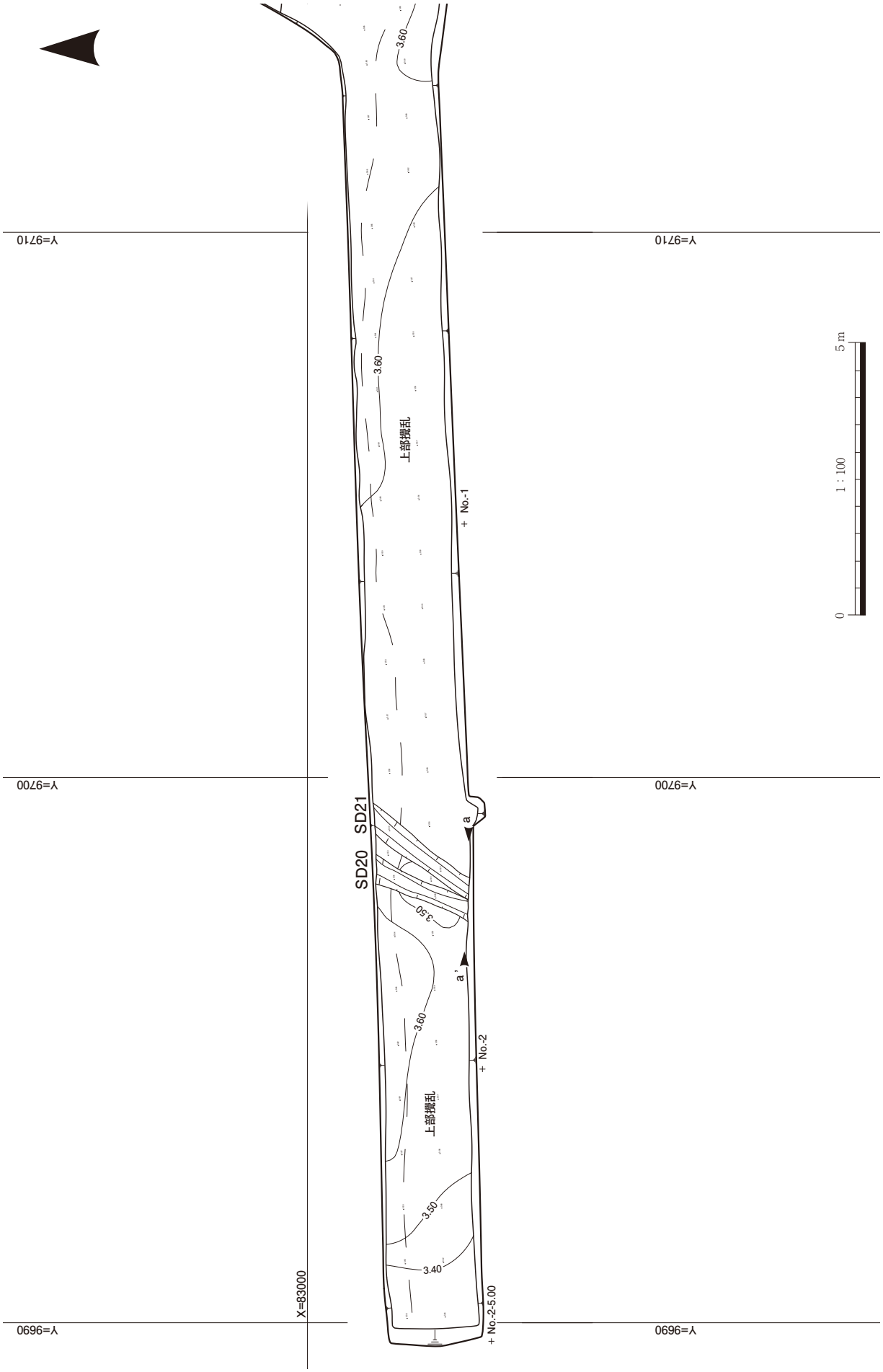
第41図　浜黒崎悪地遺跡C地区　遺構平面図１（１：100）



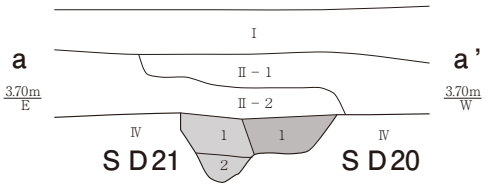
第42図　浜黒崎悪地遺跡Ｃ地区　遺構平面図２（1：100）



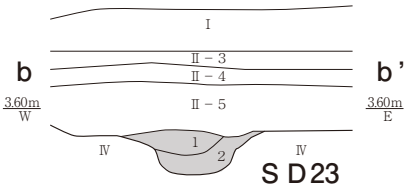
第43図　浜黒崎悪地遺跡C地区　遺構平面図３（1：100）



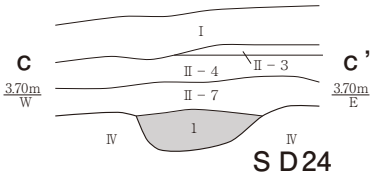
第44図　浜黒崎悪地遺跡Ｃ地区　遺構平面図４（１：100）



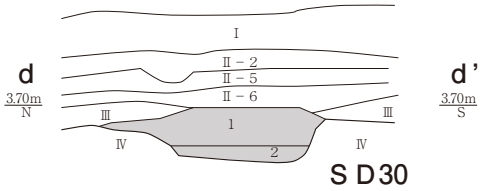
Ⅰ（表土・現水田耕作土）
10YR4/2灰黄褐色シルト。
Ⅱ－1（盛土・撹乱土）
表土に10YR5/2灰黄褐色シルトをブロック状に5％、Ⅳ層をブロック状に2％含む。
Ⅱ－2（盛土・撹乱土）
10YR5/2灰黄褐色シルトにビニールや植物質を含む。
SD20－1（SD20埋土）
10YR3/2黒褐色シルト。
SD21－1（SD21埋土上層）
10YR3/1黒褐色シルト。
SD21－1（SD21埋土下層）
10YR3/2黒褐色シルトにⅣ層をブロック状に2％含む。
Ⅳ（地山・遺構検出面）
10YR5/6黄褐色砂質シルト。



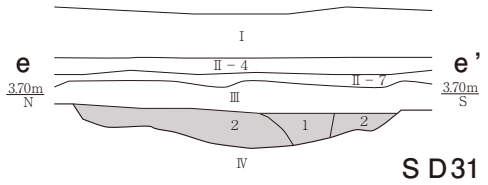
Ⅱ－3（盛土・水田床土）
10YR4/3にぶい黄褐色シルト。
Ⅱ－4（盛土・水田床土）
10YR4/2灰黄褐色シルトに10YR5/3にぶい黄褐色をブロック状に5％含む。
Ⅱ－5（盛土・旧耕作土）
10YR3/3暗褐色シルト。
SD23－1（SD23埋土上層）
10YR2/2黒褐色シルト。
SD23－2（SD23埋土下層）
10YR2/2黒褐色シルトにⅣ層をブロック状に3％含む。



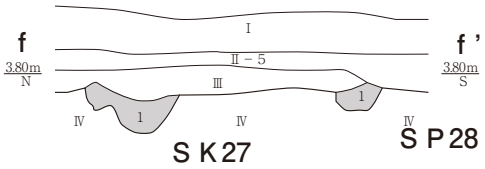
Ⅱ－7（盛土・旧耕作土）
10YR3/3暗褐色シルト。
SD24－1（SD24埋土）
10YR2/2黒褐色シルトに7.5YR4/2灰黄褐色シルトを5％含む。



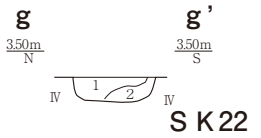
Ⅱ－6（盛土・旧耕作土）
10YR3/2黒褐色シルトに炭化物粒を少し含む。
Ⅲ（遺物包含層）
10YR3/1黒褐色シルトにⅣ層を粒状に2％含む。
SD30－1（SD30埋土上層）
10YR2/2黒褐色シルトに炭化物粒を少し含む。
SD30－2（SD30埋土下層）
10YR2/2黒褐色シルトにⅣ層をブロック状に10％含む。



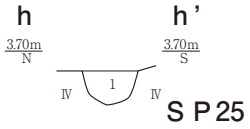
SD31－1（SD31埋土）
10YR2/2黒褐色シルトにⅣ層を粒状にを3％含む。
SD31－2（SD31埋土）
10YR2/2黒褐色シルトにⅣ層をブロック状に20％含む。



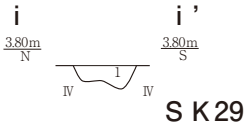
SK27－1（SK27埋土）
10YR2/2黒褐色シルトにⅣ層をブロック状に2％含む。
SP28－1（SP28埋土）
10YR2/2黒褐色シルトにⅣ層をブロック状に3％含む。



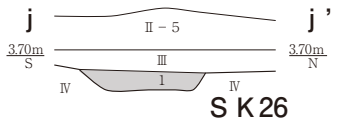
SK22－1（SK22埋土上層）
10YR2/2黒褐色シルトに植物遺体をわずかに含む。
SK22－2（SK22埋土下層）
10YR2/2黒褐色シルトにⅣ層を粒状に2％含む。



SP25－1（SP25埋土）
10YR2/2黒褐色シルトにⅣ層を粒状に2％含む。



SK29－1（SK29埋土）
10YR2/2黒褐色シルトにⅣ層をブロック状に1％含む。



SK26－1（SK26埋土）
10YR2/2黒褐色シルトにⅣ層をブロック状に1％含む。

第45図　浜黒崎悪地遺跡C地区　基本層序・遺構断面図（1：40）

34号ピット（ＳＰ34、第40・42図）

調査区中央にある単独のピット。不整円形。直径28cm、深さ27cm。埋土は、単層。柱穴の可能性があるものの、周囲に柱穴がない。遺物は出土していないが、埋土からＳＤ30と同時期と考える。

（３）遺物（第49図、図版20）

遺構外の遺物は、縄文土器１、弥生土器３、土師器43、須恵器２、越中瀬戸２、肥前系陶磁器２点が出土している。86・87は弥生土器の高杯杯部。南側の攪乱から出土。後期。88～90は土師器の甕。88は内外面ハケメ、89はくの字状口縁部で古墳時代。90は内面にカキメがあり、古代。91・92は須恵器。91は杯蓋で鈕部を欠く。92は杯身。古代。93・94は越中瀬戸の皿底部。93は削り出し高台、94は回転糸切りがみえる。95は伊万里の碗で口縁部内外面染付。

５　Ｄ地区（第46～49図、図版19）

（１）基本層序

基本層序は、Ⅰ層からⅣ層まである（第48図）。Ⅰ層は表土で、灰黄褐色シルト。現在の水田耕作土にあたる。Ⅱ層は盛土で、現水田の床土とみられ２層に分けられる。Ⅱ－１層が灰黄褐色シルト、Ⅱ－２層が灰黄褐色シルトである。Ⅲ層は遺物包含層と考えられ、黒色シルト。Ⅳ層は地山で、遺構検出面にあたり、黄褐色砂質シルト。

（２）遺構（ＳＤ、ＳＫ、ＳＰ）

検出した遺構は溝３、土坑２、柱穴・ピット４である。

Ａ　溝（ＳＤ）

11号溝（ＳＤ11、第46～49図、図版19・20）

調査区中央を北東－南西方向の溝。幅45cm、深さ17cmと浅い。平面形が不整形で、レンズ状の堆積。断面はほぼＶ字状だが底面は一定せず、自然流路の可能性がある。遺物は、縄文土器片１点（96）が出土。96は深鉢の口縁部。横位条痕でくの字状であることから、晩期中葉の中屋式だろう。遺構の時期は、埋土からＣ地区と同じ古代～中世か。

12号溝（ＳＤ12、第46～49図、図版19・20）

調査区北側で、北西－南東方向の溝。断面逆台形。幅30cm、深さ16cm。埋土は、単層。遺物は、弥生土器１、土師器１点が出土。97は弥生土器の高杯脚柱部。タテハケの後タテミガキで。下方を穿孔する。後期。遺構の時期は、埋土からＣ地区と同じ古代～中世か。

19号溝（ＳＤ19、第46～48図、図版19）

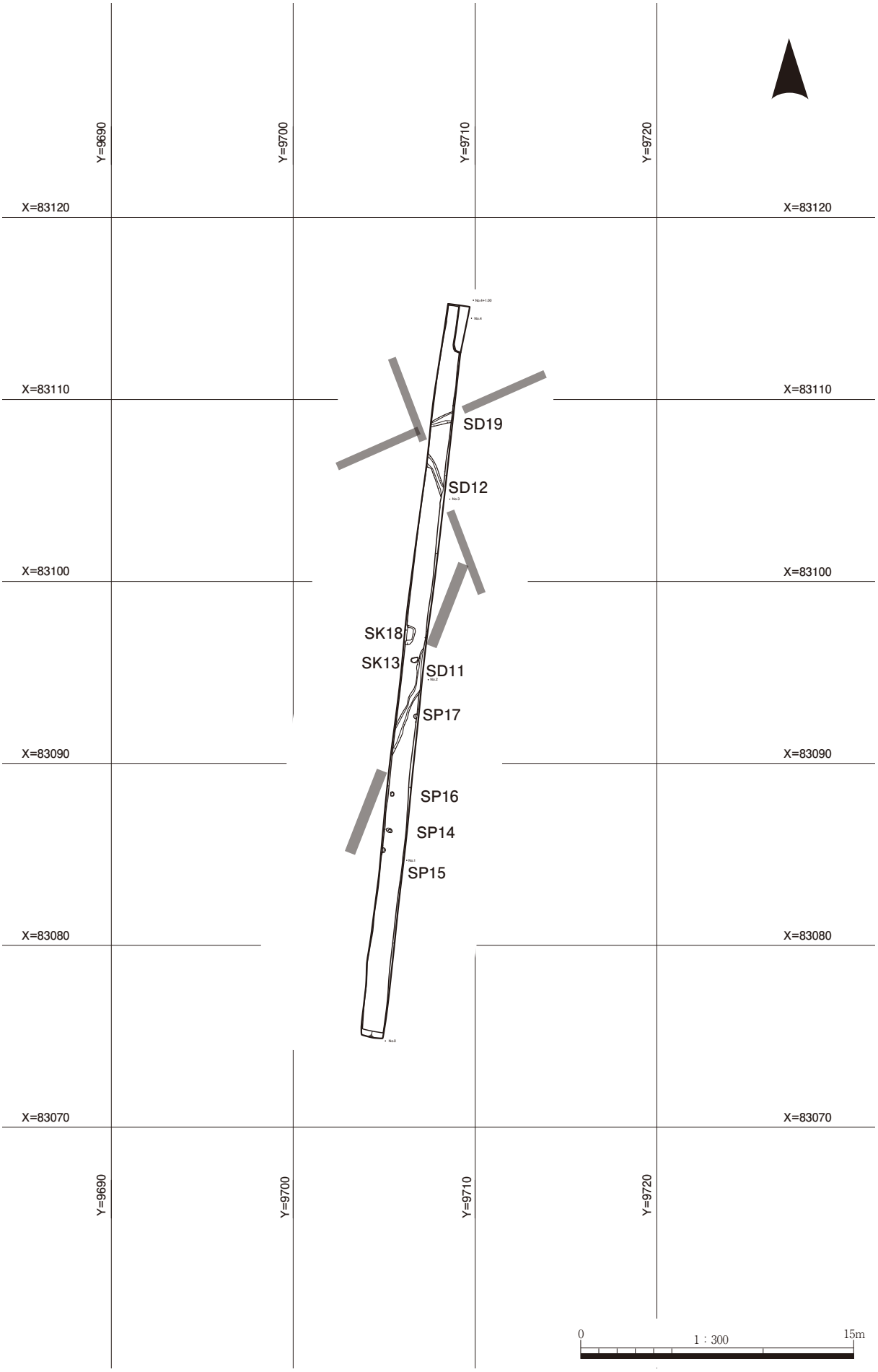
調査区北側で、北東－南西方向の溝。幅55cm、深さ８cmと浅い。埋土は、単層。遺物は出土していない。遺構の時期は、埋土からＣ地区と同じ古代～中世か。

Ｂ　土坑

13号土坑（ＳＫ13、第46～48図、図版19）

調査区の中央にある土坑。不整形。長軸43cm、短軸30cm、深さ８cm。埋土は、単層。遺物は出土していない。遺構の時期は、埋土からＣ地区と同じ古代～中世か。

18号土坑（ＳＫ18、第46～48図、図版19）



第46図　浜黒崎悪地遺跡Ｄ地区　遺構全体図（１：300）

調査区中央にある土坑。約半分が調査区外で、隅円方形か。残存部分で長軸110㎝、短軸45㎝、深さ32㎝と調査区内で最も大規模。埋土は、単層。遺物は出土していない。遺構の時期は、埋土からＣ地区と同じ古代～中世か。

Ｃ　柱穴・ピット

14～16号ピット（ＳＰ14～16、第46～48図、図版19）

調査区南側にあるピット群。不整円形。直径19～34㎝、深さ15～28㎝。埋土は、１～２層。柱穴の可能性があるものの、並ばない。遺物は出土していない。遺構の時期は、Ｃ地区と同じ古代～中世か。

17号ピット（ＳＰ17、第46～48図）

調査区中央にある単独のピット。約半分が調査区外。円形とみられ直径28㎝、深さ31㎝と深い。埋土は、単層。遺物は出土していない。柱穴の可能性があるものの、周囲に柱穴がない。遺構の時期は、埋土からＣ地区と同じ古代～中世か。

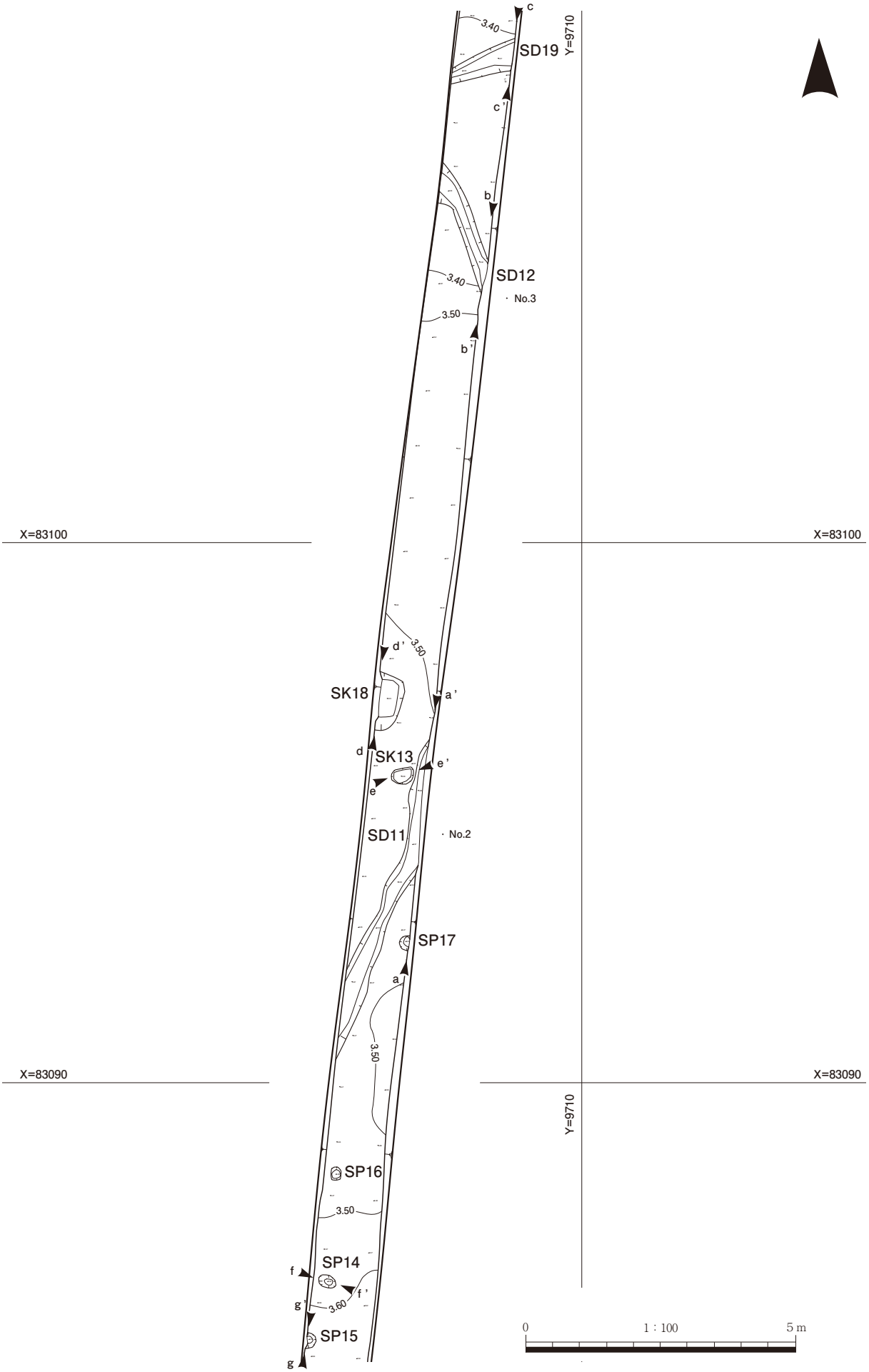
（３）遺物

遺構外の遺物は、土師器片が２点出土しているが、小片のため図示していない。

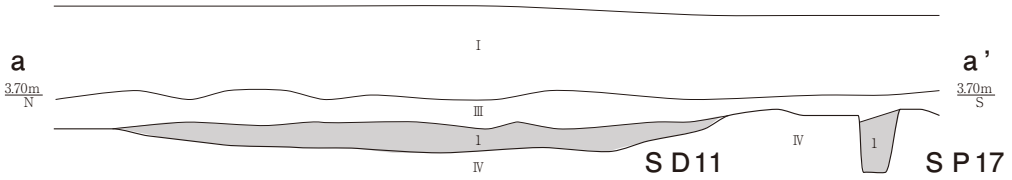
６　小括

Ａ・Ｂ地区とＣ・Ｄ地区とで、大きく様相が異なる。Ａ・Ｂ地区では、自然流路に挟まれた微高地に遺構を形成する。なかでも溝は延長方向がまちまちで、いくつかの時期があるのかもしれない。ＳＤ１から摩滅していない古墳時代の土師器が出土し、それ以降の時期と考えられる。また、富山県埋蔵文化財センターが東に約200ｍ離れた浜黒崎野田・平榎遺跡で行った試掘調査において、南北方向の自然流路を確認している（田中編2022）。これと米軍写真（図版１）や富山市教育委員会が推定している常願寺川の支流（安達他2002）とあわせて考えると、Ａ地区ＮＲ９はこの西岸にあたるのだろう。県センターの調査では、自然流路からは縄文時代から中世の遺物が出土しており、中心的な時期をしぼりこむことはできないが、長期間継続していた可能性が高い。現在の諏訪川はその名残だろうか。Ｂ地区ＮＲ43もそれにつながる支流かもしれない。

Ｃ・Ｄ地区でも溝を主体とするが、自然流路はなく、安定した立地といえる。Ｃ地区では柱穴の可能性があるピットがまとまっているが並ばず、積極的に建物を想定できない。けれども、あいの風とやま鉄道南側では、富山市教育委員会が調査した地点から弥生時代～中世の複数の掘立柱建物がみつかっている（小林･堀沢1994･1995）。このことから、これらの集落の縁辺である可能性が高い。また、浜黒崎町畑遺跡に比べて弥生時代後期の土器が摩滅せずに複数出土している。富山市教育委員会調査地点とあわせて考えると、南方に弥生時代後期の集落の存在を予感させる。　（町田賢一）

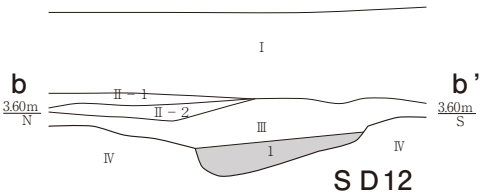


第47図　浜黒崎悪地遺跡Ｄ地区　遺構平面図（1：100）

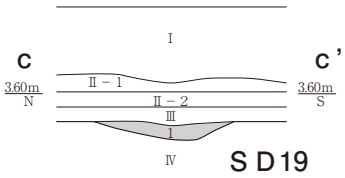


Ⅰ（表土・現水田耕作土）
10Y R4/2 灰黄褐色シルト。
Ⅲ（遺物包含層）
10Y R2/1 黒色シルト。
ＳＤ11 －１（ＳＤ11 埋土）
10Y R2/1 黒色シルトにⅣ層を粒状に２％含む。
Ⅳ（地山・遺構検出面）
10Y R5/6 黄褐色砂質シルト。

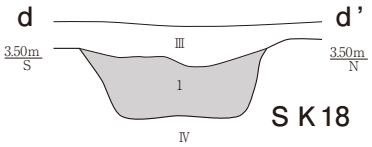
ＳＰ17 －１（ＳＰ17 埋土）
10Y R2/1 黒色シルトにⅣ層をブロック状に５％含む。



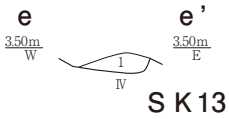
Ⅱ－１（盛土・水田床土）
10Y R5/2 灰黄褐色シルト。
Ⅱ－２（盛土・水田床土）
10Y R4/2 灰黄褐色シルト。
ＳＤ12 －１（ＳＤ12 埋土）
10Y R2/1 黒色シルトにⅣ層を粒状に２％含む。



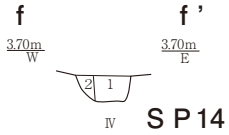
ＳＤ19 －１（ＳＤ12 埋土）
10Y R2/1 黒色シルトにⅣ層をブロック状に１％含む。



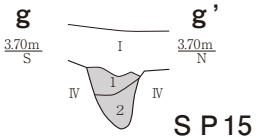
ＳＫ18 －１（ＳＫ18 埋土）
10Y R2/1 黒色シルトにⅣ層をブロック状に 10%含む。



ＳＫ13 －１（ＳＫ13 埋土）
10Y R2/1 黒色シルトにⅣ層をブロック状に１％含む。



ＳＰ14 －１（ＳＰ14 埋土・柱痕跡）
10Y R2/1 黒色シルト。
ＳＰ14 －２（ＳＰ14 埋土）
10Y R2/1 黒色シルトにⅣ層をブロック状に５％含む。

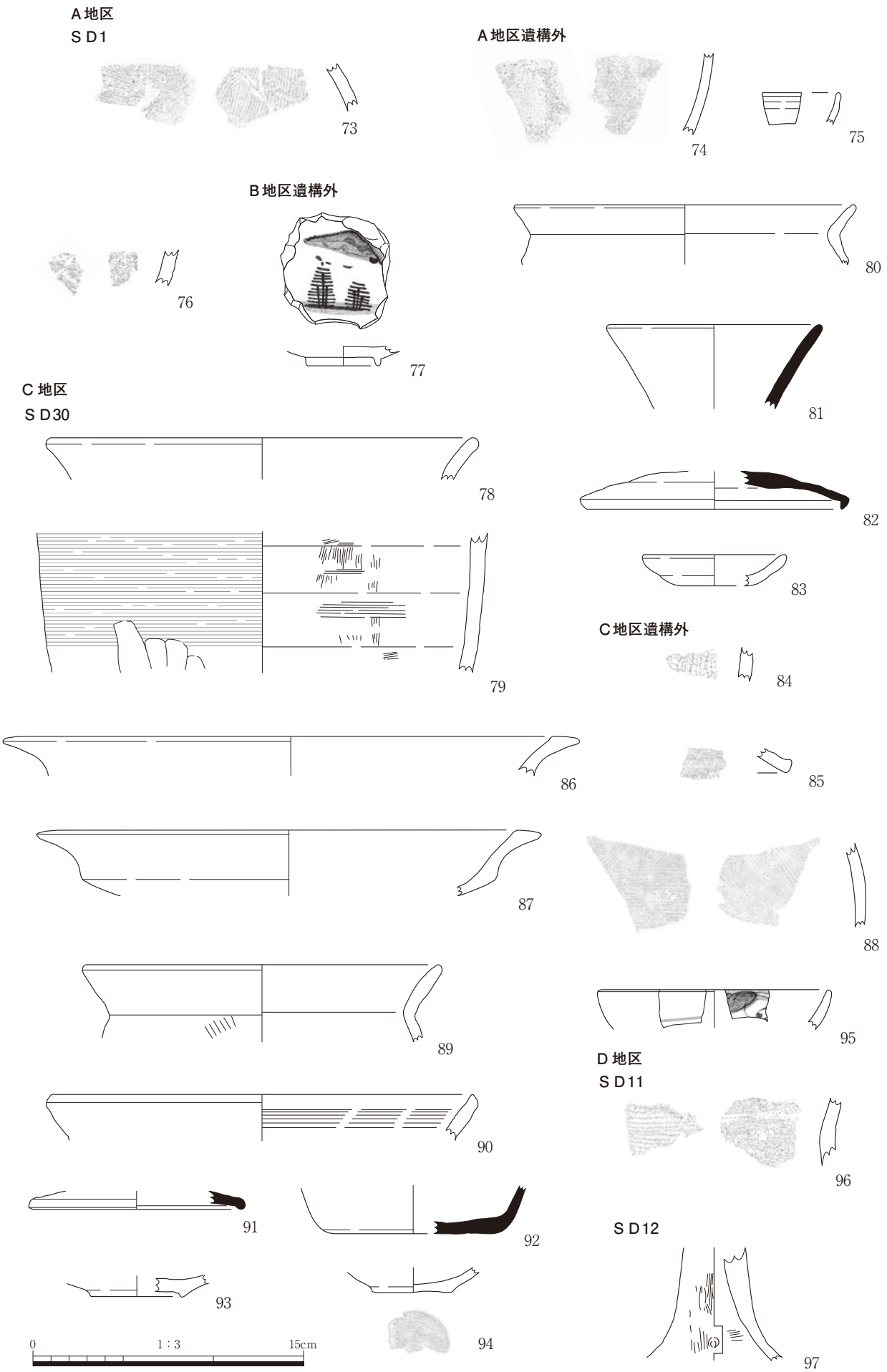


ＳＰ15 －１（ＳＰ15 埋土上層）
10Y R2/1 黒色シルトにⅣ層をブロック状に３％含む。
ＳＰ15 －２（ＳＰ15 埋土下層）
10Y R3/2 黒褐色シルトにⅣ層をブロック状に２％含む。

第48図　浜黒崎悪地遺跡Ｄ地区　基本層序・遺構断面図（１：40）

第13表　浜黒崎悪地遺跡　遺構一覧

地区	遺構番号	種類	規模（cm）			時期	遺物	埋土	備考	挿図	写真
			長さ	幅	深さ						
A	ＳＤ１	溝	(172)	75	13	古墳時代	土師器	１層	浅い。	34～36・49	14、20
	ＳＤ２	暗渠	(164)	41	26	近代～		１層	＞SD ３・４。底面に土管。	35・36	14
	ＳＤ３	溝	(164)	54	27	古墳時代？		１層	＜SD ２。区画溝？	34～36	
	ＳＤ４		(164)	46	20			１層			
	ＳＤ５		(179)	116	31			１層	断面逆台形。境界溝？		14、15
	ＳＰ６	柱穴・ピット	(29)	29	16			１層	断面のみで確認。		15
	ＳＰ７		(35)	35	14			１層			
	ＳＰ８		(40)	40	18			１層			
	ＮＲ９	自然流路・谷	(180)	(5000)	40	古墳時代以降		２層	湿地状堆積。	33～36	
	ＮＲ10		(180)	(1100)	27			２層			
B	ＮＲ43	自然流路・谷	(160)	(1407)	78			４層		33・37～39	16
C	ＳＤ20	溝	(204)	45	22	古代～中世		１層	＞SD21	40・44・45	18
	ＳＤ21		(242)	45	35		土師器	２層	＜SD20		
	ＳＤ23		(117)	54	24			２層		40・41・45	
	ＳＤ24		(127)	75	19			１層			
	ＳＤ30		(200)	90	26		土師器、須恵器、中世土師器	２層	断面逆台形。	40・43・45・49	18、20
	ＳＤ31		(202)	154	20			２層	中央の埋土は新しい溝か。	40・42・45	
	ＳＫ22	土坑	54	50	12			２層	円形土坑。	40・41・45	18
	ＳＫ26		(112)	48	12			１層	溝か？	40・43・45	
	ＳＫ27		(41)	(11)	18			１層	２段掘り？		
	ＳＫ29		37	35	11			１層	底面不整形。		18
	ＳＰ25	柱穴・ピット	33	29	17			１層	ピット群。		
	ＳＰ28		27	(16)	15		土師器	１層			
	ＳＰ32		20	16	23			１層		40・42	
	ＳＰ33		21	21	30			１層			
	ＳＰ34		28	24	27			１層			
	ＳＰ35		24	23	12			１層	ピット群。	40・43・45	
	ＳＰ36		20	19	9			１層			
	ＳＰ37		24	20	14			１層			18
	ＳＰ38		18	16	23			１層			
	ＳＰ39		25	18	28			１層			
	ＳＰ40		(13)	25	10			１層			
	ＳＰ41		(14)	17	14			１層			
	ＳＰ42		21	15	33			１層			
D	ＳＤ11	溝	(442)	45	17		縄文土器	１層	自然流路？	46～49	19、20
	ＳＤ12		(217)	30	16		弥生土器、土師器	１層	浅い。		
	ＳＤ19		(135)	55	8			１層	浅い。	46～48	19
	ＳＫ13	土坑	43	30	8			１層	浅い。	46～48	
	ＳＫ18		110	(45)	32			１層	大型。		
	ＳＰ14	柱穴・ピット	34	23	15			２層	ピット群。		
	ＳＰ15		30	(17)	28			２層			
	ＳＰ16		25	19	18			１層		46・47	
	ＳＰ17		(19)	28	31			１層		46～48	



第49図　浜黒崎悪地遺跡　遺物実測図（１：３）

ＳＤ１（73）　ＳＤ11（96）　ＳＤ12（97）　ＳＤ30（78～83）遺構外（74～77、84～95）

第14表　浜黒崎悪地遺跡　遺物一覧

挿図	遺物番号	写真	地区	出土地点			種類	器種		法量（cm）				重さ（g）	時期		調整		色調		胎土
				グリッド	遺構	層位				口径	器高	底径	厚さ				外面	内面	外面	内面	
49	73	20	A		ＳＤ１		土師器	甕	胴部	-	-	-	0.6	16.24	古墳		ナナメハケ→ススー→剥離	タテハケ	2.5Y7/2灰黄色		砂粒
	74			№２付近	遺構外	地山直上	土師器	壺？		-	-	-	0.5	12.82	古代		ススー	ヨコナデ	10YR2/1黒色	2.5Y7/3浅黄色	砂粒
	75			№１～２			白磁	碗	口縁部	-	-	-	0.4	2.51	中世		白磁釉（変色）		5Y7/2灰白色		
	76			№１付近			越中瀬戸	擂鉢？	胴部	-	-	-	0.7	4.12	近世		錆釉→摩滅		10YR8/4浅黄橙色		白色粒
	77		B				伊万里？	皿	底部	-	-	3.8	0.7	38.91				染付（山水文？）→透明釉	N8/1灰白色	2.5PB5/4くすんだ青色	
	78		C		ＳＤ30		土師器	甕		24.0	-	-	0.7	14.73	古代	８～９Ｃ	ヨコナデ		10YR8/4浅黄橙色		砂粒
	79								胴部	-	-	-	0.8	66.90			カキメ→ケズリ	カキメ	10YR8/3浅黄橙色	10YR8/2灰白色	砂粒
	80								口縁部	19.0	-	-	0.7	8.34		８～９Ｃ	摩耗		10YR8/3浅黄橙色		赤色粒、砂粒
	81						須恵器	長頸壺		12.0	-	-	0.5	17.07			ヨコナデ→自然釉		5Y7/1灰白色		白色粒
	82							杯蓋		15.0	-	-	0.5	55.16		８Ｃ	ナデ		2.5Y6/1黄灰色		白色粒
	83						中世土師器	皿	口～底部	8.0	1.7	3.4	0.5	3.42	中世		摩耗	摩耗	10YR8/2灰白色		赤色粒
	84			№４～５	遺構外	包含層	縄文土器	深鉢	胴部	-	-	-	0.7	3.63	縄文		縦位縄文	ナデ	10YR3/2黒褐色	10YR8/3浅黄橙色	白色粒
	85			№２～３			弥生土器？	高杯？	脚裾部？	-	-	-	0.7	4.24	弥生？	後期？	ヨコナデ		10YR8/3浅黄橙色		砂粒
	86			№２～３		攪乱	弥生土器	高杯	杯部	32.0	-	-	0.6	16.72	弥生	後期	ミガキ→ナデ→黒斑	ミガキ→ナデ	10YR4/1褐灰色	10YR8/1灰白色	砂粒
	87			№２～３						28.0	-	-	0.6	42.24			摩耗		2.5Y8/2灰白色		赤色粒、砂粒
	88			№２～３			土師器	甕	胴部	-	-	-	0.7	19.15	古墳	前期	ヨコ・ナナメハケ	ナナメハケ	5YR7/6橙色		砂粒
	89			№１～２		包含層			口縁部	20.0	-	-	0.7	18.81			ナナメハケ→摩耗	摩耗	10YR8/3浅黄橙色		赤色粒、砂粒
	90			№２～３						24.0	-	-	0.8	17.05	古代		ヨコナデ	カキメ	7.5YR7/4にぶい橙色		赤色粒、砂粒
	91			№２～３			須恵器	杯蓋		12.0	-	-	0.5	2.22		８～９Ｃ	ナデ		5Y6/1灰色		白色粒
	92			№３～４				杯身	底部	-	-	9.0	0.4	29.83			ナデ、底面回転ヘラケズリ	ナデ	5Y6/1灰色		白色粒、黒色粒
	93			№７～８			越中瀬戸	皿		-	-	5.0	0.6	13.25	近世	17Ｃ？	ナデ、赤褐色化	ナデ	2.5Y8/3淡黄色		白色粒、長石
	94					表土		素焼皿		-	-	4.4	0.4	11.14		17～18Ｃ	ナデ、底部回転糸切	ナデ	5YR6/6橙色		白色粒
	95						伊万里	皿	口～胴部	12.5	-	-	0.5	4.74		18Ｃ	染付（唐草文？）→透明釉	染付（草花文）→透明釉	N8/0灰白色		
	96		D		ＳＤ11		縄文土器	深鉢	口縁部	-	-	-	0.8	14.64	縄文晩期	中屋式	横位条痕文	ヨコナデ	7.5YR7/3にぶい橙色		赤色粒、長石
	97				ＳＤ12		弥生土器	高杯	脚部	-	-	-	0.9	21.88	弥生	後期	穿孔→タテハケ→タテミガキ	穿孔→ヨコハケ→ナデ	7.5YR7/4にぶい橙色		赤色粒多

7　浜黒崎悪地遺跡Ｂ地区の自然科学分析

はじめに

浜黒崎悪地遺跡Ｂ地区で、自然流路が確認された。遺物が出土しなかったため、分析により年代の推定と古環境の復原を試みる。

（1）分析試料

分析試料は、Ｂ地区ＮＲ43の１層、２層、３層より採取された試料３点で、花粉分析を実施し、１層、３層では放射線炭素年代測定（AMS法）も行う。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

（2）放射性炭素年代測定（AMS法）

A　化学処理工程

a　木質片の化学処理

①　メス・ピンセットを使い、付着物を取り除く。

②　酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により、不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、１M未満の場合は「AaA」と第15表に記載する。

③　試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

④　真空ラインで二酸化炭素を精製する。

⑤　精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

⑥　グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

b　土壌の化学処理

①　試料を超純水の中に入れ、超音波で分散させた後、ふるいにかけて根等の混入物を除去する。ふるいを通過した土を乾燥させ、この後の処理に用いる。

②　酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用い、第15表に「HCl」と記載する。

以下、ａ③以降と同じ。

B　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

C　算出方法

①　δ^{13}Cは、試料炭素の^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第15表）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

②　^{14}C年代（Libby Age：yrBP、第15表）は、過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568

年）を使用し、δ^{13}Cによって同位体効果を補正する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代と誤差は、下１桁を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C年代の誤差（±１σ）は、試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

③　pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正されている（第15表）。

④　暦年較正年代（または単に較正年代）とは、年代が既知の試料の^{14}C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（１σ＝68.3％）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C補正を行い、下１桁を丸めない^{14}C年代値である（第16表の「暦年較正用（yrBP）」）。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal20較正曲線（Reimer et al. 2020）を用い、OxCalv4.4較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正の結果を第16表（１σ・２σ暦年代範囲）に示す。暦年較正年代は、^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。今後、較正曲線やプログラムが更新された場合、「暦年較正用（yrBP）」の年代値を用いて較正し直すことが可能である。

D　測定結果

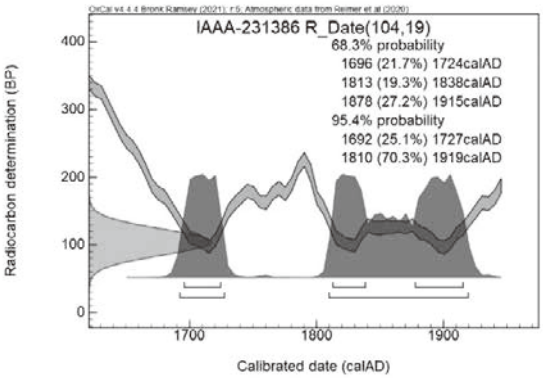
第15表　浜黒崎悪地遺跡Ｂ地区　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C、^{14}C年代（Libby Age）、pMC）

測定番号	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C補正あり	
					Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-231386	浜黒崎悪地遺跡Ｂ地区 ＮＲ43　１層	木質片	AAA	-29.91±0.2	100±20	98.71±0.24
IAAA-231387	浜黒崎悪地遺跡Ｂ地区 ＮＲ43　３層	土壌	HCl	-19.39±0.24	1,970±20	78.25±0.2

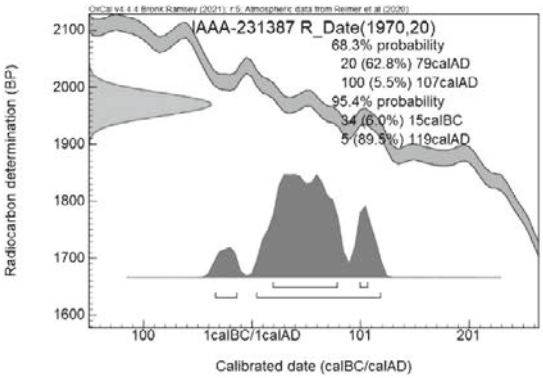
第16表　浜黒崎悪地遺跡Ｂ地区　放射性炭素年代測定結果（暦年較正用^{14}C年代、較正年代）

測定番号	試料名	暦年較正用（yrBP）	較正条件	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
IAAA-231386	浜黒崎悪地遺跡Ｂ地区 ＮＲ43　１層	104±19	OxCal v4.4 IntCal20	1696calAD - 1724calAD（21.7%）* 1813calAD - 1838calAD（19.3%）* 1878calAD - 1915calAD（27.2%）*	1692calAD - 1727calAD（25.1%）* 1810calAD - 1919calAD（70.3%）*
IAAA-231387	浜黒崎悪地遺跡Ｂ地区 ＮＲ43　３層	1,970±20	OxCal v4.4 IntCal20	20calAD - 79calAD（62.8%） 100calAD - 107calAD（5.5%）	34calBC - 15calBC（6.0%） 5calAD - 119calAD（89.5%）

回収された二酸化炭素重量（％）は、１層の試料の木片で68％、３層の土壌で0.28％であった。木片では、普通、有機質含有量が50％以上になることが多い。一方、土壌では、成り立ちによるが、岩石や鉱物で主に構成されていれば、３層のように非常に低くなり、泥炭や分解が進んだ有機質の堆積物などは、植物そのものに近い値から数％程度までの値を示すことが多い。３層は極めて低く、あまり有機物を含まない。有機物が多く含まれれば、その有機物が生きていた時代に近い年代値を示すと考えられ、多少年代の異なるものが混入しても、年代値への影響は限定的であるとみなされる。しかし、有機物含有量が低い場合、そこに含まれる炭素の由来が不明確になり、年代値に大きな影響を及ぼすことがある。３層については、年代が古く出ている可能性も考えられ、結果には注意が必要である。なお、埋土であることから、埋土が堆積物として形成された時期の年代を示し、遺構の年代と異なることも考えられる。



浜黒崎悪地遺跡Ｂ地区 ＮＲ43 １層



浜黒崎悪地遺跡Ｂ地区 ＮＲ43 ３層

第50図　浜黒崎悪地遺跡Ｂ地区　暦年較正年代グラフ

（３）花粉分析

Ａ　分析の特色

花粉分析は、第四紀学で多く扱われ、生層序によるゾーン解析で地層を区分し、ゾーン比較によって植生や環境の変化を復原する方法である。そのため普通は湖沼などの堆積物が対象となり、堆積盆単位など比較的広域な植生・環境の復原を行う方法として用いられる。遺跡調査においては、遺構内の堆積物など局地的でかつ時間軸の短い堆積物も対象となり、より現地性の高い植生・環境・農耕の復原もデータ比較の中で行える場合もある。さらに遺物包含層など、乾燥的な環境下の堆積物も対象となり、その分解性も環境の指標となる。また、風媒花や虫媒花などの散布能力などの差で、狭い範囲の植生に由来する結果が得られるなど、陸域の堆積物が分析に適さないわけではない。

Ｂ　方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

①　試料から１㎤を採量

②　0.5％リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え、15分間湯煎

③　水洗処理の後、0.25㎜の篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去

④　25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

⑤　水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す

⑥　再び氷酢酸を加えて水洗処理

⑦　沈渣にチール石炭酸フクシン染色液を加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作製

⑧　検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡（Nikon ECLIPSE *Ci*）によって300～1000倍で行った。花粉の分類は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。同定分類には所有の現生花粉標本、島倉（1973）、中村（1980）を参照して行った。イネ属については、チール石炭酸フクシンで染色を施すことにより特徴がより鮮明になるため、中村（1974，1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定している。なお、花粉分類では樹木花粉（AP）および非樹木花粉（NAP）となるが非樹木花粉（NAP）は草本花粉として示した。

C　結果

a　分類群

出現した分類群は、樹木花粉25、樹木花粉と草本花粉を含むもの３、草本花粉18、シダ植物胞子２形態の計48分類群である。これらの学名と和名および粒数を第17表に示し、花粉数が50個以上計数できた試料については、周辺の植生を復原するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第51図に示し、主要な分類群は顕微鏡写真に示した（第52図）。同時に、寄生虫卵についても検鏡した結果、１分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、ブナ属、イヌブナ、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、ウルシ属、ニシキギ科、カエデ属、トチノキ、ブドウ属、モクセイ科

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、マメ科、ニワトコ属－ガマズミ属

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属、カヤツリグサ科、ホシクサ属、ミズアオイ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、アリノトウグサ属－フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

〔寄生虫卵〕

回虫卵

以下にこれの特徴を示す。

・回虫　*Ascaris　lumbricoides*

回虫卵は、比較的大きな虫卵で、およそ80×60㎛あり楕円形で外側に蛋白膜を有し、胆汁色素で黄褐色ないし褐色を呈する。糞便とともに外界に出た受精卵は、18日で感染幼虫包蔵卵になり経口摂取により感染する。回虫は、世界に広く分布し、現在でも温暖・湿潤な熱帯地方の農村地帯に多くみられる。

b　花粉群集の特徴

ＮＲ43の１層、２層、３層において、下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。下位の３層では、樹木花粉が37％、草本花粉が57％、樹木・草本花粉が４％、シダ植物胞子が２％を占める。樹木花粉では、クリ、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、モクセイ科の出現率が高い。草本花粉では、イネ科、イネ属の出現率が高く、アリノトウグサ属－フサモ属が特徴的に出現し、ヨモギ属が伴われる。また、試料の中に肉眼的に色調が赤茶色に見える部分が認められたため同様に処理を施し確認したところ、わずかにイネ属が検出されただけで、シダ植物胞子なども見られなかった。

２層では、樹木花粉が26％、草本花粉が64％、樹木・草本花粉はほとんど出現せず、シダ植物胞子が10％を占める。樹木花粉では、ハンノキ属の出現率がやや高く、マツ属複維管束亜属、スギが増加傾向を示し、クリ、コナラ属コナラ亜属は減少する。草本花粉では、イネ属を伴うイネ科の出現率が高く、カヤツリグサ科、ヨモギ属が伴われる。他にアブラナ科、アリノトウグサ属－フサモ属、タンポポ亜科が比較的多く、ソバ属が出現する。

１層では、樹木花粉が49％、草本花粉が46％、樹木・草本花粉が２％、シダ植物胞子が３％を占める。樹木花粉では、ハンノキ属、スギ、マツ属複維管束亜属、クリ、コナラ属コナラ亜属の出現率が比較的高い。草本花粉では、イネ属を伴うイネ科の出現率が高く、カヤツリグサ科、アブラナ科、ヨモギ属が伴われ、回虫卵がわずかに検出される。

D　花粉分析から推定される植生と環境

ＮＲ43の１層、２層、３層において、花粉分析を行った結果、下位の３層の時期に比較的多いクリ、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属はいずれも落葉広葉樹で、クリ、コナラ属コナラ亜属は比較的乾燥したところを好み、周辺に生育していたと考えられる。ハンノキ属は、湿地林を形成するなど湿潤な環境を好むことから、乾燥した部分と湿潤な部分が混在していたとみなされる。周囲には、イネ科、ヨモギ属などの草本に加えアリノトウグサ属－フサモ属が生育していたと考えられる。イネ科は、湿潤から乾燥まで多様な環境に生育し、ヨモギ属は乾燥した環境を好み、アリノトウグサ属－フサモ属は、形態からアリノトウグサ属の可能性が高いが、水分消費量が少なく、比較的乾燥した環境から湿原にも生育し、いずれも陽当たりのよい環境を好む。これらのことから、堆積地は陽当たりのよい比較的乾燥した環境であったと考えられる。イネ属が出現することから周辺に水田の分布が示唆される。

２層の時期には、ハンノキの湿地林の継続と、マツ属複維管束亜属、スギが増加傾向を示し、アカマツ二次林と造林のスギ林が拡大する。イネ属を伴うイネ科の出現率が高く、栽培植物を多く含むアブラナ科およびソバ属が出現し、周辺に水田とナタネなどのアブラナ科、ソバの畑が分布する。

１層の時期は、マツ属複維管束亜属とスギの樹木が増加し、アカマツ二次林と造林のスギ林がより拡大し、森林が回復する。

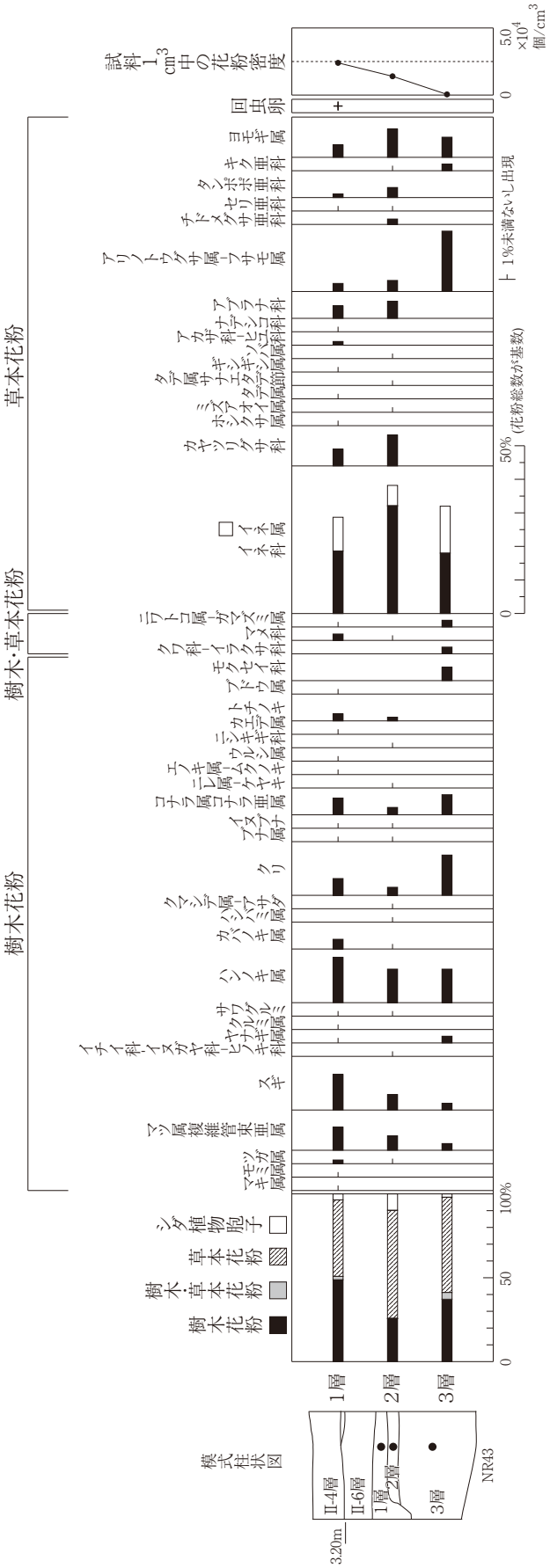
他は下位の２層から環境はほとんど変化せず、周辺の環境は継続する。わずかに回虫卵が検出され、その密度は生活汚染程度で、近接して生活域が分布していたと考えられる。

まとめ

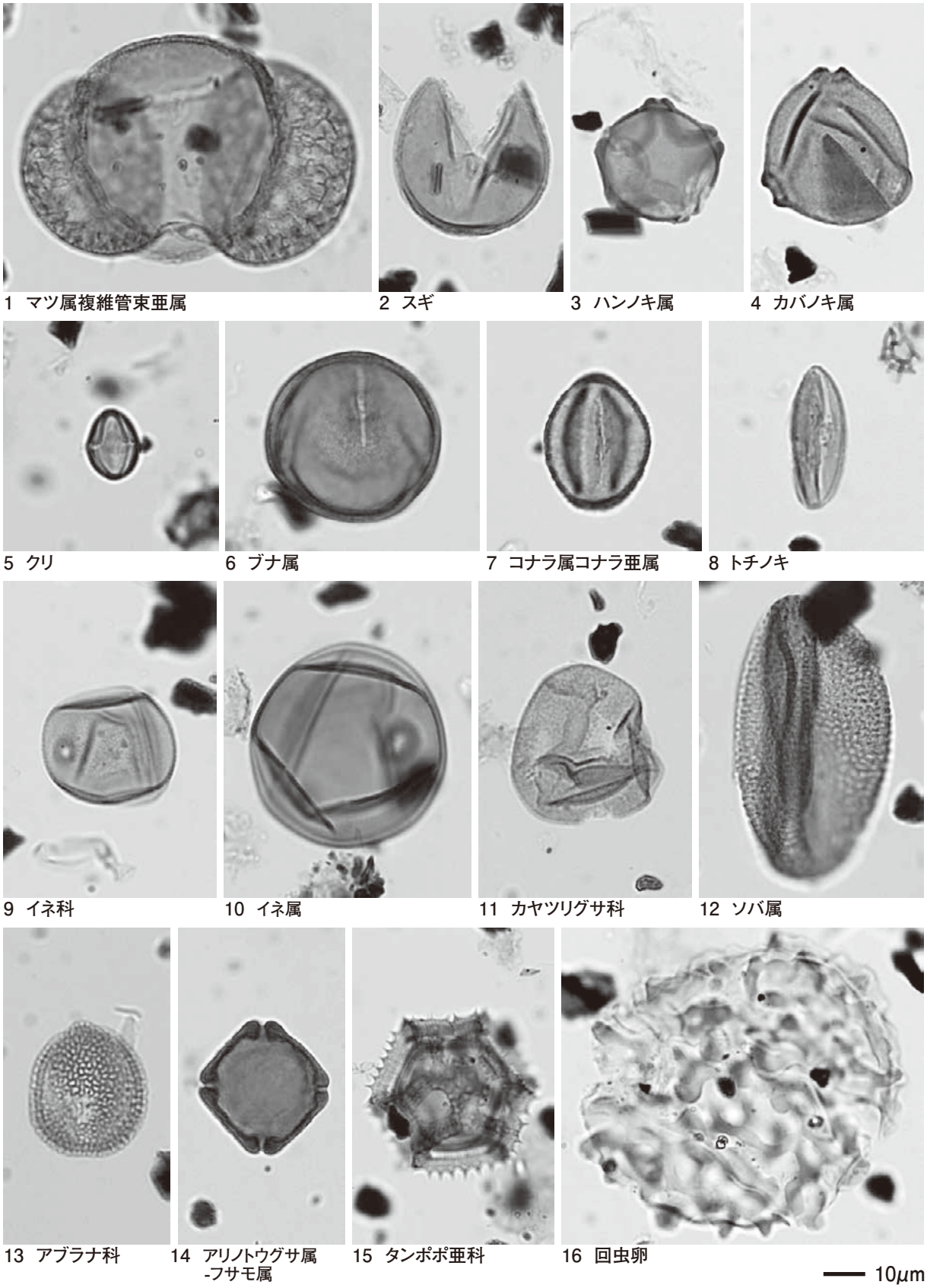
Ｂ地区ＮＲ43は、放射線炭素年代測定で、１層では、1878calAD-1915calAD（27.2％、１σ）、３層で20calAD-79calAD（62.8％、１σ）の結果が得られた。３層の値は、極めて古く、堆積物が形成された本来の値が示されたとみられる。花粉分析の結果、周辺に下位より乾燥を好む二次林のクリ、コナラ属コナラ亜属と湿地林を形成するハンノキ属が生育し、乾燥した部分と湿潤な部分が混在して

第17表　浜黒崎悪地遺跡Ｂ地区　花粉分析結果

Taxa（分類群）		浜黒崎悪地遺跡Ｂ地区　ＮＲ43			
Scientific name（学名）	Japanese name（和名）	1層	2層	3層	3層(赤茶色)
Arboreal pollen	樹木花粉				
Podocarpus	マキ属	1			
Abies	モミ属	1			
Tsuga	ツガ属	4	1		
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	26	16	1	
Cryptomeria japonica	スギ	40	17	1	
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		1		
Salix	ヤナギ属	1		1	
Juglans	クルミ属	1			
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ	1	1		
Alnus	ハンノキ属	51	37	5	
Betula	カバノキ属	11	1		
Corylus	ハシバミ属		1		
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ		1		
Castanea crenata	クリ	19	9	6	
Fagus	ブナ属	3	3		
Fagus japonica	イヌブナ	1	2		
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	19	8	3	
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ		2		
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ	1			
Rhus	ウルシ属	1			
Celastraceae	ニシキギ科		1		
Acer	カエデ属	1			
Aesculus turbinata	トチノキ	8	4		
Vitis	ブドウ属	1			
Oleaceae	モクセイ科			2	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉				
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科			1	
Leguminosae	マメ科	7	1		
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属-ガマズミ属	1		1	
Nonarboreal pollen	草本花粉				
Gramineae	イネ科	70	119	9	
Oryza	イネ属	38	23	7	1
Cyperaceae	カヤツリグサ科	19	34		
Eriocaulon	ホシクサ属	1			
Monochoria	ミズアオイ属		1		
Polygonum	タデ属	1			
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節		1		
Rumex	ギシギシ属	1			
Fagopyrum	ソバ属		1		
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	4			
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1			
Cruciferae	アブラナ科	14	19		
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属-フサモ属	9	12	9	
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科		6		
Apioideae	セリ亜科	2	2		
Lactucoideae	タンポポ亜科	4	11		
Asteroideae	キク亜科		3	1	
Artemisia	ヨモギ属	14	31	3	
Arboreal pollen	樹木花粉	191	105	19	0
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	8	1	2	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	178	263	29	1
Total pollen	花粉総数	377	369	50	1
Pollen frequencies of 1cm³	試料1cm³中の花粉密度	2.4 $\times 10^4$	1.4 $\times 10^4$	3.8 $\times 10^2$	0.1 $\times 10^2$
Unknown pollen	未同定花粉	8	9	4	0
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolate type spore	単条溝胞子	9	31	1	
Trilate type spore	三条溝胞子	5	9		
Total Fern spore	シダ植物胞子総数	14	40	1	0
Parasite eggs	寄生虫卵				
Ascaris (lumbricoides)	回虫卵	1			
Total	計	1	0	0	0
Parasite eggs frequencies of 1cm³	試料1cm³中の寄生虫卵密度	1.1 $\times 10$	- -	- -	- -
Stone cell	石細胞	(-)	(-)	(-)	(-)
Digestion rimains	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal・woods fragments	微細炭化物・微細木片	(+)	(+)	(+)	(<+)
微細植物遺体（Charcoal・woods fragments）	($\times 10^5$)				
未分解遺体片		0.6	0.5		
分解質遺体片		14.3	26.6	1.5	0.4
炭化遺体片（微粒炭）					



第51図　浜黒崎悪地遺跡Ｂ地区　花粉ダイアグラム



※検出箇所　浜黒崎悪地遺跡B地区　NR43 1層:2,4,16
NR43　2層:1,3,5-15

第52図　浜黒崎悪地遺跡Ｂ地区　花粉写真

いた。上位に向かいアカマツ二次林と造林のスギ林が拡大する。堆積地はイネ科、ヨモギ属、アリノトウグサ属－フサモ属が繁茂する陽当たりのよい比較的乾燥した環境であった。イネ属が出現し、近隣に水田が分布し、２層、１層ではアブラナ科の栽培植物、ソバの畑も分布する。上位の１層では回虫卵がわずかに検出され、生活汚染を受けたと考えられた。

（一般社団法人文化財科学研究センター　金原正子）

参考文献

金子清俊・谷口博一1987「線形動物・扁形動物」『医動物学 付 実験用動物学 新版臨床検査講座』８　医歯薬出版　p.9-134.
金原正明･金原正子1992「花粉分析および寄生虫」『藤原京跡の便所遺構－藤原京７条１坊－』奈良国立文化財研究所　p.14-15.
金原正明1999「寄生虫」『考古学と動物学』同成社　p.151-158.
金原正明・金原正子2015「堆積物と植物遺体の総合的研究」『日本文化財科学会　第32回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会　p.146-147.
島倉巳三郎1973「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録』第５集　大阪市立自然史博物館　60p.
中村純1967『花粉分析』古今書院　232p.
中村純1974「イネ科花粉について､とくにイネ（Oryza sativa）を中心として」『第四紀研究』13　日本第四紀学会　p.187-193.
中村純1977「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』no.10　日本文化財科学会　p.21-30.
中村純1980「日本産花粉の標徴」『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録』第13集　大阪市立自然史博物館91p.

第Ⅴ章　総　括

調査の成果をまとめてみると、浜黒崎町畑遺跡では、南方のＡ地区と北方のＢ・Ｃ地区とで立地や様相が異なる。Ａ地区では中世とみられる溝と土坑を検出したものの、建物などの居住域を示す遺構はなく、遺跡の縁辺部とみられる。また、今回の調査では唯一の地震痕跡である噴砂を確認した。

Ｂ・Ｃ地区では狭小な調査区のため規模は不明だが、中世前半とみられる掘立柱建物やその軸に沿う２条の併走する溝など集落域を明らかにすることができた。遺跡の中心部とみられる。

浜黒崎悪地遺跡では、東方のＡ・Ｂ地区と西方のＣ・Ｄ地区とで立地と様相が異なる。Ａ・Ｂ地区では、常願寺川の支流とみられる自然流路に挟まれた部分に遺構を検出した。しかし、遺構は溝などわずかで、遺物もごく少数であることから遺跡の縁辺部とみられる。古墳時代以降と考える。

Ｃ・Ｄ地区では建物は検出できなかったが、古代～中世とみられる溝や柱穴、土坑など集落域の一部を検出した。これらは南側で富山市教育委員会が調査した集落域（小林・堀沢1994・1995）の北端にあたるのだろう。

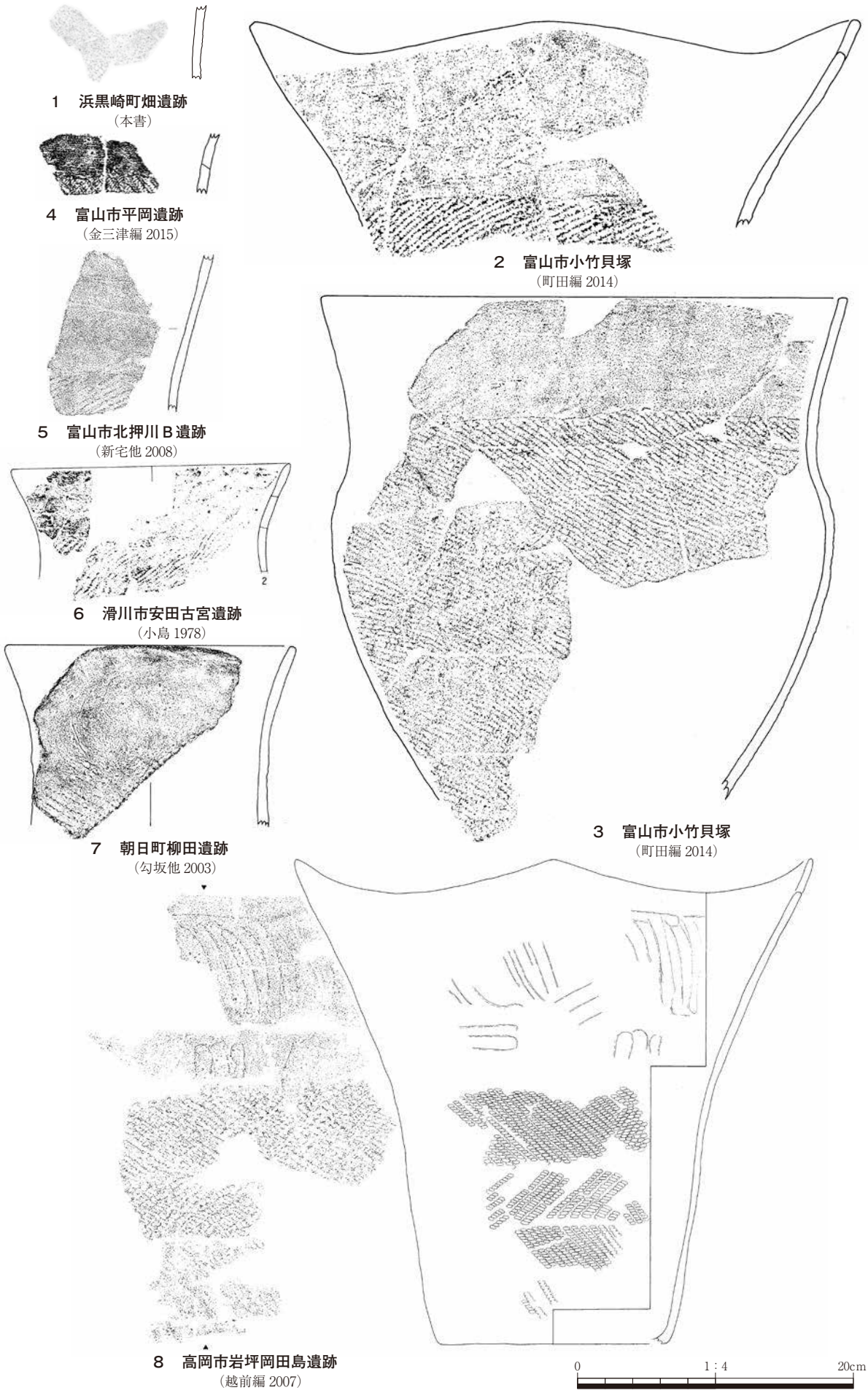
さいごに、今回の調査で特徴的な遺構・遺物についてとりあげ、考察してみる。

（１）　浜黒崎町畑遺跡Ｃ地区出土蜆ヶ森Ⅱ式土器（第53図）

浜黒崎町畑遺跡と浜黒崎悪地遺跡では、少数ながら縄文土器片が出土した。これらの多くは小破片のため時期比定は難しいが、近隣の遺跡と同様に後晩期主体とみられる。ところが、今回の調査で最も海岸に近い浜黒崎町畑遺跡Ｃ地区において断割を行ったところ、地山（砂層）内から前期後半の蜆ヶ森Ⅱ式土器（１）がみつかった。土器（１）は、口縁部から胴部の破片とみられ、外面上半をナナメ・ヨコナデ調整、下半に斜行縄文を施す。小島俊彰の言う蜆ヶ森Ⅱ式の「無文調整」（小島2008）に相当し、蜆ヶ森Ⅱ式でも新しい段階と考える（町田2022）。

これと類似した土器は県内では、富山市小竹貝塚（２・３）、平岡遺跡（４）、北押川Ｂ遺跡（５）、滑川市安田古宮遺跡（６）、朝日町柳田遺跡（７）、高岡市岩坪岡田島遺跡（８）などでみつかっている。これらの遺跡は、現汀線から４㎞以上離れている。一方、浜黒崎町畑遺跡Ｃ地区は、現汀線から約200ｍと至近の距離にある。土器の時期はいわゆる“縄文海進”期にあたり、海域が最も広がった時期といわれ、藤井昭二によって海域の推定図（藤井1992）が示されている。こういった状況下で、海岸線近くにおける縄文時代前期の土器発見はきわめて不思議な現象だ。しかも、土器片は摩滅しておらず、砂丘とみられる地山内からみつかっていて、二次堆積とは考えにくい。

近年、卜部厚志らによって県内の潟湖成立についての論考が発表された（卜部他2017）。これによれば、現在の射水平野にあたる旧放生津潟や足洗潟で行ったボーリング調査と、その年代測定の結果から潟湖の形成は約7200～6900年前になるという。黒部市生地の調査でも、約6000年前だという。つまり富山県内では、海進期にあたる縄文時代前期の段階で、河川などの影響により砂丘・砂洲が形成され、海域から潟湖となっていたというのである。海岸に近い浜黒崎町畑遺跡Ｃ地区での蜆ヶ森Ⅱ式土器の発見は、これを支持する結果なのではないだろうか。これまで海岸線近くの遺跡では、富山市岩瀬天神遺跡のように後晩期の土器が多く出土することは知られていた。さらに、その時期が海退期にあたるとして通説となっていた。それを考え直すことになったといえよう。また、約1.3㎞東方にある水橋荒町・辻ヶ堂遺跡では、2023（令和５）年の調査で複数の串田新式土器（中期後葉）が発



第53図　富山県内出土の主な蜆ヶ森Ⅱ式（新段階）土器（１：４）

見された（青山2024）。この土器も摩滅はない。確実に中期までさかのぼる資料である。このように海岸線近くでも縄文時代前半期に生活があったことが証明されつつある。富山平野での潟湖の形成は、従来の想定よりも早そうである。浜黒崎町畑遺跡Ｃ地区出土蜆ヶ森Ⅱ式土器は、１片にすぎないが、今後“縄文海進”を考えていくうえでも貴重な資料といえるだろう。

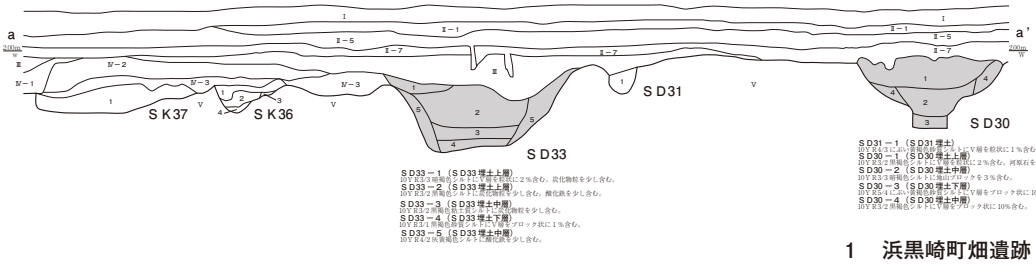
（２） 併走する断面逆台形の溝（第54図）

浜黒崎町畑遺跡Ｂ・Ｃ地区では、断面逆台形を呈する２条の併走する溝がみつかった。浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区のＳＤ30・33（１）とＣ地区のＳＤ45・46（２）である。いずれも溝の中心間距離は、約５ｍである。調査区は狭小で全容を明らかにすることは難しいが、図上でみるとＢ地区の溝延長とＣ地区の溝延長とは直角に交わる。このことから、なんらかの区画に用いられた溝であることが想定される。一方でそれが１条ではなく、２条平行してあることから、別の要素も考えられるかもしれない。このことから、県内の中世集落遺跡で２条の併走する断面逆台形の溝をいくつか示してみた。

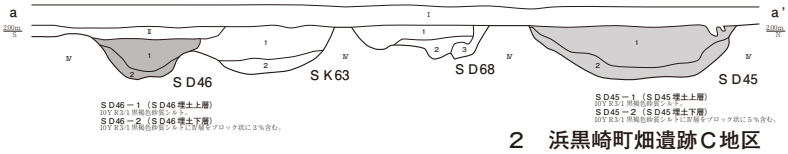
３から６は道路の側溝と考えられているもので、溝の中心間距離は約２～2.6mである。３は高岡市岩坪岡田島遺跡Ｃ４地区のＳＤ401・402である。ＳＤ402は浅く、ＳＤ401は深い。これらは掘立柱建物群の間をまっすぐに伸びていて、溝の間には波板状凹凸面とみられる小溝や礫を敷いた部分もあり、集落の中心的な道路ＳＦ１の側溝と考えている（越前編2007）。４は黒部市北堀切（きたほりきり）遺跡Ⅵ－１区のＳＤ100・101である。溝間に波板状凹凸面などはない。報告書では、道路の側溝である可能性にとどめている（八尾他2007）。５は氷見市加納谷内（かのうやち）遺跡Ｃ２地区のＳＤ61C2･62C2である。報告書では、丘陵裾と斜面の建物群をつなぐ道路側溝と考えている（新宅編2014）。溝間に波板状凹凸面などはない。６は富山市打出（うちいで）遺跡Ｃ地区のＳＤ21・22である。溝間に波板状凹凸面があり、路面の盛土もはっきりし、ＳＦ１の側溝としている（新宅他2004）。

７～10は区画溝・堀と考えられているもので、溝の中心間距離は約４～７ｍである。７は富山市任海宮田（とうみみやた）遺跡Ｃ７地区のＳＤ003・004である。ＳＤ004の方が若干深い。２条が並行してコの字状に巡る区画溝と考えられ、区画内には墓坑と考えられる土坑群がある（青山編2008）。８は射水市安吉（やすよし）遺跡Ａ地区のＳＤ203・204である。これも二重のコの字状区画溝で、区画内部に屋敷地が想定されている（金三津2012）。９は南砺市梅原胡摩堂（うめはらごまどう）遺跡Ａ２地区のＳＤ2201・2203である。これからは別々の屋敷地の区画溝である（宮田他1994）。10は富山市水橋池田舘遺跡のＳＤ１・２である。調査区内では２条が並行してＬ字状となっているが、確認調査区の検出状況を加味すると方形区画になり、建物はみつかっていないが、二重の堀をもつ方形居館と考えられている（金三津2020）。

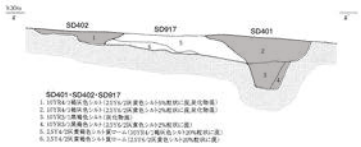
以上の類例から考えてみると、浜黒崎町畑遺跡の溝は断面形状のいずれにも該当するが、溝の中心間距離は前者の道路側溝としたものよりも広く、後者の区画溝としているものに近い。また、波板状凹凸面や硬化面もない。これからみると、Ｂ地区ＳＤ30とＣ地区ＳＤ45、Ｂ地区ＳＤ33とＣ地区ＳＤ46はＬ字状の同一区画溝とも考えられる。もっと言えば、二重の堀をもつ方形居館の一部の可能性もある。ただし、その想定接続距離は、80mと離れている。それほどの距離をもって堀を巡らす方形居館とするには、仮に上部に削平を受けていたとしても、溝の規模が小さい感がある。埋土の珪藻分析からは、水路である可能性も低い。また、区画内にある建物が、Ｃ地区のＳＢ４しか想定できないことも積極的に支持できない点がある。さらにその区画外に溝の軸に沿う掘立柱建物ＳＢ１・３があることから、方形居館の一部というよりは、集落の区画溝の可能性が高いのであろう。現時点ではそう考えたい。ただし、Ｂ地区のＳＤ33より西側では断面で整地層が推定されており、もしかしたら調査



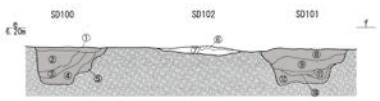
1　浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区
12Ｃ（本書）



2　浜黒崎町畑遺跡Ｃ地区
12Ｃ（本書）

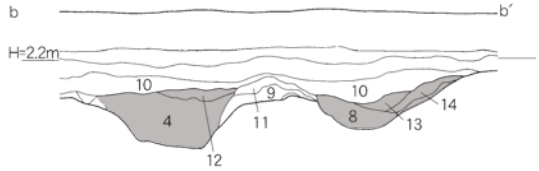


3　高岡市岩坪岡田島遺跡Ｃ４地区
12 ～ 13Ｃ（越前編 2007）

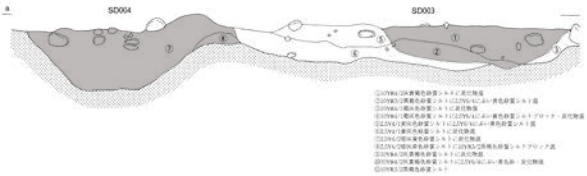


4　黒部市北堀切遺跡Ⅵ－１区
13 ～ 16Ｃ（八尾ほか 2007）

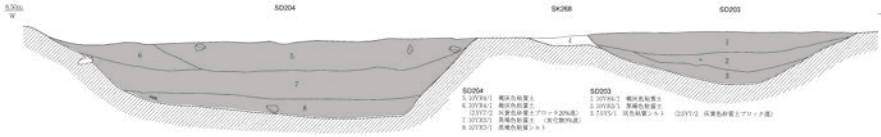
5　氷見市加納谷内遺跡Ｃ２地区
13 ～ 14Ｃ（新宅編 2014）



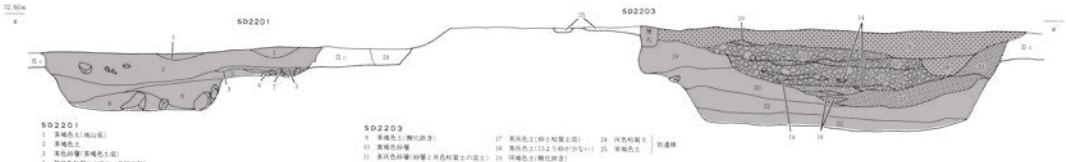
6　富山市打出遺跡Ｃ地区
14 ～ 15Ｃ　（新宅ほか 2004）



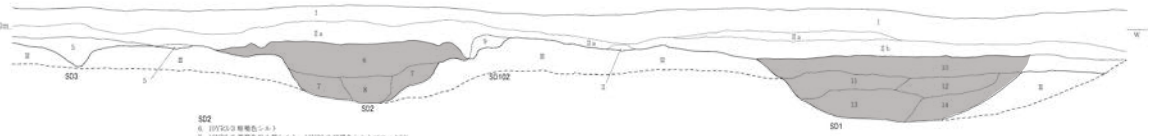
7　富山市任海宮田遺跡Ｃ７地区
15Ｃ　（青山編 2008）



8　射水市安吉遺跡Ａ地区
14 ～ 16Ｃ　（金三津 2012）



9　南砺市梅原胡摩堂遺跡Ａ２地区
12 ～ 15Ｃ　（宮田ほか 2012）



10　富山市水橋池田舘遺跡
16 ～ 17Ｃ　（金三津 2020）

0　1：80　4 m

第54図　富山県内の主な併走する断面逆台形の中世溝（１：80）

区外の西側に別の建物群が想定できるのかもしれない。今後の周辺調査に期待したい。

（３） 浜黒崎町畑遺跡Ａ地区の噴砂（第55図、第18表）

浜黒崎町畑遺跡Ａ地区では、噴砂が１か所みつかった。噴砂の幅は約８㎝、長さは2.5ｍを測るが、調査区の外にのびていて、実際はもっと長い。方向は、北東－南西方向で常願寺川に沿うような形になっている。噴砂は、他の遺構（中世～近世）と同様に地山（Ⅳ層）で検出し、上部を盛土に切られている。噴砂の供給先である砂層（Ｖ層）は、断割で確認したところ地山（Ⅳ層）の下にあり、検出面までで73㎝を測る。富山県内では、近世以降で噴砂を発するような大地震は、安政５（1858）年の飛越地震（震度６か）しかなく、これによって生じた噴砂と考えられる。なお、県内では報告書等で確認した限りで、各所に噴砂を検出した遺跡（第55図・第18表）がある。これらの多くは、沖積地に分布している。浜黒崎町畑遺跡の近くでは、富山市打出遺跡（寒川2006）や四方背戸（よかたせとわり）割遺跡（酒井他2006）でも安政飛越地震とみられる噴砂を確認している。

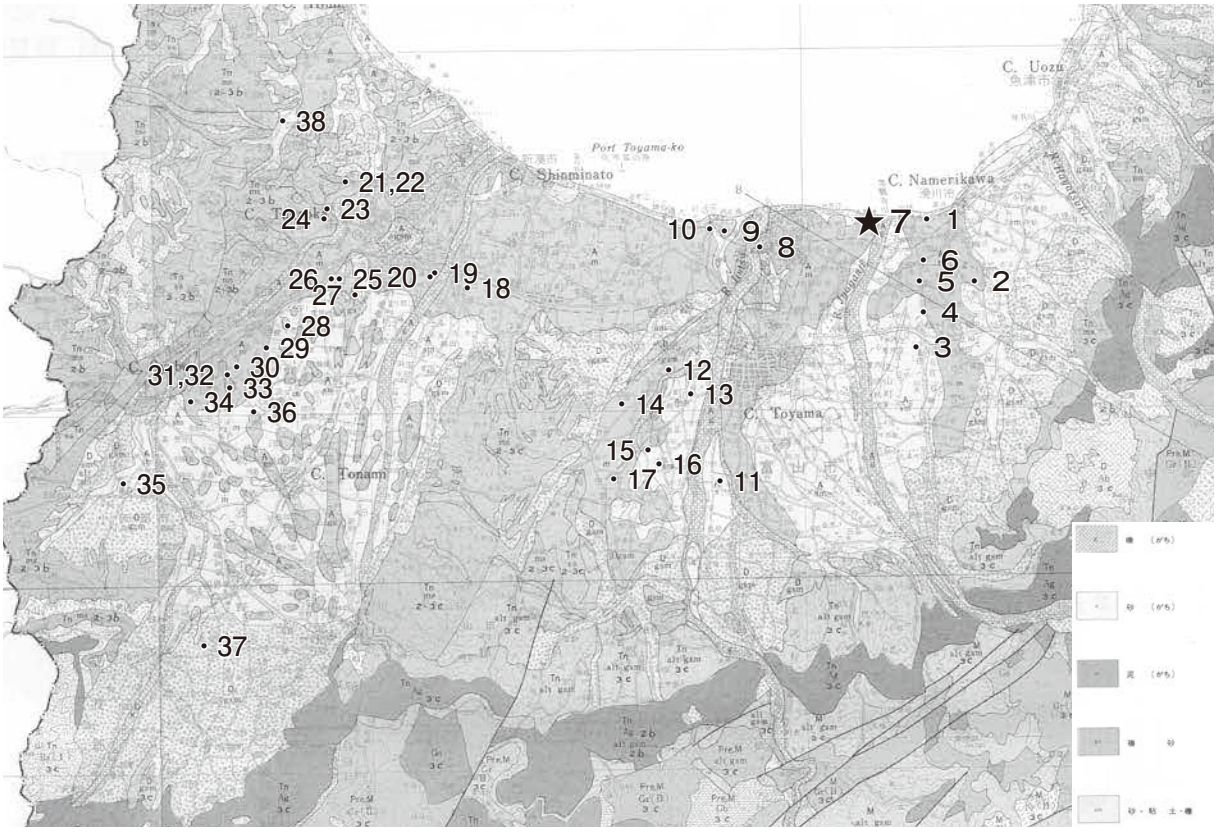
実は、安政飛越地震での浜黒崎地区における被害について書かれた文献がある。一つは金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵の『加越能文庫』にある『魚津御用言上留』で、その第四冊に記述がある。前田一郎による翻刻（前田2018）では、「一、六百九拾歩斗　浜里村領御田地所々地割居相損シ候躰」とあり、690歩（約2,281㎡）に地割れ被害があったと記されている。

もう一つは富山大学人文学部日本史研究室所蔵の『広田組十村岩城家文書』にある『安政五年大地震ニテ村々田地損所并潰家等書上帳』である。鈴木景二らによる翻刻（鈴木・熊谷2010）では、「草高千六百四拾壱石之内　一、六百五拾歩程　御田地　浜黒崎村　但、所々割レ弐三寸程宛之口明居、割口より砂水吹出申候」とあり、浜黒崎村では草高1641石のうち約650歩（約2,148㎡）に被害がみられ、各所で幅２～３寸（６～９㎝）の噴砂（砂脈）がみられたとある。また、家屋の全壊３軒、家屋の半壊８軒、屎納屋全壊２棟と報告されていて、大きな被害があったことが記されている。この「砂水吹出」が液状化現象による噴砂なのだろう。

今回の調査では、地震の痕跡は噴砂のみの１か所だが、その幅は８㎝で、『広田組十村岩城家文書』にある噴砂幅「弐三寸程」≒６～９㎝に合致する。安政飛越地震は、県内各地の遺跡でその痕跡がみつかっているが、文献とあわせて考えられることは数少なかった。今回の調査成果は、文献と遺跡や遺構とを考えていく上で大変重要といえるだろう。

令和６（2024）年１月１日、能登半島を震源とする大きな地震（能登半島地震）が発生した。震度は能登半島で最大震度７、富山県内でも観測史上はじめてとなる震度５強を計測した。この地震の影響で、県内においても氷見市や射水市の海岸線を中心に液状化現象による噴砂を確認している。幕末以来、大きな地震に見舞われてこなかった富山県ではあるが、いつ大きな地震が起きるかは想定できない。浜黒崎町畑遺跡の噴砂は、今後の地震研究や防災を考える上でも大きく寄与できる資料と言えよう。

（町田賢一）



第55図　富山県内の噴砂確認遺跡（『土地分類図（表層地質図　富山県）』1973を改変）

第18表　富山県内の噴砂確認遺跡一覧

	遺跡名	市町村	調査年	遺跡の時期	地震痕跡	噴砂(幅)cm	地震痕跡推定時期	文献
1	魚躬	滑川市	1998	弥生～中世	噴砂	不明	不明	野末1999
2	大永田西	上市町	2022	古代	噴砂	不明	1858年（飛越地震）？	金三津2023
3	浦田	舟橋村	1998・1999	弥生～近世	噴砂	5	古代	橋本他1998
4	清水堂南	富山市	1999	古墳～中世	噴砂	10	不明	鹿島他2000
5	水橋金広・中馬場		2022	古代	噴砂	10	1858年（安政飛越地震）？	岡田編2023
6	小出城跡		2005	中世	噴砂、地層のずれ	不明	1860±50年（安政飛越地震）	酒井他2007
7	**浜黒崎町畑**		2023	縄文～近世	噴砂	8	1858年（安政飛越地震）？	**本書**
8	千原崎		1999	中世～近世	噴砂	8	不明	鹿島他2001
9	四方背戸割		1998・2005・2022	弥生	噴砂	20	1586年（天正地震）、1858年（安政飛越地震）	小山田1999、酒井他2006、堀内2023
10	打出		2004	弥生～近世	噴砂	40	1586年（天正地震）と1858年（安政飛越地震）	寒川2006
11	任海宮田		1997	古代～中世	噴砂	10	1586年（天正地震）もしくは1858年（安政飛越地震）	近藤他1998
12	金屋南		1996	中世	噴砂	5	1586年（天正地震）と1858年（安政飛越地震）	寒川2006
13	羽根下立		2008	縄文～近世	噴砂	不明	中世以前	中川他2011
14	友坂		1992	古代～近世	噴砂	15	1586年（天正地震）	岡本他1993
			1996	古代～近世	噴砂	4	1586年（天正地震）	片岡他1997
15	砂子田Ⅰ		2000	古代～近世	噴砂	8	中世以降	青山2001
			2002・2003	古代～近世	噴砂	50	1586年（天正地震）もしくは1858年（安政飛越地震）	細辺他2004
			2004	古代	噴砂	20	近世以降	細辺他2005
16	中名Ⅵ		1999	古代～近世	噴砂	15	中世以降	中村編2005
17	南部Ⅰ		1999	古墳～中世	噴砂	2	古墳時代前期以降	堀内2000
			2011	弥生～近世	噴砂	50	弥生終末期～古墳初頭	堀内2014
18	二口油免	射水市	1998	弥生～古代	噴砂か	不明	不明	尾野寺他1999
19	井口本江	高岡市	2008	縄文～近世	噴砂	100	古代～中世	島田2013
20	出来田南		2013	古代～近世	噴砂	150	８Ｃ後半以前	町田2015
21	板屋谷内Ｂ古墳群		2004	古墳	噴砂	20	古墳以降	金三津他編2008
22	板屋谷内Ｃ古墳群		2004	古墳	噴砂、地すべり	12	古墳以降	金三津他編2008
23	岩坪岡田島		2000～2001	縄文～近世	噴砂、地割れ、地層の変形	5	縄文～古代、1586年（天正地震）、1858年（安政飛越地震）	寒川2007
24	手洗野赤浦		1999	中世～近世	噴砂	100	1858年（安政飛越地震）	寒川2007
25	石塚		1995	弥生～中世	噴砂	不明	中世以前	山口他1996
			1996	縄文～弥生	噴砂、地割れ	8	縄文晩期以降	荒井1997
			1997	弥生～近代	噴砂	40	中世以前	山口1998
			2005	弥生～近世	噴砂	50	863年（貞観地震）	酒井他2007
26	石塚蜻保		2008～2011	縄文～中世	噴砂、地割れ	40	縄文晩期、1586年	根津2013
27	下佐野		2009・2010	弥生～近世	噴砂	10	1858年（安政飛越地震）	酒井他2013
28	下老子笹川		1997	縄文～近世	噴砂	30	縄文晩期以降、弥生後期、古代以降、1858年（安政飛越地震）	町田編2006
			2008	弥生	噴砂	35	120±15年（弥生後期）	酒井他2014
29	江尻		2009	縄文～近世	噴砂	14	中世以降	越前編2014
30	開蔀大滝		1993	中世～近世	噴砂	20	1586年（天正地震）	寒川2000
31	石名田木舟		1994～1995	古代～中世	噴砂	60	1586年（天正地震）または1858年（安政飛越地震）	寒川2002
			1994	古代～中世	噴砂	5	1586年（天正地震）または1858年（安政飛越地震）	寒川1995
			1996	中世	噴砂	不明	1586年（天正地震）と1858年（安政飛越地震）	栗山他1997
32	木舟城跡		1997～2000	中世	噴砂、地すべり	20	1586年（天正地震）または1858年（安政飛越地震）	寒川2002
33	五社	小矢部市	1992	古墳～中世	噴砂・断層	1	中世前半以降	河西1993
			1993	古代	噴砂	不明	1586年（天正地震）または1858年（安政飛越地震）	伊藤1994
34	芹川		2018	古代～近世	噴砂	不明	古代以前	常深2019
35	平田・藤森		2018	弥生～中世	噴砂、地割れ	不明	1586年（天正地震）または1858年（安政飛越地震）	朝田編2019
36	御館山館跡	砺波市	2012	中世～近世	噴砂、地割れ	10	1858年（安政飛越地震）	酒井他2014
37	梅原落戸	南砺市	1994	縄文～中世	噴砂	4	中世	久々他1995
38	惣領浦之前	氷見市	2003	縄文～近世	噴砂、地割れ	5	近世	新宅他編2010

引用・参考文献

青山晃2001「砂子田Ⅰ遺跡　Ａ地区」『埋蔵文化財調査概要－平成12年度－』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

青山晃編2008『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅲ』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

青山晃2024『水橋荒町・辻ヶ堂遺跡発掘調査報告』（公財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査課

朝田要編2019『平田・藤森遺跡発掘調査報告書』小矢部市教育委員会

安達志津・古川知明2002『富山市水橋荒町・辻ヶ堂遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会

荒井隆1997『市内遺跡調査概報Ⅵ』高岡市教育委員会

伊藤隆三1994『平成５年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報』小矢部市教育委員会

卜部厚志・酒井英男・麻柄一志2017「富山湾沿岸における潟湖の成立年代　－貝塚および低湿地遺跡の成立に関して－」『大境』第36号　富山考古学会

越前慎子2002「木舟城周辺の遺跡にみられる地震痕跡」『古代学研究』158　古代學研究會

越前慎子・町田賢一2002「手洗野赤浦遺跡・岩坪岡田島遺跡における地震痕跡」『古代学研究』158　古代學研究會

越前慎子編2007『岩坪岡田島遺跡　手洗野赤浦遺跡　近世北陸道遺跡発掘調査報告』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

越前慎子・高梨清志2007「富山県の様相」『第20回北陸中世考古学研究会　資料集　中世前期北陸のカワラケと輸入陶磁器・施釉陶器・瀬戸美濃製品』北陸中世考古学研究会

越前慎子編2014『下老子笹川遺跡　江尻遺跡発掘調査報告』（公財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

岡田一広編2023『富山市水橋金広・中馬場遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会

岡本淳一郎・伊佐智法1993『富山県婦中町　友坂遺跡発掘調査報告Ⅱ』婦中町教育委員会

尾野寺克実・中井英策1999『富山県大門町　二口油免遺跡第Ⅲ次Ａ地区発掘調査概報』大門町教育委員会

小山田吉孝1999「砂の液状化痕跡に関する分析」『富山市四方背戸割遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会

河西健二1993「五社遺跡調査で思ったこと」『埋蔵文化財年報（４）　平成４年度』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

鹿島昌也1996『富山市　野田・平榎遺跡　野中新長幅遺跡　宮条南遺跡　高島島浦遺跡』富山市教育委員会

鹿島昌也・安達志津2000『富山市水橋　清水堂南遺跡』富山市教育委員会

鹿島昌也・古川知明2001『富山市千原崎遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会

鹿島昌也2005「地震と考古学について」『富山市の遺跡物語』第６号　富山市教育委員会埋蔵文化財センター

片岡英子・堀内大介1997『富山県婦中町　友坂遺跡発掘調査報告Ⅲ』婦中町教育委員会

金三津道子・新宅茜編2008『板屋谷内Ｂ・Ｃ古墳群　堂前遺跡発掘調査報告』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

金三津道子2012「安吉遺跡」『水上遺跡　赤井南遺跡　安吉遺跡　棚田遺跡　本江大坪Ⅰ遺跡　発掘調査報告』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

金三津道子編2015『平岡遺跡　発掘調査報告』（公財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

金三津道子2020『水橋池田舘遺跡　水橋池田舘Ⅱ遺跡　水橋中村遺跡　発掘調査報告』（公財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

金三津道子2023「県営・国営農地整備事業の試掘調査」『埋文とやま』vol.162　富山県埋蔵文化財センター

久々忠義・島田修一・河西健二・境洋子1995『富山県福光町梅原落戸遺跡群Ⅱ』福光町教育委員会

久々忠義・佐藤聖子1996『富山県福光町梅原落戸遺跡群Ⅲ』福光町教育委員会

久々忠義2000「富山県道路遺構集成」『大境』第20・21号　富山考古学会

栗山雅夫・越前慶祐1997『富山県福岡町　石名田木舟遺跡発掘調査報告書』福岡町教育委員会

経済企画庁総合開発局1973『土地分類図（表層地質図－平面的分類図－）富山県』（財）日本地図センター

小島俊彰1978『富山県滑川市　安田古宮遺跡　発掘調査報告書』滑川市教育委員会

小島俊彰2008「蜆ヶ森式」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

小林高範・堀沢祐一1994『富山市浜黒崎悪地遺跡発掘調査概要』富山市教育委員会

小林高範・堀沢祐一1995『富山市　浜黒崎悪地遺跡　野中新長幅遺跡　野田・平榎遺跡』富山市教育委員会

近藤顕子・安達志津1998『富山市内遺跡発掘調査概要Ⅱ　任海宮田遺跡』富山市教育委員会

近藤浩二2012「安政大地震（飛越地震）における液状化被害の再検討－「魚津御用言上留」を中心に－」『災害・復興と資料』第１号　新潟大学災害・復興科学研究所危機管理・災害復興分野

近藤浩二2013「歴史地震における液状化の様相－安政飛越地震を事例に－」『富山史壇』第169・170合併号　越中史壇会

酒井英男・岸田徹・不破裕司・山本雄治2006「富山市四方背戸割遺跡で検出された噴砂の考古地磁気と地中レーダー探査による研究」『富山市四方背戸割遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会

酒井英男・松延礼佳・岸田徹・伊藤孝・野垣好史2007「富山市小出城跡に現れた小断層の考古地磁気研究」『富山市小出城跡発掘調査報告』富山市教育委員会

酒井英男・松延礼佳・菅頭明日香2007「高岡市石塚遺跡の噴砂と堆積物の考古磁気研究」『石塚遺跡調査報告』高岡市教育委

員会
酒井英男･泉吉紀･鹿島昌也･野垣好史2009「富山市小出城跡における歴史地震の研究－安政飛越地震による被害の検証－」『立山カルデラ砂防博物館研究紀要』第10号　富山県立山カルデラ砂防博物館
酒井英男・松延礼佳・菅頭明日香2013「高岡市下佐野遺跡の焼土および噴砂の磁化と年代の研究」『下黒田遺跡　下佐野遺跡　諏訪遺跡　蔵野町東遺跡　蔵野町遺跡　駒方南遺跡発掘調査報告』（公財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
酒井英男・名古屋岳秀・塚田訓子2014「砺波市御館山館跡で認められた噴砂の磁化の研究」『御館山館跡発掘調査報告』砺波市教育委員会
酒井英男・泉吉紀・菅頭明日香・越前慎子2014「高岡市下老子笹川遺跡の焼失竪穴建物の焼土の磁化の研究」『紀要　富山考古学研究』第17号　（公財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
匂坂友秋・越間瑞穂2003『富山県朝日町　柳田遺跡発掘調査報告書』朝日町教育委員会
寒川旭1995「石名田木舟遺跡地震跡」『富山県福岡町　石名田木舟遺跡発掘調査報告書』福岡町教育委員会
寒川旭2000「開蓙大滝遺跡で検出された液状化現象の痕跡」『開蓙大滝遺跡　地崎遺跡　発掘調査報告』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
寒川旭2002「石名田木舟遺跡で検出された液状化現象の痕跡」『石名田木舟遺跡発掘調査報告』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
寒川旭2002「木舟城推定地で検出された地震の痕跡」『富山県福岡町　木舟城跡発掘調査報告』福岡町教育委員会
寒川旭・越前慎子・町田賢一2002「富山平野の北西縁で検出された地震の痕跡」『活断層・古地震研究報告』第２号　産業技術総合研究所　地質調査総合センター
寒川旭2004「木舟城の地震考古学」『戦国の終焉～よみがえる　天正の世の　いくさびと～』木舟城シンポジウム実行委員会
寒川旭2006「金屋南遺跡で検出された液状化現象の痕跡」『富山市金屋南遺跡発掘調査報告書Ⅲ』富山市教育委員会
寒川旭2006「打出遺跡の地震痕跡について」『富山市打出遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
寒川旭2007「手洗野赤浦遺跡・岩坪岡田島遺跡で検出された地震跡」『岩坪岡田島遺跡　手洗野赤浦遺跡　近世北陸道遺跡発掘調査報告』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
寒川旭2010『秀吉を襲った大地震　地震考古学で戦国史を読む』平凡社新書504　平凡社
柴口真澄1995「地震のイミ」『埋蔵文化財年報（５）　平成５年度』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
柴口真澄1996「地震のイミⅡ」『埋蔵文化財調査概要－平成７年度－』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
柴口真澄1998「地震のイミⅢ」『紀要　富山考古学研究』創刊号　（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
島田亮仁2012『開蓙大滝遺跡　五社遺跡　五社条里遺跡　水牧遺跡　下川原遺跡　発掘調査報告』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
島田亮仁2013『井口本江遺跡発掘調査報告』（公財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
新宅茜・朝田亜紀子編2010『惣領浦之前遺跡　惣領野際遺跡　発掘調査報告』(財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
新宅茜編2014『大野中遺跡　七分一堂口遺跡　加納谷内遺跡　発掘調査報告』（公財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
新宅輝久・藤田慎一2004『富山市打出遺跡　発掘調査報告書』富山市教育委員会
新宅輝久・阿部将樹・伊藤雅和・藤田慎一2008『富山市北押川Ｂ遺跡　発掘調査報告書』富山市教育委員会
鈴木景二・熊谷隆之2010『越中国新川郡　広田組十村岩城家文書・田畑村肝煎吉田家文書　目録』富山大学人文学部日本史研究室
高野靖彦2018『安政飛越地震の史的研究』桂書房
竹内理三編1979『角川日本地名大辞典　16　富山県』角川書店
田中道子編2018『平榎亀田遺跡　浜黒崎野田・平榎遺跡　横越水窪遺跡　横越遺跡　発掘調査報告』（公財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
田中道子編2022『県営農地整備事業浜黒崎地区埋蔵文化財試掘調査報告』富山県埋蔵文化財センター
常深尚編2019『芹川遺跡発掘調査報告書』小矢部市教育委員会
中川道子・町田尚美編2011『羽根下立遺跡発掘調査報告』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
中村亮仁編2005『中名Ⅴ・Ⅵ遺跡　砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
根津明義2013『石塚蜻保遺跡調査報告』高岡市教育委員会
野末浩之1999『平成10年度滑川市埋蔵文化財調査概報』滑川市教育委員会
橋本正春・斎藤隆1998『富山県舟橋村　浦田遺跡　発掘調査報告書』舟橋村教育委員会
早川荘作1936『越中史前文化』中田書店
藤井昭二1992「富山平野」『アーバンクボタ』31　クボタ
藤井昭二編1996『古地震被害調査研究報告書』藤井環境地質研究所
藤井昭二編1997『古地震被害調査研究報告書　その二（平成８年度)』藤井環境地質研究所
古川知明編2002『富山市岩瀬天神遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
保科齊彦編2000『浜黒崎の近現代』浜黒崎郷土史編纂委員会

細辻嘉門・河竹明子2004『富山県婦中町　砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告』婦中町教育委員会
細辻嘉門・福山俊彰2005『富山県婦中町　砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告Ⅱ』婦中町教育委員会
細辻真澄2001「任海宮田遺跡出土の土錘について」『紀要　富山考古学研究』第４号　（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
堀内大介2000『富山県婦中町　南部Ⅰ遺跡発掘調査報告Ⅱ』婦中町教育委員会
堀内大介2014「南部Ⅰ遺跡」『富山市内発掘調査概要Ⅹ』富山市教育委員会
堀内大介2023「四方背戸割遺跡　四方荒屋遺跡」『富山市の遺跡物語』№24　富山市教育委員会埋蔵文化財センター
前田一郎2006「安政の大災害関係史料（一）」『立山カルデラ砂防博物館研究紀要』第７号　富山県立山カルデラ砂防博物館
前田一郎2018「安政の大災害関係史料（六）」『立山カルデラ砂防博物館研究紀要』第15号　富山県立山カルデラ砂防博物館
町田賢一2002「富山県の地震痕跡確認遺跡」『古代学研究』157　古代學研究會
町田賢一編2006『下老子笹川遺跡発掘調査報告』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
町田賢一2011「蜆ヶ森式土器について－富山・石川における前期後葉の土器様相－」『第24回縄文セミナー　縄文前期土器研究の現状と課題』縄文セミナーの会
町田賢一編2014『小竹貝塚発掘調査報告』（公財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
町田賢一2014「『小竹貝塚発掘調査報告』遺物補遺」『紀要　富山考古学研究』第17号　（公財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
町田賢一2022「“福浦上層式”からみえるもの」『大境』第41号　富山考古学会
町田尚美2015『出来田南遺跡発掘調査報告』（公財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
宮田進一・島田美佐子・田中道子・河西健二1994『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
八尾隆夫・河野典夫・坂田雅人2007『北堀切遺跡Ⅵ－１区発掘調査報告書』黒部市教育委員会
山口辰一・荒井隆1996『市内遺跡調査概報Ⅳ』高岡市教育委員会
山口辰一1998『市内遺跡調査概報Ⅷ』高岡市教育委員会
山本正敏・岡本淳一郎・中川道子・三島道子1998『五社遺跡発掘調査報告』（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

航空写真

１．1946年７月22日撮影（国土地理院　USA-M203-A-7-26）　２．2021年６月10日撮影（国土地理院　CCB20212-C9-4）

図版２

浜黒崎町畑遺跡Ａ地区　全景

１．全景（北東から）　２．全景（西から）

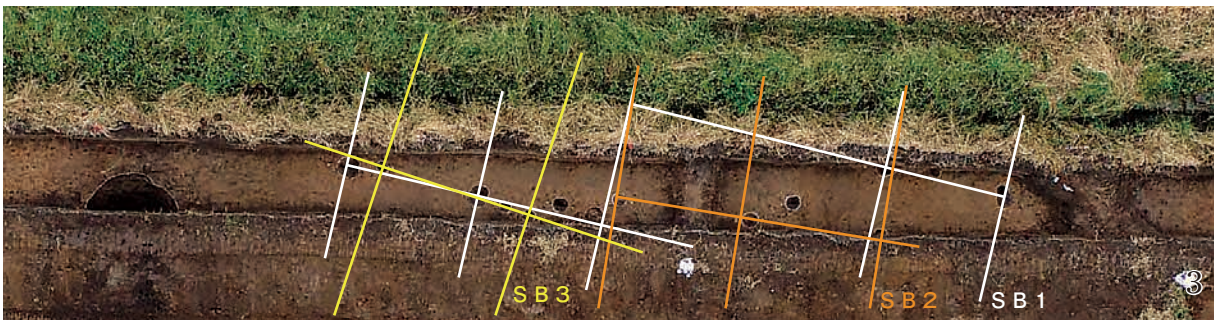
浜黒崎町畑遺跡Ａ地区　遺構（１）

１．ＳＤ１（北から）　２．ＳＤ１断面（北から）　３．ＳＤ２（北から）　４．ＳＤ２断面（北から）
５．ＳＤ３･４（北から）　６．ＳＤ３断面（北から）　７．ＳＤ４断面（北から）　８．ＳＫ５断面（北から）

図版４

浜黒崎町畑遺跡Ａ地区　遺構（２）

１．ＳＤ６（西から）　２．ＳＤ６断面（西から）　３．ＳＤ７･８（南西から）　４．ＳＤ７･８断面（西から）
５．ＳＤ９･ＳＫ10断面（西から）　６．ＳＤ11断面（北から）　７．噴砂（南から）　８．噴砂断割（北から）



浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　全景

１．遠景（南から）　２．全景（真上から）　３．掘立柱建物群全景（真上から）

図版６

浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　遺構（１）

１．ＳＤ30･33（東から）　２．ＳＤ29･30（西から）　３．ＳＤ29土師器出土状況　４．ＳＤ29断面（南から）
５．ＳＤ30断面（南から）

浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　遺構（２）

１．ＳＤ30土錘出土状況（南から）　２．ＳＤ30須恵器出土状況（西から）　３．ＳＤ33断面（南から）　４．ＳＤ31･ＳＰ32断面（西から）
５．ＳＤ33中世土師器出土状況（南から）　６．ＳＤ33･ＳＫ35断面（北から）７．ＳＤ44断面（南から）　８．ＳＥ26断面（北から）

図版８

浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　遺構（３）

１．ＳＫ28断面（北から）　２．ＳＫ36･37（西から）　３．ＳＫ39断面（北から）４．掘立柱建物（東から）
５．ＳＰ12断面（西から）　６．ＳＰ13･14断面（南から）　７．ＳＰ15断面（北から）　８．ＳＰ17断面（北から）

浜黒崎町畑遺跡Ｂ地区　遺構（４）

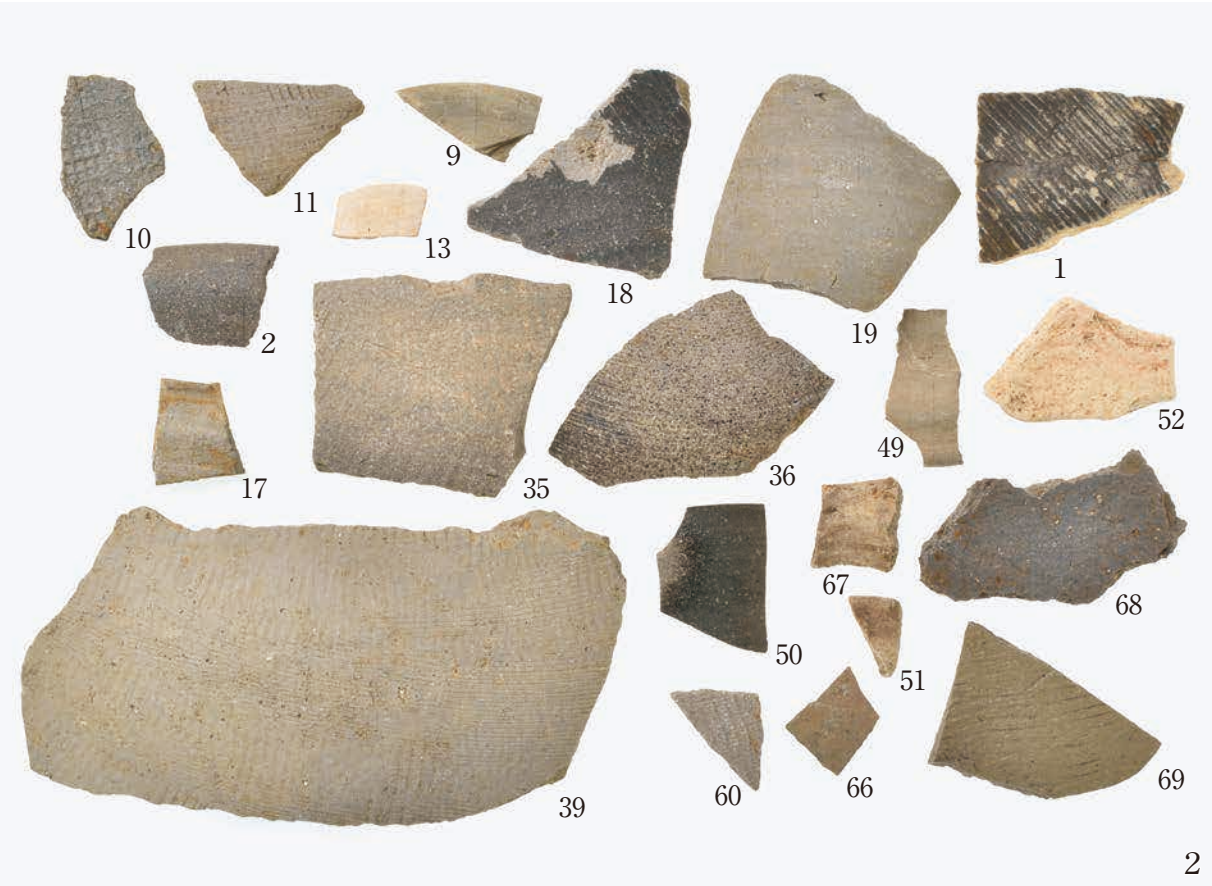
１．ＳＰ19断面（北から）　２．ＳＰ20断面（北から）　３．ＳＰ21断面（北から）　４．ＳＰ24断面（北から）
５．ＳＰ25断面（南から）　６．ＳＰ27断面（西から）　７．ＳＰ32断面（西から）　８．ＳＰ40～42断面（東から）

浜黒崎町畑遺跡Ｃ地区　全景

１．全景（南東から）　２．全景（北東から）

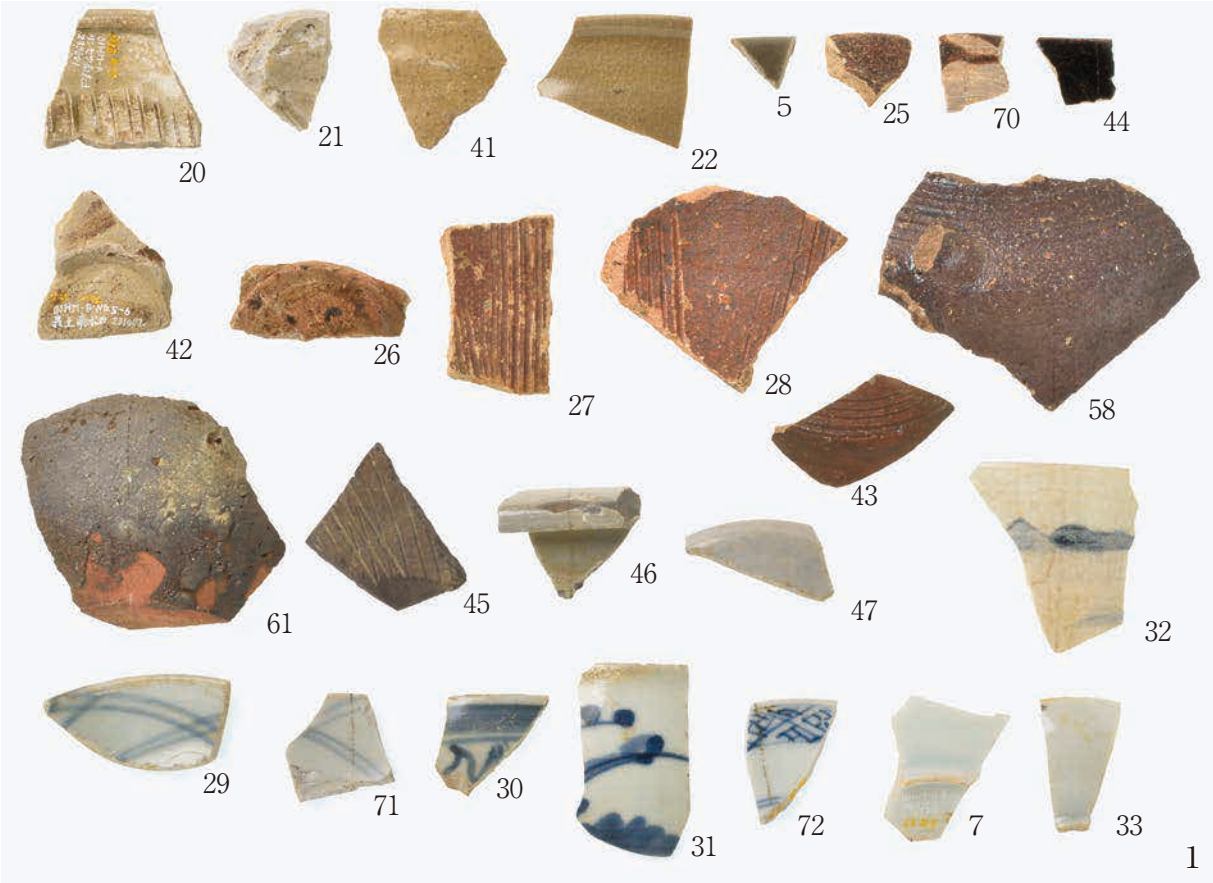
浜黒崎町畑遺跡Ｃ地区　遺構

１．ＳＤ45･68断面（北東から）　２．ＳＤ46断面（南東から）　３．ＳＰ57断面（南から）４．ＳＫ58断面（南から）
５．ＳＢ４（北から）　６．ＳＰ49断面（東から）　７．ＳＰ50断面（東から）　８．ＳＰ59･60･66断面（西から）



浜黒崎町畑遺跡　出土遺物（1）

1.土器　2．陶磁器



浜黒崎町畑遺跡　出土遺物（2）・作業風景

1．陶磁器　2．A地区機械掘削（北東から）　3．A地区遺構発掘（西から）
4．B地区遺構発掘（西から）　5．C地区遺構検出（南から）

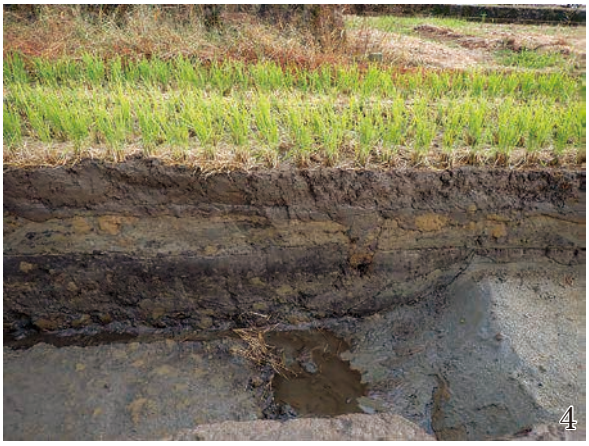
浜黒崎悪地遺跡Ａ地区　全景・遺構（１）

１．全景（西から）　２．溝群（南西から）　３．ＳＤ１断面（北から）　４．ＳＤ２～４断面（北から）
５．ＳＤ５（北から）

浜黒崎悪地遺跡Ａ地区　遺構（２）

１．ＳＤ５断面（北から）　２．ＳＰ６～８断面（北から）　３．ＮＲ10断面（東から）　４．ＮＲ９断面（北から）
５．機械掘削（東から）　６．遺構検出（西から）　７．遺構発掘（西から）　８．ＮＲ９水没状況（東から）

図版16



浜黒崎悪地遺跡Ｂ地区　全景・遺構

１．全景（西から）　２．ＮＲ43（北西から）　３．ＮＲ43断面（北東から）４．ＮＲ43断面（北から）
５．壁面清掃（西から）

浜黒崎悪地遺跡Ｃ地区　全景

１．北側全景（西から）　２．東側全景（南から）

図版18

浜黒崎悪地遺跡Ｃ地区　遺構

１．ＳＤ20･21断面（北から）　２．ＳＤ23断面（南から）　３．ＳＤ24断面（南から）　４．ＳＤ30断面（西から）
５．ＳＫ22断面（西から）　６．ＳＫ26断面（東から）　７．ＳＫ29断面（西から）　８．ＳＰ37～42（南東から）

浜黒崎悪地遺跡Ｄ地区　全景・遺構

１．全景（南から）　２．ＳＤ11断面（西から）　３．ＳＤ12･19断面（南から）
４．ＳＰ14断面（南から）　５．ＳＫ13･18（北から）

浜黒崎悪地遺跡　出土遺物

1．土器　2．土器･陶磁器

報告書抄録

ふりがな	はまくろさきまちはたいせき　はまくろさきあくぢいせき　　はっくつちょうさほうこく
書名	浜黒崎町畑遺跡　浜黒崎悪地遺跡　発掘調査報告
副書名	県営農地整備事業浜黒崎地区に伴う埋蔵文化財発掘報告
巻次	
シリーズ名	富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第81集
編著者名	町田賢一
編集機関	公益財団法人富山県文化振興財団　埋蔵文化財調査課
所在地	〒930-0887　富山県富山市五福4384番１号　TEL　076-442-4229
発行年月日	西暦2024年３月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はまくろさきまちはたいせき 浜黒崎町畑遺跡	とやまし 富山市 はまくろさき 浜黒崎	16201	201031	36度 45分 23秒	137度 16分 51秒	20230522～20231023	384.0	県営農地整備事業浜黒崎地区に伴う事前調査
はまくろさきあくぢいせき 浜黒崎悪地遺跡	とやまし 富山市 はまくろさき 浜黒崎	16201	201036	36度 44分 54秒	137度 16分 32秒	20230605～20231121	451.0	

所収遺跡名	種別	主な時代	遺構	遺物	特記事項
浜黒崎町畑遺跡	集落	古代～近世	掘立柱建物　4 溝　19 井戸　1 土坑　13 柱穴・ピット　22 噴砂　1	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、珠洲、瀬戸美濃、青磁、土師質土器、越中瀬戸、肥前系陶磁器、不明陶磁器、炉壁、土錘	２本の溝を基軸とした掘立柱建物を含む海岸近くにある中世の集落を検出。
浜黒崎悪地遺跡	集落	古墳～近世	溝　14 土坑　6 柱穴・ピット　20 自然流路・谷　3	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、白磁、越中瀬戸、肥前系陶磁器	常願寺川の旧支流に囲まれた微高地を利用した古代～中世の集落を検出。

要約

浜黒崎町畑遺跡・浜黒崎悪地遺跡は、西を神通川、東を常願寺川、北を富山湾にはさまれた沖積地にある。調査はいずれも排水路部分の狭小な地区であったため全容はつかめないが、浜黒崎町畑遺跡では中世の掘立柱建物・井戸・溝からなる集落を検出した。また、安政飛越地震によるものとみられる墳砂も検出した。

浜黒崎悪地遺跡では柱穴・ピットは検出したが建物は認知できなかった。けれども、その他の遺構から常願寺川の旧支流とみられる自然流路とその間の微高地を利用した集落の可能性が明らかになった。

出土遺物は縄文時代から近代まであり、長期間にわたり当地に人の往来があったことが判明した。

2024（令和６）年３月１日　印刷
2024（令和６）年３月15日　発行

富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第81集

浜黒崎町畑遺跡
浜黒崎悪地遺跡　発掘調査報告

－県営農地整備事業浜黒崎地区に伴う埋蔵文化財発掘報告－

編集・発行　公益財団法人富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査課
〒930－0887　富山市五福4384番１号
TEL　076－442－4229

印　　刷　とうざわ印刷工芸株式会社
〒939－2745　富山市婦中町広田5210
TEL　076－466－2711